下谷に以教授諸生に而及其赴京也。使雄琴主事に亡幾執齋沒于京に雄琴亦之大洲に於是侯乃移明倫堂于大洲に執齋又嘗屬長崎鎮臺に得王文成公畫像二幅於彼邦に一則藏諸近江藤樹書院に今尚各存云。

梁田邦美。本名邦彦。字景鸞。小字才右衛門。號蛻巖。武藏人。仕赤石侯。

蛻巖生而穎悟。幼學人見鶴山。漸長才識高遠。尤工詩。才既絕倫。而鑽研至老。不止。年二十六。介鶴山見

梁田邦美

梁田邦美、本の名は邦彦、字は景鸞、小字は才右衛門、蛻巖と號す。武藏の人、赤石侯に仕ふ。

蛻巖生れながらにして穎悟なり。幼にして人見鶴山に學ぶ。漸く長じて才識高遠、尤も詩を工にす。才既に絕倫にして、鑽研老に至つて止まず。年二十六のとき、鶴山を介して、白石に見ゆ。白石妄に人を容れず。獨り蛻巖の才を異とし、之と交る肫肫として中底を見す。江邨北海曰く、蛻巖の集を讀むに、譬へば猶ほ崑崙の邱に上るに、步步是れ玉、桁櫱の林に入るに、枝枝是れ香なるがごとし。詩は此に至つて宜しく遺論なかるべし。而るに猶ほ未だ善を盡さざる者有るは何ぞや。蛻巖才を用ふる太だ過ぎたるのみ。張茂先、陸士衡に謂つて曰く、人常に才の少きを恨む。而るに子は更に其多きを患ふと。余蛻翁に於て復云はんと。

白石。白石不二妄容一人。獨異二蛻巖之才。與之交肫肫見二中底。江邨北海曰。讀二蛻巖之集。譬猶下上二崑崙之邱。步步是玉。入二桁櫱之林。枝枝是香。詩至二於此一宜無遺論。而猶有二未盡一善者一何也。蛻巖用才太過耳。張茂先謂二陸士衡一曰。人常恨二才少一。而子更患二其多一。余於二蛻翁一復云。

● 研究すること年老いても止まず　● ねんごろにして腰の座まぢうちもける　● 鶴鶴を插む餘地無し

蛻巖既に伊洛の學を爲し、又此邦の神道を信じ、又博く釋典を讀む。恒に言つて云く、宣聖の學、東方の道、乾毒の教は、鼎足して相悖らずと。

蛻巖既爲二伊洛學一。又信二此邦神道一。又博讀二釋典一。恒言云。宣聖之學。東方之道。乾毒之教。鼎足不二相悖一。

● 程子の學　● 佛書　● 儒學神道佛教は、鼎の足の如く三方對立して互に相もとらず

少時專ら武を談じ兵を說き、其の古の勇將戰士を評するや、論議慷慨、烈丈夫

少時專談レ武

說レ兵。其評ニ古之勇將戰士一也。論議慷慨。有ニ烈丈夫風一。目或及ニ周瑜赤壁。謝玄淝水。織田信長桶狹間。上杉謙信川中島等事一。則扼レ腕按レ劒。躍如色飛。當世名爲ニ鄙儒一。年四十八。事ニ赤石侯一。先レ是與レ世齟齬。游仕屢不レ遂。家唯壁立。其詠レ雪詩序云。余頻年窮甚。書籠中二四子一外。有ニ詩韻一册。徐文長集半部一。又嘗作ニ不レ能買レ書詩一。有ニ車鄰架天地滿一。誰信空拳猶突圍之句。

の風有り。言或は周瑜の赤壁、謝玄の淝水、織田信長の桶狹間、上杉謙信の川中島等の事に及べば、則ち腕を扼し劍を按じ、躍如として色飛ぶ。當世名づけて霸儒と爲す。年四十八にして、赤石侯に事ふ。是より先世と齟齬し、游仕屢〻遂げず。家は唯壁の立てるのみ。其雪を詠ずる詩の序に云ふ、余頻年窮甚し、書籠の中四子を除く外、詩韻一册、徐文長集半部ありと。又嘗て書を買ふこと能はざる詩を作る。惠車鄰架天地に滿つ。誰か信ぜん空拳猶ほ圍を突くを、の句有り。

● 吳の周瑜赤壁に魏の曹操を壞破す ● 晉の謝玄淝水に苻堅の軍を淝水に壞にす ● 腕をとりしぼり劍の柄を握り顏色飛び立つ如し ● 竹にて編ゆる書ばこ ● 四書 ● 惠子は五車の書を有し、李鄰鄰に封ぜられ藏書多かりし故事 ● から手にて敵の重圍を突く、書無くして眼に志すをいふ

嘗小集賦レ詩。有ニ一人一。以ニ石見國如レ硯求レ對。苦思皆未レ得。峨巖忽朗吟曰。竹生島似レ笙。四座驚歎。

峨巖以ニ詩豪一獨ニ一時一。而意見屢見屢改。格調數數變。皆足ニ以驚レ人。自言初學ニ宋。歐蘇面旁放翁簡齋。中年學ニ唐。兼ニ李杜一。兼飾以ニ錢劉諸家一。又退學ニ明。甘爲ニ王李傳鹿一。亡レ幾爲ニ袁中

嘗て小集詩を賦す。一人有り。石見の國は硯の如しを以て對を求む。苦思皆未だ得ず。峨巖忽ち朗吟して曰く、竹生島は笙に似たりと。四座驚歎す。

● 小なる會合

峨巖詩豪を以て一時を獨す。而も意見屢〻改り、格調數〻變ず。皆以て人を驚かすに足る。自ら言ふ初め宋を學び、歐蘇にして旁放翁簡齋なり。中年唐を學び、李杜を兼ね、錢劉諸家を以てす。又退いて明を學び、王李の銀鹿たるに甘ず。幾もなく袁中郎と爲り、徐文長と爲りて、遂に初唐を以て表準と爲し、弇州湖南を門戶と爲すと。鳴歸德に復する書に云ふ、一旦大夢覺め、宿酲解く。乃ち斷然開天を以て闕と爲し、七子を引と爲す。陽春の白雪奏する毎に彌〻高く、斗文の紫氣望む毎に彌〻昌なり。季子の裘敝貂ほ改むべく、呂虔の刀鈍尙ほ磨すべし。寧ろ王李の爲に履を取るも、敢へ

耶。爲二徐文長一。而遂以二物盛一唐。爲二我津一。弇州清南爲二門戶一。復二鳴鶴館一。會云。一旦大夢覺。窗醒解。乃斷然以二開天一爲レ開。七子爲レ引。陽春白雪。無レ奏レ彌高。斗文紫氣無レ望。彌昌。季子裘敝猶可レ改。呂虔刀鈍尚可レ磨。寧爲二王李一取レ履。不二敢鮮一。遂使下雨レ血之鷙爪。化爲レ食レ慵之柔吻上也。

て辭せず。遂に血を雨らすの鷙爪をして、化して(一九)椹を食するの柔吻たらしめんと。

一 歐陽修・蘇東坡　二 陶放翁・放枚　三 李白・杜甫　四 祖先　五 崇び讃るの意　六 鶴起と鶴鳴館　七 明王世貞と李攀龍の奴僕となりて滿足す。弇州公の蘇州にあるや再び鶴鳴館、豪僧銀刺始終之に贈ひ一故事　八 明の嘉靖道　九 成島鼎卿、字は時徳、號は錦江、東奥の人　十 ふつかまひ　十一 唐の開元、天寶時代　十二 絶安の七子なり、皆詩に秀る、孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應玚及び劉楨之なり　十三 詩詞の高だ高雅なるをいふ。文選　十四 玉貴と李攀龍とを斥す　十五 楮は宋玉對楚王問に出づ　十六 すぐれたる文筆　十七 やぶれたるかは衣　十八 玉貴と李攀龍とを斥す　十九 楮は鶴鳴館を贈じて芳好なりしむとの謂ならん

祇園瑜

祇園瑜、又の名は正卿、字は伯玉、一の字は斌、小字は與一郎、南海と號す。

祇園瑜。又名正卿。字伯玉。一字斌。小字與一郎。號二南海一。又號二鐵冠道人一。又號二親雷亭一。紀伊人。仕二本藩一。

南海受二業於木順菴一。自レ幼才調無雙。尤善レ詩。年甫十四。與二白石南山・芳洲・蘆洲一集二芳洲寓居一。卽席賦二逢馬有二歸思一云。遠遥二將軍一度二雪山一。九秋大漠劍華間。胡塵四起風悲裘。羌笛一聲月照レ關。却憶曾逢伯樂顧。長

又鐵冠道人と號し、又親雷亭とも號す。紀伊の人。本藩に仕ふ。

南海業を木順菴に受け、幼より才調無雙、尤も詩を善くす。年甫めて十四、白石・南山・芳洲・蘆洲と、芳洲の寓居に集り、卽席遊馬歸思有りを賦して云ふ、

遠く將軍を遥うて雪山を度る、九秋の大漠劍華の間、胡塵四起し風塞に悲む、羌笛一聲月照を照す、却つて恨む曾て逢ふ伯樂の顧、長く傷む未だ施頭の閒を得ざるを、沙場幾歲毛骨を摧く、何れの日か華山戰を休めて還らんと。

座に在る者皆舌を咋む。白石曰く、此詩雄渾悲壯、以て後來斯文に任ず可きをトするに足ると。又十五のとき鳶飛び魚躍る活潑潑地に、對するに光風霽月常惺惺法を以てす。芳洲稱して的對と爲す。

一 木下順庵　二 南都某衛、長崎の人、富山侯の儒官　三 松浦儀、播磨の人、對馬侯の家臣　四 榊原篁洲　五 遊境の征馬　六 御調と華山との調の大沙板の秋九月　七 遊察、國境のとりて　八 えびすの吹く笛　九

傷未レ得二施頭閉一。沙場幾歲攜二毛骨一。何日華山休レ戰還。在レ座者皆咋レ舌。白石曰。此詩雄渾悲壯。足二以卜一二後來可レ任二斯文一也。又十五寓飛魚躍活潑潑地。對以二光風霽月常惺惺法一。芳洲解答二的對一。

伯樂より軍馬として選ばれしを惜む　㊁ 未だ戰場に馳騁して休む際なきを傷む　㊂ 幾年かの間沙漠に身體を損す　㊃ 寒き長城　㊄ 特に常に明かなる法　㊅ あたれる對句

又十六。席上限二燭一寸一。探レ題賦二昇レ雲開レ星云。紫微遙裔彩雲迎。朱緯森森白玉京。月傍二九重一瑤闕冷。風飄二五色一羽衣輕。錦機夜靜星梭響。環珮秋深天步鳴。應是鈞天夢中到。不レ勞遣問謫君平。此詩不レ錄二于集中一。余嘗聞二人之論一之。

又十六のとき、席上燭一すを限り、題を探つて雲に昇り星を開くを賦して云ふ、紫微遙裔彩雲迎ふ、朱緯森森白玉京、月九重に傍うて瑤闕冷かに、風五色を飄して羽衣輕し、錦機夜靜かにして星梭響き、環珮秋深うして天步鳴る、應に是れ鈞天夢中に到るべし、勞せず遠く問ふ漢の君平と。此詩集中に錄せず。余嘗て人の之を論するを聞く。

㊀ 天帝の居、北斗星の北に位置す。其處よりはるかに彩雲來り迎ふ　㊁ 多くの星が森森と天帝の御座所なる白玉京に立ち列ぶ　㊂ 王の御殿　㊃ 天女のまとへる羽衣　㊄ 織女星が錦を織る梭の音　㊅ 梭に響べる環玉　㊆ 天女の歩み　㊇ 天帝の居　㊈ 梭は機、名は織、丙滿成都の賣卜者

嘗て自ら才を試み、一夜百首を得たり。時に年十七なり。（或は曰く十八と）人或は疑つて宿構と爲す。乃ち客を延き、席間題を立て、飲酒談笑して、草を起すに、泉の注ぐが如く、日中より夜半に及び、百首復成る。一句の前詩を蹈襲するなし。是に由つて名四方に爆布す。順菴詩を贈つて曰く、十八山東の妙、聲名世共に聞く、巵言甜きこと蜜の若く、藻思涌くこと雲の如し、人は稱す斗南の一、馬は空し冀北の羣、百篇日を終へず、行々看ん斯文に任ずるをと。

㊀ 順菴よりして贈答す　㊁ まねびたらふ　㊂ 遠名ひろまる　㊃ 十八歲にして山東の巧妙を發揮すとなり。山東とは天聖寶元の間范讓石曼卿等順菴を訪ひ留飲自ら樂にし盡法を守らず、世之を山東逸風と稱ふ故事　㊄ 美言　㊅ 伯樂一度冀北を過きて群馬空しきが如く、唯斯文以外愛才乏しきをいふ

亭を觀雷と名づけ、自ら之れが記を作る。其意新に語壯に、以て其非常の資を想ふに足る。孰か謂ふ南海の才獨り詩に於てすと。記に曰く、予が湘雲居の丙亭名二觀雷一。自作二之記一。其意新語壯。足二以想一。

想二其非常之
賣一矣。孰謂南
海之才獨於レ
詩也。記曰。予
湘雲居丙方
一亭。遠望得二
寸碧一。螺黛煙
鬟依二稀雲際一
者。藤白也。藤
白之山。西枕二
海磯一。東連二大
嶺一。迤邐數百
里。夏月雷雨
之過。大率從二
此方一。其暑氣
塊鬱烈火繅レ
金。殷其之聲。
杳起二東偶一。及二
景申一。狂飈捲レ
沙。崩雲如レ影。
暴雨翻レ河。蟠
以二冰雹一。乘龍
恍惚反戰。金
蛇萬道。擊電
劃レ壁。俄而霹
靂破レ山。瞬息
千里。香車轆
轆。南走二于海一。
於レ是開レ軒倚レ
柱。坐以觀望。
遠者八九里。
近者二三里。
我膽氣爲レ之
鼓舞。飛興揚
揚飄二騰天外一。
其壯也肆觀二
戰於涿鹿之
野一。望二潮於浙
江之津一。洞庭
張レ樂。雲夢校

方の一亭、遠望寸碧を得たり。螺黛煙鬟雲際に依稀たるは、藤白なり。藤白の山は、西、海磯に枕み、東、大嶺に連る。迤邐數百里。夏月雷雨の過ぐる、大率此方よりす。其暑氣塊鬱烈火金を繅す。殷たる其聲、杳として東偶に起り、景申に及ぶや、狂飈沙を捲き、崩雲影の如く、暴雨河を翻す。襍ふるに氷雹を以てし、乘龍恍惚反戰、金蛇萬道、擊電壁を劃し、俄にして霹靂山を破る。瞬息千里、香車轆轆、南、海に走る。是に於て軒を開き柱に倚り、坐して以て觀望す。遠きは八九里、近きは二三里。我膽氣之が爲に鼓舞し、飛興揚揚天外に飄騰す。其壯なるや、戰を涿鹿の野に觀、潮を浙江の津に望み、洞庭に樂を張り、雲夢に校獵すと雖も、何ぞ能く過ぎん。謂ふ可し宇宙第一の奇觀と。須臾にして雨止み雲散じ、長鯨海に飲み、涼蟾天にあり。爽籟鬢を吹き、虛を洗ひ魄を灑ぐ。亦雷の賜なり。因つて之を榜して觀雷と曰ふ。客過り覽て訝る者有り。曰く、吁異なるかな、子の亭に名づくるや。吾聞く雷は天の怒なり。故に之を聞く者、怖れて避けざるはなし。聖人猶ほ且つ之が爲に變ず。今、子反つて以て奇觀と爲す。乃ち人情に異ること無からんやと。予笑つて答へて曰く、客亦所謂一を知つて其二を知らざる者のみ。雷は本天の怒に非ず。古人既に之を辨ず。聖人戰兢の至、其戒愼豈に惟雷のみならんや。其の既に疾風迅雨亦必ず變ずと謂ふ、風雨豈に是れ亦天の怒ならんや。夫れ雷は天地間の一物、夫の日月星辰風雲雨雪と、同じく是れ造化の使令なり。日月や、星辰や、風雲や、雨雪や、未だ疑ひ怪む者有るを聞かず。獨り雷に至つては則ち疑つて以て異物と爲し、怪んで以て之を怖る。何ぞ其れ惑へるや。後世に至つて腐譚の士、千言萬語理を以て雷を說く。亦是れ癡人夢を語るのみ。吾れ古人の文辭を觀るに、觀日の壇有り。觀星の臺有り。玩月と謂ふ者有り。望雲と謂ふ者有り。賞雪と謂ふ者有り。雷豈に獨り觀る可からざらんや。抑〻亦月雲は愛す可し、故に玩望を以てす。雷は徒に怖る可

職。何能過焉。可謂宇宙第一奇觀矣。須臾雨止雲散。長霓飲海。涼蟾在天。爽籟吹鬢。洗慮濯魄。亦雷之賜也。因榜之曰。觀雷。客有過覽而訝者。曰。吁異哉。子之名亭。吾聞雷天怒也。故聞之者。莫不怖而遷也。聖人猶且爲之變。今子反以爲奇觀。無乃異於人情者耶。

きのみと謂はんか、天下怖る可き者亦甚だ多し。外は則ち功名利祿、內は則ち智術忿爭、旁酒色佚遊、鯨海舟船、羊腸車馬に至るまで、一ぴ其常を失はば、禍踵を旋さず、其疾きこと震雷に過ぐ。子乃ち其禍を必然に顧ず、反つて震雷を萬一に怖る。亦熟らずやと。客答へずして去る。書して以て記と爲すと云ふ。

一 普通ならぬ天分　二 ひのもの方角、東方　三 蟾は蟾山の形、蟾は其の色、煙霧は烟れるぴんぐちにて蟾山のこと　四 はのか　五 うね〳〵とつちなる　六 冥陶しくむしあつし　七 殿々たる雷が、遠かに東方に起りてよせ來る　八 西南方　九 激しきつむじ風　十 崩るゝ氣が熊羆の如く眞黑　十一 背き去りし龍があやしきさまに引きかへし驅ふ　十二 金蛇の如き電光が無數に節をなし閃光鐵く空壓をたち切る　十三 雷の激しき音山も崩るゝばかり　十四 またゝく間に遠くどろ〳〵と南の方海の方へ去る　十五 雷の餘きを香車の軋ゝに擬ふ　十六 曙氣が之が爲にはげまされ高く振ひもこり天上に上る　十七 黃帝が蚩尤を誅せしときの故事　十八 女媧に蠶蛾は覺の七澤の一、枝瀆は大木調せて鳥獸の逃るゝをよせず蔽ること　十九 虹霓にじ　二十 涼しき月影　二十一 氣もちよき風　二十二 孔子は迅雷風烈には顏を變ずといへり　二十三 孔子が誡めて戰々兢々たるは、其の自ら戒め慎むこと雷のみならず　二十四 造物者の使者　二十五 陳眞の說を爲す士　二十六 馬鹿ものが夢の話をする如くとりとめなし　二十七 手柄や利得　二十八 智術を弄しんと鬱り爭ふ　二十九 酒と女色とにすさむ　三十 鯨のすむ海を飛にて渡る時の遠しさ　三十一 うね〳〵として危險なる路を車馬にて進む時の恐しさ　三十二 鯨の至ること足をかへす間も無きはど速か　三十三 きつと來る龍を顧みずして萬一に來ス震雷の禍を怖る

予笑而答曰。客亦所謂知一而不知二其二者耳。雷本非天怒。古人既辨之。聖人戰兢之至。其戒慎豈惟雷耳哉。其既謂疾風迅雨亦必變。風雨豈是亦天怒也哉。夫雷也天地間一物。與夫日月星辰風雲雨雪同是造化之使令。日月也星辰也。風雲也。雨雪也。未聞有疑怪者也。獨至雷也則疑以爲異物。怪以怖之。何其惑也。至後世腐譚之士。千言萬語以理說雷。亦是瘝人語夢耳。吾觀古人文辭有觀日之壇。有觀星之臺。有謂玩月者。有謂望雲者。有謂賞雪者。雷豈獨不可觀乎哉。抑亦謂月雲可愛故以玩望。雷也徒可怖耳。歟。天下可怖者亦甚多矣。外則功名利祿。內則智術忿爭。旁至酒色佚遊。鯨海舟船。羊腸車馬。一失其常。禍不旋踵。其疾過於震雷。子乃不顧其禍於必然。反而怖震雷於萬一。不亦熟乎。客不答而去。書以爲記云。

當南海時。白石南郭輩。詩名躁于世。一時秀才多立其下風。南海不欲碌碌後人。南海碌碌人に後るゝを欲せざれば、則ち敢へて此輩に驚せず。嘗て詩盜の判に錄する文を戲作し、一儒生の每に詩を作るに、必ず古人を剽竊し、故を以て死して罪を冥司に得たる事を紀す。此れ寓言以て縱に時の名流を彈ずるな

南海の時に當り、白石・南郭の輩、詩名世に躁しく、一時の秀才多く其下風に立つ。南海碌碌人に後るゝを欲せざれば、則ち敢へて此輩に驚せず。嘗て詩盜の判に錄する文を戲作し、一儒生の每に詩を作るに、必ず古人を剽竊し、故を以て死して罪を冥司に得たる事を紀す。此れ寓言以て縱に時の名流を彈ずるな

人。則不敢黨二此輩。嘗戲作錄二詩盜列一文。紀一儒生每作詩。必剽二竊古人。以故死而得罪于冥司一事。此寓言以縱彈二時名流一也。

り。

一 得ることなくして人の後に立つ　一 僧の詩歌文詞をぬすんで自作とすること　一 閻魔王　一 攻擊す

南海又善二丹青。舊二儲宋沈無名畫譜。是時池貸成。名勤號二雅大志一畫。南海謂曰。子學レ畫當レ學二士夫畫。乃貽二無名畫譜。貸成喜摸レ之。愛慕之餘。自改二其名一稱二無名。貸成沒之後。此譜轉二落木世肅兼葭堂一云。

南海又丹青を善くす。宋の沈無名の畫譜を舊儲す。是時池貸成（名は勤、大雅堂と號す）畫に志す。南海謂つて曰く、子畫を學ばば、當に士夫の畫を學ぶべしと。乃ち無名の畫譜を貽る。貸成喜んで之を摸す。愛慕の餘、自ら其名を改めて無名と稱す。貸成沒するの後、此譜木世肅の蒹葭堂に轉落すと云ふ。

一 畫　一 以前より所讀せり　一 木村巽齋、名は孔恭、大阪の人、蒹葭堂と號す

並河亮。字簡亮。私二諡天民一。平安人。

並河亮

並河亮、字は簡亮、天民と私諡す。平安の人。

天民初年從二仁齋一學。後以下仁齋仁義禮智天地自有之物。非二性之所一固有一之說。爲二告子舊窠一。更立二己見一。其說見二天民遺言一。大略以爲。四端之心。卽仁義禮智。仁義禮智。卽四端。非二四端之外別有一仁義一。自二其與一生俱生一而言レ之。則謂二之性一。自二其情實無レ僞而言レ之。則謂二之

天民、初年仁齋に從つて學ぶ。後仁齋が、仁義禮智は天地自有の物にして、性の固有する所に非らずとの說を以て告子の舊窠と爲し、更に己が見を立つ。其說天民遺言に見ゆ。大略に以爲へらく、四端の心は、卽ち仁・義・禮・智、仁・義・禮・智は、卽ち四端、四端の外別に仁義有るに非ず。其生と俱に生ずるより之を言へば、則ち之を性と謂ふ。其情實僞なきより之を言へば、則ち之を情と謂ふ。其の思を以て職と爲すより之を言へば則ち之を心と謂ふ。其實は一なり。學者必ず其孰か心たり孰か性たり情たるを指さんと欲す。何ぞ思はざるの甚だしきやと。誠所の疑語孟字義の序に曰く、吾竊かに之を叔父信齋に聞けり。一日信齋天民と共に仁齋の書窻を訪ひ、談性理に及ぶ。天民質すに其の見る所の心・性・情の三名唯一の旨を以てす。問答數回にして、仁齋默然稍久しうして嘆じて曰く、豪傑の士待つ所無くして興起する者に非ずんば、此に與ること能はず。吾子は誠に間出の才なり。吾れ當に字義を改むべきのみと。

情。自二其以レ思爲レ職而貫レ之則謂二之心一。其實一也。學者必欲レ指二其孰爲レ心孰爲レ性爲レ情。何不レ思之甚也。誠所疑語孟字義序曰。吾竊聞二之叔父信齋一矣。一日信齋與二天民一共訪二仁齋之書窟一。談及二性理一。天民實以二其所レ見心性情三名唯一之旨一。問答數回。而仁齋默然稍久而歎曰。非二豪傑之士無レ所レ待而興起者一。不レ能レ與二於此一矣。吾子誠問出之才也。吾當レ改二字義一耳。誠所名永。字崇永。小字五一。天民兄。嘗著二五畿內志一。有レ名二于世一。

誠所名は永、字は崇永、小字は五一、天民の兄なり。嘗て五畿內志を著し、世に名有り。

㊀ 告子の義を外にする說孟子に見えたり。義外はふるまな ㊁ 孟子の說に、側隱の心は仁の端、羞惡の心は義の端、辭讓の心は禮の端、是非の心は智の端とあり ㊂ 生れると倶に生ず ㊃ 思考を其の職分とす ㊄ 並列 天民 ㊅ 他の說に關る所なくしておとる ㊆ 誠に出づるの人才

天民性剛決負レ才。其學本二于尙書論語孟子一。以二經濟一爲レ志。每聞下所謂レ說吾猶レ

天民、性剛決にして才を負む。其學尙書・論語・孟子に本づき、經濟を以て志と爲す。每に所謂說を聽くは吾猶ほ人のごときなり、必ずや說無からしめんか、及び如し我を用ふる者有らば、吾れ其れ東周を爲けんか、苟も我を用ふる者有らば、朞月のみにて可なり、三年にして成ること有らん、の數語を稱して

人也。必也使レ無レ說乎。及如有二用レ我者一。吾其爲二東周一乎。苟有二用レ我者一。朞月而已可也。三年有レ成數語上曰。此聖人才德之本領也。嘗然爲二己任一。其說尙書一曰。蔡氏集傳解得七分。王耕野所レ著讀書管見。多レ所二發明一。王魯齋書疑。考二定錯簡一。而文理稍覺二順妥一。唯於下辯二酌其意一以施二諸家國一之方上。予竊不レ讓二于諸君一耳。嘗將上疏以二蝦夷地方一爲中內屬上。而年僅四十。志不レ果沒。識者惜レ之。

曰く、此れ聖人才德の本領なり。嘗然己が任と爲さんと。其尙書を說けるに曰く、蔡氏集傳は七分を解し得、王耕野が著す所の讀書管見は、發明する所多し。王魯齋が書疑は、錯簡を考定して、文理稍順妥を覺ゆ。唯其意を酌して以て諸を家國に施すの方に於ては、予竊かに諸君に讓らざるのみと。嘗て將に上疏して蝦夷地方を以て內屬と爲さんとす。而るに年僅かに四十にして、志果さずして沒す。識者之を惜む。

㊀ 經世濟民 ㊁ 論語顏淵篇に出づ ㊂ 論語陽貨篇に出づ ㊃ 論語子路篇に出づ ㊄ 一箇月 ㊅ 書物の文句などの入りちがひになれるもの ㊆ 適當、妥當 ㊇ くみ取る

東涯曰。簡亮誠有レ才。然不レ可三以託二六尺

東涯曰く、簡亮誠に才有り。然れども以て六尺の孤を託す可からずと。他日天民之を聞きて曰く、東涯實に吾を知る。吾之を人に奪ふ、未だ自ら知る可か

之孤。仙日天民聞レ之曰。東涯實知レ吾。吾奪二之人。未レ可二自知一也。至二爲レ人所レ奪。決無レ之。東涯反レ之。

天民唱二其所二獨得一以振二一時。仁齋沒。其徒半從二東涯。中從二天民一云。又通二倭學。善屬二倭文。嘗作二片劃記。多田南嶺取爲二己說。載二秋齋閑語。伴蒿蹊畸人傳。錄二天民事跡及片劃記。以發二南嶺剽竊。可レ謂二痛快。

らざるなり。人の爲に奪はるゝに至つては、決して之れ無し。東涯は之に反す。と。

㊀ 論語「曾子曰、可二以託二六尺之孤一、可二以寄二百里之命一、臨二大節一而不レ可レ奪也、君子人與、君子人也」

天民、其獨り得る所を唱へ、以て一時に振ふ。仁齋沒するや、其徒半ば東涯に從ひ、半は天民に從ふと云ふ。又倭學に通じ、善く倭文を屬る。嘗て片劃の記を作る。多田南嶺取つて己が說と爲し、秋齋閑語に載す。伴蒿蹊の畸人傳、天民の事跡及び片劃の記を錄し、以て南嶺の剽竊を發く。痛快と謂ふ可し。

㊀「七尺ばかりに削りたる木二つをあぐちの足の形に斜に打通へて、神社の棟に、牛の角を飾きたちむやうに立てるものあり、ちぎとぞいふ、又はかたそぎともいふ」云々と筆を起して其由來を詳述せり

一日門人相集調曰。先生若得レ志。使二吾儕管二何事。座有二一人一曰。余之不才。先生所二素知。但守二倉廩。則雖二一掬米。不二敢私レ之。天民曰。使二如レ爾者奈何守二倉廩。其人作レ色曰。先生以レ余爲レ不レ廉乎。天民笑曰。否。有二竊レ物之才一者。不二爲レ人所レ竊。爾能仁齋以二儒而爲レ醫。爲レ不レ是。其說見二儒醫辨。天民異二於此。曰。此邦儒

一日門人相集り謂つて曰く、先生若し志を得ば、吾儕をして何事をか管せしむると。座に一人有り、曰く、余の不才は、先生素より知る所、但倉廩を守らば、則ち一掬の米と雖も、敢へて之を私せずと。天民曰く、爾の如き者をして奈何ぞ倉廩を守らしめんと。其人色を作して曰く、先生余を以て廉ならずと爲すかと。天民笑つて曰く、否、物を竊むの才有る者は、人の爲に竊まれず。

㊀ 志を得て政權に與るに至らば何役をつかさどらしむるか　㊁ 謂曰なちず

仁齋儒にして醫たるを以て是ならずと爲す。其說儒醫の辨に見ゆ。天民は此に異なり。曰く、此邦儒の恆祿なき者は、宜しく岐黃を兼ぬべし。偏に儒を以て居れば、則ち產支へ難く、終に或は其志を固うする能はざるなりと。是に因

無二恒祿一者。宜レ兼二岐黄一。偏以レ儒居。則産難レ支。終或不レ能レ固二其志一也。因レ是門人往往有二儒而兼レ醫者一云。

て門人往往儒にして醫を兼ぬる者有りと云ふ。

一 一定の俸祿　二 醫家

太宰純

太宰純。字德夫。小字彌右衛門。號二春臺一。又號二紫芝園一。信濃人。春臺平手政秀後云。自二父冒辰一冒二太宰氏一。少時來二江戸一。筮二仕某侯一。皆不レ得レ志去。時年三十六。從レ是後不二復宦一。初從二中野撝謙一爲二性理學一。既而聞二徂徠威一一家言一。卽棄二其學一而學焉。遂以二治經一名冠二一時一。

太宰純、字は德夫、小字は彌右衛門、春臺と號す。又紫芝園とも號す。信濃の人。

春臺は平手政秀の後なりと云ふ。父言辰より太宰氏を冒す。少時江戸に來り、某侯に筮仕す。皆志を得ずして去る。時に年三十六。是より後復宦せず。初め中野撝謙に從つて性理學を爲む。既にして徂徠が一家言を成すを聞き、卽ち其學を棄てて學ぶ。遂に治經を以て名一時に冠たり。

一 藤田信長の臣、信長の孫　二 來國の性命氣質の學　三 經術研究

春臺爲レ人嚴殺端方。嚴邨侯世子延爲レ師。其始至。世子不二遽迎一。春臺艴然曰。至賤處士。烏敢傲二岸於貴人一。雖レ然所レ說則聖人之道也。苟奉レ道者。雖二王公一不レ得レ不レ禮焉。而其所レ待薄甚。是非不レ禮乎。余。卽不レ奉レ道也。不レ奉レ

春臺人となり嚴殺端方なり。嚴邨侯の世子延いて師と爲す。其の始めて至るや、世子送迎せず。春臺艴然として曰く、至賤の處士、烏ぞ敢へて貴人に傲岸せん。然りと雖も說く所は則ち聖人の道なり。苟も道を奉ずる者は、王公と雖も禮せざるを得ず。而るに其の待つ所薄きこと甚だし。是れ余を禮せざるに非ず、卽ち道を奉ぜざるなり。道を奉ぜざる者は、余復見ることを欲せずと。

是時に當て、侯、閣老たり。用捨窮達皆其手に出づ。而も其言一も忌憚する所無し。是に於て其臣相議して曰く、無禮は渠自ら道ふなり。世固より儒師多し。請ふ更に他人を招かんと。世子之を聞いて曰く、寡人過てり。敎を師に受く、何ぞ挾むこと之れ有らんと。乃ち禮を厚くして之に事ふ。春臺後に六經略說を著し、諸を世子に進むと云ふ。（世子は卽ち嚴邨侯の第四世にして、實に今

道者。余不ㇾ欲ニ復見一。當ニ是時一。侯爲ニ闕老一。用捨窮達皆出ニ於其手一。而其言一無ㇾ所ニ忌憚一。於是其臣相議曰。無禮猖自道也。世固多ニ儒師一。請更招ニ他人一。世子聞ㇾ之曰。寡人過矣。受ニ教於師一。何挾之有。乃厚ㇾ禮事ㇾ之。春臺後著ニ六經略說一。進ニ諸世子一云。世子即巖郷侯第四世。實今林祭酒述齋公所生父。

（林祭酒述齋公の所生父たり）

● 性格きびしくして方正なり　● 都る說　● もどり高ぶる　● 老中　● 用ふるも捨つるも腐せしむるも立身せしむるも自由　● 身分の高き事を胸中に抱くべき理由なし　● 大學頭

春臺善吹ㇾ笛。當ニ是時一。東叡法王好ニ音律一。聞ニ春臺妙ニ于音一。嘗遣ㇾ使召ㇾ之。春臺辭曰。余儒生也。若以ㇾ儒被ㇾ召則不ㇾ俟ㇾ駕。以ニ其私嗜末技一。爲ニ王門伶人一。余不ㇾ欲也。自ㇾ此終不ニ復吹ㇾ笛。

（春臺善く笛を吹く。是時に當つて、東叡法王音律を好む。春臺が音に妙なるを聞き、嘗て使を遣して之を召す。春臺辭して曰く、余は儒生なり。若し儒を以て召さるれば則ち駕を俟たず。其私嗜の末技を以て、王門の伶人と爲るは、余欲せざるなりと。此より終に復笛を吹かず。）

● 東叡山寛永寺の法親王　● 私にすき好むつまらぬ技藝　● 樂人

其侯餽ニ乾海參一。調ニ烹之一。則肉破味變。春臺怒甚。卽遣ニ人却ㇾ之曰。余固勿ㇾ論ニ鄙賤一。而君所ニ以許ㇾ交者。信ニ其所ㇾ學也。既信ㇾ之。豈可ㇾ無ㇾ禮乎。然餽以ニ腐物一。是禮之廢也。夫道者。以ㇾ禮爲ㇾ主。而其既廢ㇾ之。亦何學之爲。今而後不ㇾ願ㇾ造ニ君之門一。侯曰。是寡人率爾所ㇾ致。卽自裁ㇾ書。更餽ニ一饌一。海參謝ㇾ之。

（某侯乾海參を餽る。之を調烹すれば則ち肉破れ味變ず。春臺怒甚だし。卽ち人をして之を却けしめて曰く、余固より鄙賤なるに論なし。而も君が交を許す所以は、其の學ぶ所を信ずればなり。既に之を信ず、豈に禮無かる可けんや。然るに餽るに腐物を以てす、是れ禮の廢せるなり。夫れ道は、禮を以て主と爲す。而るに其れ既に之を廢す、亦何の學かこれ爲さん。今よりして後君の門に造るを願はずと。侯曰く、是れ寡人率爾の致す所と。卽ち自ら書を裁し、更に一饌の海參を餽つて之を謝す。）

● なまこを煮て乾したるもの、いりこ　● 突返さしめて　● 粗忽

侍中某欲下以ニ經濟錄一進呈上。令ニ書商小林侍中某經濟錄を以て進呈せんと欲し、書商小林氏をして正本を春臺に求めしむ。春臺辭するに、藁本字を作すこと愼まず、且つ衰邁繕ひ寫す能はざるを以て

氏求二正本于春臺。春臺辭以下蒙本作レ字不レ慎。且衰邁不ヤ能二繕寫一。而私謂二小林氏一曰。托二中官一以進レ言。君子所レ不レ爲也。若命出二於閣老一。則不レ得レ不レ進。

す。而して私かに小林氏に謂つて曰く、中官に托して以て言を達するは、君子の爲さざる所なり。若し命閣老より出でなば、則ち進めざるを得ずと。

㊀ 加納遠江守をさす　㊁ 將軍に獻上す　㊂ 草稿の字體亂雜　㊃ 年老い體衰ふ

春臺校二刻古文孝經孔安國傳一。由二沼田侯一。久留里ニ移封侯。上二大府一。孔傳彼邦亡者久矣。而春臺所レ梓。傳入レ彼。乾隆四十一年。日本安永五年。鮑以文翻刻入二知

春臺、古文孝經孔安國傳を校刻し、沼田侯（侯後久留里に移封す）に由つて、大府に上る。孔傳彼の邦にて亡はるゝこと久し。而して春臺の梓する所、傳へて彼に入る。乾隆四十一年（日本安永五年）鮑以文翻刻して知不足齋叢書中に入る。吳騫が序に曰く、宋史日本傳に謂ふ、其國太宰府、人をして方物を貢せしめ、或は其牒を收得すと。今是の書を序刻する太宰純は、未だ何如なる人爲るかを詳かにせず。日本多く職を世にす。太宰純とは豈に猶ほ其苗裔か。或は官を以て氏と爲す者か。惜しいかな、十萬里の波濤遠し難し。問ひ易からざ

不足齋叢書中。吳騫序曰。宋史日本傳謂。其國太宰府。遣三人貢二方物一。或收二得其牒一。今世レ鏡。太宰純豈猶其苗裔。或以レ官爲レ氏者乎。惜乎十萬里之波濤難レ遠。不レ易レ問耳。

るのみと。

㊀ 幕府　㊁ 宋朝に土産物を納む　㊂ 太宰府よりの書狀を收得せる者あり　㊃ 子孫

襲苑之徒集二南郭宅一。春臺獨後至。足過二板美中之劍一。稱當二頂禮一以謝レ過。然徑坐二上頭一。不二一言一以陳レ過。美中性簡傲。恒苦春臺乖僻動。以二苛禮一律レ己。於レ是故日春臺自執二其劍一加二己額一拜レ之。春臺意色殊惡。

襲苑の徒、南郭の宅に集ふ。春臺獨り後れて至り、足過つて板美中の劍を蹈む。義當に頂禮以て過を謝すべし。然るに徑に上頭に坐し、一言以て過を陳べず。美中性簡傲にして、恒に春臺が乖僻動もすれば苛體を以て己を律するに苦しむ。是に於て故に春臺を目し、自ら其劍を執つて己が額に加へ之を拜す。春臺意色殊に惡しし。

㊀ 物徂徠の門下　㊁ 板倉復軒の子號は帆丘　㊂ 上座　㊃ 簡易直截にして傲慢　㊄ 個人　㊅ 禮を厚めて嚴格にす　㊆ わざと春臺を晓む

赤穗之黨之刺吉良氏也。春臺極口醜詆之。并駁鳩巢作義人錄曰。室子而不知義如是。世之憤憤者。何足論乎。近時柴栗山。敍赤松國鸞四十六士論評。罰春臺爲貪者疑人盗。而婬者疑人姦者。此巳好攻人。而欲人之不己攻也得乎。

赤穗の黨の吉良氏を刺すや、春臺口を極めて之を醜詆し、并せて鳩巢が義人錄を作りしを駁して曰く、室子にして義を知らざること是の如し。世の憒憒たる者、何ぞ論ずるに足らんやと。近時柴栗山、赤松國鸞の四十六士論の評に敍して、春臺を謂つて、貪者は人を盗かと疑ひ、婬者は人を姦かと疑ふ者と爲す。此れ己れ好で人を攻め、而して人の己を攻めざるを欲するも得んやと。

(一) 口ぎたなく罵る　(二) 愚なる者　(三) 柴野栗山

菅麟嶼幼才氣驟發。年十三。擢列大府儒官。一時稱爲奇童子。然卒苗而不秀。

菅麟嶼幼にして才氣驟發、年十三にして、擢でられて大府の儒官に列す。一時稱して奇童子と爲す。然るに卒に苗にして秀でず。春臺規箴少しも借まず。其忠誠激切、宅人は及ばず。其書を左に撮錄せん。曰く、純足下の學に於けるを觀るに、王公大人が、學を以て戯と爲し以て日を消す者の如きこと無きを得んや。夫れ足下は布衣に非ずと雖も、然れども儒生なり。不幸早く神童を以て聞ゆ。幸にして國恩を荷り、食廩粟を賜ひ、文學に列し、朝請を奉ず。少しと雖も以て務むる所を知らざる可からず。古人童稚にして日に六藝古文數千言を誦する者有り。純足下を識りしより以來、玆に數年、未だ足下の誦する所有るを聞かず。今日を以て前年に較ぶるも、亦未だ其の進む所有るを見ず。進む所は吹笛のみ。近來聲價頗る減ずること、豈に徒然ならんや。程正叔言あり曰く、人に三不幸あり。少年にして高科に登るは、一の不幸なりと。足下其れ諸を思へと。又曰く、吾子冬は則ち霜雪を畏れ、夏は則ち雷を畏る。一歲の内、雷と霜雪とを避けば、則ち其の畏無き者幾ど希なり。古語に所謂首を畏れ尾を畏るれば、身其れ餘り幾ぞと。吾子之に近し。純聞く、西域に無雷の國有り、南方に八寒の地有りと。吾子乃ち彼に生れずして、此に生る。何ぞ造物の吾子に不利なるや。予則ち以爲へらく、吾子の患、稟受の薄に由ると雖

春臺規箴不少借。其忠誠激切。宅人不及焉。其書撮錄于左。曰。純觀足下於學。得無如王公大人。以學爲戯以消日者乎。夫足下雖非布衣。然儒生也。不幸早以神童聞。幸荷國恩。賜食廩粟。列文學。奉朝請。雖少不可以不知所務也。古人有童稚而日誦六藝古文

數千言者。純自識足下以來。數年于茲。未聞足下有所誦。以今日較前年。亦未見其有所遇。而所遇者吹毛耳。近來聲價頗減。豈徒然哉。程正叔有言曰。人有三不幸。少年登高科。一不幸也。足下其思諸。又曰。吾子冬則長霜雪。夏則長雷。一歲之內。遭三雷興霜雪。則其無長者幾希。古語所謂長首長尾。身其餘幾。吾子近之。純聞西域有無雷之國。南方有八雷之地。吾子乃不生於彼。而生於此。何造物之不利於吾子也。予則以爲吾子之患。雖由稟受之薄也。亦豈非以奉養太厚。安佚過度。自崇其疾乎。吾子雖少。幸一思諸。

も、亦豈に奉養太だ厚く、安佚度に過ぐるを以て、自ら其疾を崇うするに非ざらんや。吾子少しと雖も、幸に一たび諸を思へと。

㊀ 才氣甚だすぐる ㊁ 少時才氣秀でしも、長じて才氣伸びず ㊂ きびしく調戒して ㊃ 調度殊切 ㊄ 無位の貧人 ㊅ 知行とし ㊆ 倉米を賑はる ㊇ 儒官 ㊈ 幼童 ㊉ 六經と同じ ㊊ 高き科舉に及第す ㊋ 一年に八回も雷を鳴らす國の義、雷國をいふ ㊌ 造物者が足下に不利を與ふ ㊍ 天分乏し ㊎ 肉體のやしなひに手厚く度にすぎて安逸なるに、其疾患の度合をいふ

春臺於徂徠。不隨其步趨者。往往有之。不幹文章一事而已。今錄其言於左。紫芝園漫筆曰。徠翁以海量能容一自許。人亦以此稱之。余謂徠翁固能容。然能容學者。而不能容常人。能容文才之士。而不能容禮法之士。而能容其人。而不能容其言。是未爲能容也。又曰。徂徠先生見識卓絕。知道甚明。周南以鄙魯以後無是人者。

春臺の徂徠に於けるや、其歩趨に隨はざると、往往之有り。特に文章の一事のみにあらず。今其言を左に錄せん。紫芝園漫筆に曰く、徠翁海量能く容るゝを以て自ら許す。人も亦此を以て之を稱す。余謂へらく徠翁固に能く容る。然れども能く學者を容れて、常人を容るゝこと能はず。能く文才の士を容れて、禮法の士を容るゝこと能はず。而して能く其人を容れて、其言を容るゝこと能はず。是れ未だ能く容るゝと爲さざるなりと。又曰く、徂徠先生見識卓絕し、道を知る甚だ明かなり。周南以て鄙魯以後是人無しと爲すは、過論に非ざるなり。惟其行其の知る所に及ばず。殆ど所謂行掩はざる者か。蓋し先生の志は進取に在り。故に其の人を取るには才を以てし、德行を以てせず。二三の門生亦其說を習聞し、德行を屑とせず、唯文學是れ稱す。是を以て徂徠の門、跅弛の士多く、其の才を成すに及ぶや、特に文人に過ぎざるのみ。其敎も然り。外人既に是を以て先生を譏る。純も亦嘗て竊に先生に不滿なり。此れ先生の鷄肋純を視る所以なり。書に云ふ、知ること艱きに非ず、行ふこと惟れ艱しと。先生有りと。又曰く、徂徠先生平日小子輩に敎へず。是を以て其門に長幼の序無しと。又曰く、徂徠先生謂ふ、仁齋先生奇を好むと。余より之を觀

弗二過論一也。惟其行不及二其所一知。殆所謂行不レ掩者歟。豈先生之亦者二過取一。故其事人以レ才。不レ以二德行一。二三門生亦習二聞其說一。不レ屑二德行一。唯文學是稱。是以徂徠之門。多二所強之士一。及二其成レ才也。皆不レ過二文人一而已。其敎然也。外人誣以是譏二先生一。絕亦曾論不二滿先生一。此先生之所以二遂放縱一也。世云非二知之論一。徒之惟先生乎。即不レ敎二小子輩一。是以其門無二長物之序一焉。又曰。徂徠先生有二奇癖一。自余聞レ之。徂徠之說レ奇。蓋二於仁齋一。古人所謂尤而效レ之者。夫子有二焉一。又曰。徂徠風流自許。人亦與レ之。予

れば、徂徠の奇を好むこと、仁齋より甚だし。古人の所謂尤めて之に效ふ者、夫子有りと。又曰く、徂徠風流を以て自ら許し、人亦之を與す。予謂へらく徂徠に風流ならざるもの三有り。善く飲んで酒を惡む、一なり。夜坐を好まず、二なり。乘舟を喜ばず、三なりと。又南郭に與ふる書に、徂徠宇士明に贈る序を論刺して曰く、此序は通篇人と爭ふ。君子の道に非ず。序に稱す、洽人恒祿無し。儒生の其間に寄する、亦生を爲し難し。則ち舌耕瘁を隱き、百千蓄を成し、目も給するに遑あらず。性を語り天を語る、率ね宋籍に非ざれば不可なり。故に聰儁仁齋の若きありと雖も、猶ほ其習ふ所に牽ふ。洛の陋なる所以是のみと。此れ太に然らず。夫れ洛儒信に生を爲し難し。東儒果して皆寒ならざるか。且つ士の困祿無き者、未だ農・工・商・賈たること能はず。則ち其技を鬻いで以て衣食に給す。固より其宜なり。古人僕賃力作する者有り。當時識者以て賤と爲さず。今書生と爲りて升斗の祿無ければ、則ち亦舌耕筆

耕唯其の爲す所、何の不可か之れ有らん。先生何ぞ獨り之を惡むかと。又曰く、純の愚をもつて綱に以爲へらく、先生の功莫大なる者唯二辨あり。故に二辨傳へざる可からざるなり。佗の諸文の若き、其れ土苴のみ。之を傳ふる固より可、之を緩うするも亦可、即ち傳へざるも亦可なり。足下若し二辨を校するか、則ち純不敏と雖も將に參閱せんとす。純の愚なり。今足下乃ち遺文を輯むるを以て、子和と純とを委す。子和は則ち可なるも、純は則ち不可なり。何となれば襲圍の門、親しく顧命を受くる者は、足下一人のみ。佗は與らず。如し命を聞かずして、以て命を奉ずる者に代らば、何ぞ以て先師を敬すと爲さんや。不可なる所以なり。子和は則ち可なりと曰ふ所以は、先生の悅ぶ所なればなり。純雅先生に知られず。特に二三兄弟の後に從ひて、其餘論を聞くのみ。然りと雖も、純敢へて先生に畔かず。敬んで其敎を奉じて以て今に到る。今に于て先生の亡きを以て之を欺くことを欲せず。是を以て敢へて足下

謂徂徠、有ㇾ不ニ風流一者三上焉。善飲而惡ㇾ酒。一也。不ㇾ好ニ夜坐一二也。不ㇾ喜ニ乘舟一三也。又與ニ南郭一書。論ㇾ刺徂徠贈ニ宇士朗一序ㇾ曰。此序通篇與ㇾ人爭。非ニ君子之道一。序稱。洛人無ニ恆祿一。儒生之寄ニ其間一。亦難ㇾ爲ㇾ生。則舌耕開ㇾ肆。百千成ㇾ羣。日不ㇾ逸ㇾ給。語ㇾ性語ㇾ天。率非ニ宋儒一。不可也。故雖ㇾ有ニ聰儁若ニ仁齋一。猶舉ニ其所ㇾ習。洛之所ニ以願一是已。此大不ㇾ然。夫洛儒信難ㇾ爲ㇾ生。東儒果皆不ㇾ寒邪。且士無ニ田祿一者。未ㇾ能ㇾ爲ニ農工商賈一。則寓ニ其技一以給ニ衣食一。固其宜也。古人有ニ僕賃力作者一。當時譏者不ニ以爲ㇾ賤。今爲ニ書生一而無ニ升斗之祿一。則亦否耕輟耕。唯其所ㇾ爲。何不可之有。先生何獨惡ㇾ之乎。又曰。純之愚竊以爲。先生之功其大者唯二辨一耶。故二辨不ㇾ可ㇾ不ㇾ傳也。若ニ佗諸文一。其士苴耳。傳ㇾ之固可。緩ㇾ之亦可。即不ㇾ傳亦可。足下若校ニ二辨一耶。則純雖ニ不敏一。特ニ參閱一焉。純之願也。今足下乃以ㇾ辭ニ遺文一。委ニ子和與ㇾ純。子和則可。純則不可。何者。護園之門。親受ニ顧命一者。凡下一人。佗不ㇾ與。如不ㇾ閉ㇾ命。而以代ニ奉ㇾ命者一。何以爲ㇾ敬ニ先師一乎。所ニ以不可一也。所ニ以曰ニ子和則可一者。先生所ㇾ悅也。純雅不ㇾ見ㇾ知ニ於先生一。特從ニ二三

に謝す。決して論を承けず。子遷勉めよや。(一二)(一三)麓丘の葛、其節を誕くする有り。惟足下良く圖れよと。

● 盲從せず　● 謟めてひろき度量　● 山縣周南　● 蘐子は郷に生れ孔子に倣に生る　● はしいまゝにしてしまりなき人　● 聰のるばち骨、勝助案て疎く思ふ　● これ先生のことなり　● 夜起きてゐることを好まず　● 宇野士朗　● 京都の人は仕官せざる故定まれる祿を給せらるゝことなし　● 講義の店を開く　● 來學の書　● すぐれてきときことに精の如きゝ　● 下僕となりて勞働す　● 僅かの祿　● 士芥、とるにたらざるもの　● 校訂　● 平野金華の字　● 死後の寄託　● 貧窶に堪じかたし　● 南郭の字　● 詩經に「麓丘之葛兮、何誕之節兮」毛傳に、士氣盛めば則ち節を生ず云々

兄弟之後。聞ニ其餘論一而已。雖ㇾ然純不ニ敢辭一。先生敬奉ニ其教一以到ニ于今一。于ㇾ今不ㇾ欲ㇾ以ニ先生亡ニ而欺ㇾ之。是以敢謝ニ足下一。決弗ㇾ承ㇾ論。子遷勉哉。麓丘之葛。有ㇾ誕ニ其節一。惟足下良圖。

春臺以ニ處士一終。然非ニ其志一也。蓋待ニ善賈一而竟不ㇾ沽也。報ニ平田公信一書曰。純嘗與ㇾ人言曰。必使ニ予仕一。則二百石以上而後可。與ニ足下一言亦然。今書中乃以ニ是言一爲ニ自負太過一。嗚呼足下亦未ニ之深察一也。請詳言ㇾ之。夫二百石者。士之

春臺處士を以て終る。然れども其志に非ざるなり。蓋し善賈を待ちて竟に沽れざるなり。平田公信に報ゆる書に曰く、純嘗て人と言つて曰く、必ず予をして仕へしめんとならば、則ち二百石以上にして後可なりと。足下と言ふも亦然り。今書中乃ち是言を以て自負太だ過ぎたりと爲す。嗚呼足下亦未だ之に深く察せざるなり。請ふ詳に之を言はん。夫れ二百石は、士の常祿なり。二百石なる能はざれば、則ち出でては以て士の事を行ふに足らず、入つては以て祭祀を守り、父母を養ひ、妻子を畜ふに足らず。是れ何ぞ以て士と爲さんや。所謂二百石以上にして後可なりとは、士たるの常なる者を語れるなり。何ぞ以て重しと爲すに足らんや。所謂重祿とは、萬に千を取り、千に百を取る、之を重祿といふ。純何ぞ敢へて之を望まん。曩時水順庵加賀に仕へ、藤宗恕越前に

常祿也。不能二百石。則出不足。以行二士之事。入不足。以守二祭祀。養二父母。妻子。是何以爲士哉。所謂二百石以上而後可者。謂二爲士之常祿也。何足以爲士哉。所謂重祿者。萬取千焉。千取百焉。之謂二重祿。純何敢望之。然以今觀之。未見其可長也。若夫野順清食二桑那。大高生食二松山。皆以二樸樕之材一食二四百石。是何幸也。其他在二諸侯國一而食二二百石以上一者。抑何限。要之有二儒名一而無二其實一者。比比皆是。然桑純如彼者。無他。遇時也。純亦未以二二百石一爲富也。

仕ふるに、皆五百石を以てす。二子は誠に先覺なり。然れども今を以て之を觀れば、未だ其の長るべきを見ざるなり。若し夫の野順清が桑那に仕へ、大高生が松山に仕ふる、皆樸樕の材を以て四百石を食む。是れ何の幸ぞや。其他諸侯の國に在りて二百石以上を食む者、抑も何ぞ限らん。之を要するに儒名有りて其實無き者、比比皆是なり。然るに桑純彼の如きは、他無し、時に遇へばなり。故に純も亦未だ二百石を以て富めりと爲さざるなりと。

● 仕官せぬ人　● 藩士の武士取り、無く用ゐる人を抱へりし者　● 五ぬぼれ甚だし　● 浪宗の祭祀を行ふ　● 過分の知行とは主君の取高の十分の一を取るもの　● 木下順庵　● 伊藤宗紀、字は元藩、號は坦庵、平安の人　● 大高坂芝山　● 心さきの小者にてつかはれぬ人　● 儒者の名おつて其の實をきものどれもとれも嘆かり

春臺疾。原芸澤（名は鼎貴、字は子才。詳二厭）脈曰。先生無二遺言一也矣。有則言之。它日疾病。言不如意也。春臺喜曰。子才誠非如二世醫之屈一不起強而已也。即囑以二後事一。謂海作二行狀。南郭撰墓記。皆其遺言也。

春臺疾む。原芸澤（名は鼎貴、字は子才）脈を診て曰く、先生遺言無くば止む。有らば則ち之を言へ。它日疾病にて、言ふこと意の如くならざらんと。春臺喜んで曰く、子才誠に世醫の屈ただざるを視て猶ほ面誤するが如きに非ずと、即ち囑するに後事を以てす。謂海行狀を作り、南郭墓記を撰す。皆其遺言なり。

● 病氣危篤とひろ　● 〈つもり

春臺子無し。義子零替祭を修めず。寛政八年、五十年忌辰に値ひ、書商嵩山房、非薦を陳して墓を祭り、爲に一片の小石を墓碣の下に建て、以て其の恩に浴する事を紀す。墓は江戸谷中天眼寺の側に在り。

● 春臺の祭祀を行はず　● 非薦は獨言は侯、僅かの供物

春臺子。義子零替不修祭。寛政八年。值二五十年忌辰一。書商嵩山房。陳二非薦一祭墓。爲建二一片小石于墓碣下一。以紀二其浴恩事一。墓在二江戸谷中天眼寺之側一。

服元喬。字子遷。小字小右衛門。號二南郭一。又號二芙渠館一。姓服部。修爲二服氏一。平安人。南郭齡十四來二江戸一。十六起仕二柳澤侯一。三十四而致仕。乃下レ帷授レ徒。其學得二之徂徠一。而才氣俊拔。遂以二詩文一。山斗一世。其答二柳太夫一書中。略陳レ所二以親レ官一。曰。昔先侯之世。

服元喬

服元喬、字は子遷、小字は小右衛門、南郭と號す。又芙渠館と號す。姓は服部、修して服氏と爲す。平安の人。

南郭齡十四にして江戸に來り、十六のとき起つて柳澤侯に仕ふ。三十四にして致仕し、乃ち帷を下して徒に授く。其學之を徂徠に得たり。而して才氣俊拔、遂に詩文を以て一世に山斗たり。其の柳太夫に答ふる書中、略官を罷むる所以を陳ぶ。曰く、昔嘗て先侯の世、薄技を大藩に奉じ、猥に弄臣の末に侍するを得たり。竊に惟れば當時先侯の愚、山と高く海と深し。乃ち喬を責むるに其不能を以てせず。以爲へらく女史の小なる、小人習ふ所片長使ふべしと。是を以て喬に罪戾を免るゝのみならず、苟も乏を承けて顧問に備ふることを獲るも、亦唯臣を知ること君に如くは莫し。乃ち先侯愚を憫むの餘、嘗て

得レ寧二薄技於大藩一。猥侍二弄臣之末一。竊惟當時先侯之愚。山高海深。乃不レ責レ喬以中其不能一。以爲文史之小。小人所レ習片長可レ使。是以不三嘗免二罪戾一。苟獲三承レ乏而備二顧問一。亦唯知レ臣莫レ如レ君。乃先侯女其行乎。不レ如傳二女成レ名。仙日或適二四方一。無レ謂二我不レ知レ女。喬感泣刻レ骨。私心自誓。亡レ何先侯卽レ世。卽大藩亦多二貸恩一。尋乃賜レ玦。得レ全二首領一。放レ歸草野。

私に喬に命じて曰く、予女を瓶瑕とせざるも、後の人將に多きを女に求めんとす。我が千秋の後、女其れ行かんか。如かず女に名を成さしめんには。他日或は四方に適き、我れ女を知らずと謂ふことなかれと。喬、感泣骨に刻み、私心自ら誓ふ。何もなく先侯世に卽く。卽ち大藩亦貸恩多し。尋いで乃ち玦を賜ひ、首領を全うして草野に放歸するを得たりと。

一 泰山北斗は衆人の仰ぐ所 二 柳澤氏を指す 三 輕少たるわざを以て大藩に仕ふ 四 文臣の小役には一芸夫の學習せる些少の長所を用ふるも発支なし 五 才智乏しき身が顧問の任に備はる 六 きずある器、此處は才乏しき喬の謂 七 人は故にまだ多くを期待せん 八 殁後 九 我れ汝を知るの明無かりしと言ふことと勿れ 十 死殁す 十一 眼喬多し 十二 眼をたまはる

南郭爲レ人風流溫藉。藝苑之士莫レ不二雅

南郭人となり風流溫藉、藝苑の士雅慕せざる者なし。其來つて束脩を薦むる者甚だ衆し。大氏歲に金百五十餘兩を得。凡そ儒を以て生理を爲す、其饒裕此の

墓一者。其來歸二東佛一者甚衆。大底僅得二金百五十餘兩。見以儒爲二生理一。其機精如レ此。昔鮮矣。嘗謂二証子一。蘇徒墓墨。盤乾二南郭一云。

南郭兼二能書一。恒言。日本畫以二雪雪舟。狩野元信一爲レ至。如二八種畫譜一。所レ謂絵畫。不レ足レ見也。秋玉山眼高量竹記曰。予收二爲鮮畫芭蕉一。劇偷レ人取去。

南郭兼て繪事を善くす。恒に言ふ、日本畫は僅に雪舟・狩野元信を以て至れりと爲す。八種畫譜の如き、所謂絵畫は、見るに足らざるなり。秋玉山の服翁墨竹記に曰く、予翁の醉畫芭蕉を收む。偶〻人の爲に取去らる。今復存せず。予今翁の遺畫を觀、滂滂として鮮潤し、亦外に形る。仲英因つて爲が十三四歲の時爲せる所の墨竹一紙を以て之を贈る。其末に周雪寫の三字有り。蓋し幼字なり。其千尺雪を干すもの、蓋し紙に此に蔔す。今を距ること六十餘年、墨淋漓として新なるが如し、云々と。

● 無レ人レ人。● 人門する者。● 生計。● 畫畫。● 植物に関する畫

● 歌山玉山。● さめ〳〵と涙こぼる。● 物欲しきさま。● 顔色。● 顔色衰へたるを見て、愛犬肉を割いて之に與へしこと。● 書畫。● 書は天なり、卽ち天を

今不二復存一。予今觀二翁之遺畫一。浮揮淋漓下。口不レ能レ言。欲レ哭之色。豈幼字也。其千尺雪者。蓋既蔔二予此一。距レ今六十餘年。墨淋漓如レ新。云云。

幼時曲レ京。投レ老歸遊。時親眷舊故。皆既在二土中一。故鄉却如二他鄉一。有レ詩云。五十年前曲二上京一。今遊猶作二客中情一。川長何處尋二桑梓一。訴薄無家問二弟兄一。認得山川疑夢寐。來多少自分明。共知流二轉人寰裏一。愧殺劉郎歸二赤城一。

幼時京を出で、老に投じて歸遊す。時に親眷舊故、皆既に土中の人と爲り、故鄉却つて他鄉の如し。詩あり云く、五十年前上京を出で、今遊猶ほ客中の情を作す、別長うして何の處か桑梓を尋ねん。訴薄うして家の弟兄を問ふもの無く、山川を認め得て夢寐かと疑ふ。想ひ來れば多少自ら分明、共に知る人寰裏に流轉せしを、愧づ劉郎の赤城に返るに似たるをと。

● 老年となつて歸京す。● 故郎。● 上しるはかばかりて歸國すべき兄弟無し

南郭頗る國風に通ず。嘗て神戸侯の浮洲の別業に遊び、倭歌を賦して興を遣る。（歌に曰く、靜かなる池の心を水鳥の、うきすの浪の立つとしもなし）南郭の父、名は元矩。北村季吟に事へて國風を善くす。故に其遺を承くと云ふ。

❶ 和歌　❷ 別墅、別莊　❸ 靜かなれば心動搖することなきなを寓す　❹ 遺風をうけつぐ

南郭父名元矩。事二北村季吟一善二國風一。故承二其遺一云。

唐詩選附言を作る。稿を以て徂徠に視しめて咨問す。徂徠見て曰く、再び之を思へと、乃ち殿煉數日、復た改め出す。徂徠又曰く、未しと。凡そ五撰して、始めて徂徠の許可を得、以て剞劂に授く。

❶ 文詞をよくねる　❷ 本來は彫刻に使ふ刀とのみとなれど、轉じて此處にては文書を版にもとす義なり、版本に附す

作二唐詩選附言一。以稿視二徂徠一。咨問焉。徂徠見曰。再思之。乃殿煉數日。復改出。徂徠又曰。未也。凡五撰。始得二徂徠許可一。以授二剞劂一。

南郭稱二唐土一。以二海外或彼邦彼方一。未嘗稱二中華中國一。與三徂徠自關二東夷物茂卿一。大庭遜。知不足齋叢書中。收論語皇疏一。而南郭序中。有二中華字一。此鮑以文改二島海外一耳。

南郭唐土を稱するに、海外或は彼の邦、彼の方を以てし、未だ嘗て中華・中國と稱せず。徂徠が自ら東夷の物茂卿と題すると、大に庭遜あり。知不足齋叢書中、論語皇疏を收む。而して南郭が序中に、中華の字有り。此は鮑以文が海外を改易せるのみ。

❶ 相違

南郭詩文尤所長。經稱當其短處。故其言人或不服焉。當二徂徠喪一。門人集議。南郭引二禮記正義一以辨二一事一。而皆疑爲二社撰一。亟再嘗昌嘗得之某篇一。猶信

南郭、詩文は尤も長ずる所にして、經義は蓋し其短處なり。故に其言人或は服せず。徂徠の喪に當つて、門人集議す。南郭禮記正義を引いて以て一事を辨ず。而も皆疑つて杜撰と爲す。再び嘗昌之を某篇に得と言ふに至つて、猶は信ぜず。

❶ 與論なき言　❷ 前日

南郭不レ談二經濟一。每曰。如二熊澤了海一。才抱二經世一。身居二要地一。故言行功建。世儒之談二當世一。雖二或靡可レ聽。時不レ可レ施。彊施則果誤レ國。要レ之身不レ居二樞筦一。徒辨給售レ己耳。老子曰。知者不レ言。斯言諒矣。

南郭曰。宋儒窮理說。豈易レ極二其宗旨一乎。今人四書集註猶且不レ能レ精レ之。亢顏自稱二朱學一。可レ發二一笑一。此邦得二朱之意一者。其唯山崎闇齋乎。

南郭經濟を談らず。特に曰く、熊澤了海の如き、才經世を抱き、身要地に居る。故に言行はれ功建つ。世儒の當世を談ずる、或は靡靡聽く可しと雖も、時に施す可からず。彊ひて施すときは則ち果して國を誤る。之を要するに身樞筦に居らず。徒らに辨給己を售るのみ。老子曰く、知者は言はずと。斯の言諒なりと。

(一) 世を經綸する才を抱く　(二) 說く所如何にも尤もらしく傾聽すべけども　(三) 要路、樞要の地位　(四) 辨舌巧みに自家を賣告す

南郭曰く、宋儒窮理の說、豈に其宗旨を極め易からんや。今人四書集註すら猶ほ且つ之を精しうする能はず。亢顏自ら朱學と稱す。一笑を發すべし。此邦朱の意を得る者は、其れ唯山崎闇齋かと。

(一) 厚かましくも朱學派と稱す

南郭集。自二初編一至二四編一。凡四十卷刊行。行于世。而詩文共以二四編一爲レ造二佳致一。僧大典曰。南郭文第四編爲二妙手一。初編可レ觀者多。二編三編未レ爲レ至。江邨北海論レ詩曰。南郭能守二地步一。不レ來二勝於一句一章一。而全功於一卷一集一。今閱二其集一。初編瑕類多。二編十存二三一。三

南郭集、初篇より四編に至る。凡そ四十卷。世に刊行す。而して詩文共に、四編を以て佳致に造ると爲す。僧大典曰く、南郭の文、第四編を妙手と爲す。初編は議す可き者多し。二編・三編は未だ至れりと爲さずと。江邨北海詩を論じて曰く、南郭能く地歩を守つて、勝を一句一章に求めず。而して功を一卷一集に全うす。今其集を閱するに、初編は瑕類頗る多し。二編は十に二三を存し、三編・四編最も粹然たり。乃ち知る此老、剪裁老いて益々精到なるをと。然るに酸鹹嗜好各々喜ぶ所有り。東藍田が小栗元蒲に答ふる書に云ふ、不佞壯歲にして諸老先生に從ひ、芙蕖館の文を論ず。誠に本邦に於て比無きは則ち比無し。然るに其初編は則ち未だ混化の地に至らず。是を以て斧斤材を取り、蘄踏の痕蹟多く見る。若し夫れ二編・三編は、一切圓機混化して蹤なし。或は得意の篇に至れば、則ち李・王以下敢へて齒せず。四編は則ち衰ふ。宇士新、南郭が守秀緯を送る序を評して曰く、子遷、濟南を學び、自ら謂ふ之を得たり

編四編最粹然矣。乃知此老。剪裁老奏精到。然酸鹹嗜好各有所喜。東壁田答二小栗元卿一書云。不侵肚餒從二諸老先生一。論二美菓館之文一。識於二本邦一無レ比則無レ比。然其初編則未レ至二造化之地一。是以弄斤取レ材。模踏痕跡多見。若夫二編三編。一切縦横混化亡レ跡。至二成得

と。此篇は即ち其撰する者なり。然れども濟南は潔にして深、子遷は蕪にして淺、門牆猶ほ遠し。何ぞ堂室を論ぜん。蓋し天才秀異は結撰に苦まず。故に學に乏しく、思に少なく、事に疎にして、字に昧し。其の李交に於けるや未だ盡く解する能はず。是を以て未だ其法を得ず。自運の如きに至つても、亦倭墮多し。然りと雖も子遷は猶ほ論ず可し。餘は未だ論ず可からずと。吾が祖曰く、南郭天才流麗にして、其詩合作の者眞に古人に配するに足る。然れども其聲律動れば法度を失ふ。是れ學力の足らざる處なり。文に至つては則ち大較婉佻、浮にして實に乏しく、雜にして法に淺し。譽一世に高しと雖も、而も實殊に稱はずと。物茂卿嘗て其初稿に序して云く、它日子遷をして一方に木鐸たらしめば、詩の教庶幾くは之を一世に被らしめんかな。文も亦然り。然れども其慧にして才敏なる、故に其巧と俊と終に或は全く之を閑づる能はず、時に之を出す。子遷乃ち有せざる所無きこと已に見るべし。茂卿の其徒に私す

意之篇。則李王以下不二敢踏一也。四編則衰矣。宇士新評下南郭送二守秀緯一序上曰。子遷學二濟南一。自謂得レ之。此篇卽其最盛者。然濟南潔而深。子遷素而漫。門旨猶遠。何

と雖も、其の之が爲に諱掩すべからざるを以てなり。

論二堂室一。蓋天才秀異。不レ苦二結撰一。故乏レ學。少レ思。疎二於事一。而昧二於字一。其於二李交一未レ能二盡解一。是以未レ得二其法一。至レ如二自運一。亦多二倭墮一。雖レ然子遷猶可レ論。餘未レ可レ論也。吾祖曰。南郭天才流麗。其詩合作者眞足レ配二古人一。然其聲律動失二法度一。是學力不レ足處。至レ文則大較婉佻。浮而乏二於實一。雜而漫二於法一。雖二譽高二一世一。而實殊不レ稱。物茂卿嘗序二其初稿一云。它日使二子遷木二鐸一方一。詩之教庶幾被二之一世一哉。文亦然。然其聲律動失二法度一。是學力不レ足處。至レ文則大較婉佻。浮而乏二於實一。雜而漫二於法一。雖二譽高二一世一。而實殊不レ稱。物茂卿嘗序二其初稿一云。它日使二子遷木二鐸一方一。詩之教庶幾被二之一世一哉。文亦然。然其慧而才敏也。故其巧與レ俊終或不レ能二全閑一之。時出レ之。子遷乃無レ所レ不レ有已。可レ見。雖二茂卿之私二其徒一哉。以二其不レ可二爲レ之諱一。

(一)四編最粹　(二)剪裁老奏　(三)酸鹹嗜好　(四)東壁田答二小栗元卿一書　(五)不侵肚餒　(六)諸老先生　(七)撰に苦まず　(八)門牆猶ほ遠し　(九)天才秀異　(一〇)流麗にして　(一一)古人に配する　(一二)婉佻　(一三)木鐸　(一四)意之篇　(一五)踏　(一六)王以下不二敢踏一也　(一七)衰矣　(一八)宇士新評　(一九)南郭送二守秀緯一序　(二〇)學二濟南一　(二一)自謂得レ之　(二二)最盛者　(二三)諱掩

(一)妙所にいたる　(二)立論を堅實にす　(三)恐も頼もきず　(四)りつぱ　(五)字句の彫琢　(六)醜いとかちいと好みが過ぎ　(七)伊東東田　(八)南郭の別號　(九)國殿の境　(一〇)斧にて材木を斬取る如く强ひて他より材料を取り入れ、前人を模倣しあと多し　(一一)南郭の詩、(一二)李攀龍、(一三)宇野士新、(一四)狙徠の門下柳大潮に從ふ　(一五)守屋秀鋒　(一六)南郭の字　(一七)王世貞以下の文は比較にならず　(一八)粗雜にして清新　(一九)門や垣根にも遠きほどゆゑ堂に上り室に入るを論ずる要なし　(二〇)すぐれた天才は文を作るに苦心せず　(二一)天稟の才うるはし　(二二)古人に比す　(二三)詩の調律　(二四)なまめかしくして輕し　(二五)古支那の官吏が法令を人民に示す時などに鳴らしたるものにて、木の舌のつきたるものなり、轉じて世を敎へ導く者　(二六)其の技巧と俊才　(二七)いみもはひ離す

高蘭亭曰。余與南郭一友者十數年。未嘗見喜慍之色。其平生隨己所好。毀譽不拘。與物無競。頗類謝安爲人。

高蘭亭曰く、余南郭と友たること十數年、未だ嘗て喜慍の色を見ず。其平生己の好む所に隨ひ、毀譽拘らず、物と競ふ無し。頗る謝安の人となりに類せりと。

一 高野蘭亭、徂徠門　二 喜び又いかる色を見ず

又問南郭一曰。先生詩取誰爲準的。曰。余非必有所師法。焉初年唯好讀杜詩。今而窮思之。雖拙劣。間得杜之髣髴者。蓋爲此故也。

又南郭に問うて曰く、先生、詩は誰を以て準的と爲すと。曰く、余必ずしも師法する所有るに非ず。初年唯好んで杜詩を讀む。今にして窮に之を思ふに、拙劣と雖も、間〻杜の髣髴を得るものは、蓋し此が爲の故なりと。

一 標準　二 古人の詩を師として模範とす　三 杜甫の詩に似よりたる所あるはこのためなり

男惟恭。字原卿。才藻卓絶。

男惟恭、字は原卿、才藻卓絶、乃父の風有り。惜しいかな痘を病みて沒す。年僅に十七。南郭其墓に識す。詩あり鍾情集と名づく。

一 痘瘡

有乃父風。惜哉病痘而沒。年僅十七。南郭識其墓。有詩名鍾情集。

南郭年既老。園苑名流凋喪略盡。歸然獨存。是以名望益重。太宰德夫。藤東壁。松子允。縣次公。平子和。越君瑞之墓門之記。南郭皆撰之。

南郭年既に老い、園苑の名流凋喪略盡き、歸然として獨り存す。是を以て名望益〻重し。太宰德夫・藤東壁・松子允・縣次公・平子和・越君瑞の墓門の記は、南郭皆之を撰す。

一 祖徠派の名士死去して盡く　二 凋り立つて高きさま　三 春盛　四 安藤東野　五 松崎白圭、字に子允　六 山縣周南　七 平野金華　八 越智雲夢

品川東海寺中少林院。南郭墓在焉。碑高二尺餘。廣厚一尺許。其

品川東海寺中少林院に、南郭の墓在り。碑は高さ二尺餘、廣厚一尺許。其正面には、楷字にて南郭先生墓の五字を刻し、左右後の三面には、一字をも勒せず。毎歳忌辰六月二十一日を以て、其徒斯に集會し、各詩を賦して以て之を弔

す。漫せし寶曆乙卯(一)より、今に至りて絶えず。

● 九年

正面。横字刻二南郭先生墓五字一。左右後三面。不レ勒二一字一。毎歲以二忌辰六月二十一日一。其徒集二會於斯一。各賦レ詩以弔レ之。自二沒寶曆乙卯一。至レ今不レ絶。

服元雄。字仲英。小字多門。南郭義子。攝津人。仲英父某。爲二四宮祝人一。嘗訴二主祠食汚一。反爲二其爪翼一所二搏噬一。竟放逐。以二流落一死。臨レ死顧謂二仲英一曰。吾逢レ寃待レ時申レ訴。今二鬼得レ歸二父母國一。仲英痛心刺レ骨。乃至二江戸一。顧天三鳴二之官一。事始得レ辨。遂令三父仍舊享二祀於西宮祠中一。

服元雄

服元雄、字は仲英、小字は多門、南郭の義子、攝津の人。

仲英の父某、西宮の祝人の爲に、嘗て主祠の貪汚を訴へ、反つて其爪翼の爲に搏噬せられ、竟に放逐せられ流落を以て死す。死に臨み顧みて仲英に謂つて曰く、吾れ寃に逢ひ自ら雪ぐこと能はず。兒時を待つて狀を申べ、鬼をして父母の國に歸るを得しめよと。仲英痛心骨を刺す。乃ち江戸に至り、天に籲んで三たび之を官に鳴し、事始めて辨ずるを得、遂に父をして舊に仍つて祀を西宮の祠中に享けしむ。

● 神官 ● 神宮の長の貢部を公倶に訴ふ ● 手先となつて働く惡類 ● たくらみて無實の罪におとしいる ● 流離零落 ● 無實の罪 ● 死後の靈

仲英得二南郭指授一。爲二儒雅士一。已開レ門教レ人。未レ幾。南郭丈夫子皆亡。有二季女一。仲英就聲。仲英本姓中西。於レ是冒二服氏一。其子孫至レ今世住二南郭故宅一。不レ墜二家聲一。是古人所二希覯一也。

仲英、南郭の指授を得、儒雅の士となり、已に門を開きて人に教ふ。未だ幾ならず、南郭の丈夫子皆亡す。季女あり。仲英就いて聲す。仲英、本姓は中西、是に於て服氏を冒す。其子孫今に至り世〻南郭の故宅に住し、家聲を墜さず。是れ古人に希に覯る所なり。

● 純粹の儒者 ● 男の子 ● いりむことなる

仲英最も詩を善くす。而も南郭と頗る途を異にす。餘熊耳蹈海集に跋して之を論ず。其略に曰く、蓋し仲英の述作に於ける、別に自ら機軸を出し以て一家

仲英最善レ詩。而與二南郭一頗異レ途。餘熊耳

踐二踏海集一論レ之。其略曰。蓋仲英於二遠作一。欲下別自出二機軸一以爲中一家上者耳。嘗曰。苟有レ得二於我一。雖二家風一所レ不二必守一也。我雖二不肖一。豈至下步趨不レ能二自施一。徒從レ人周旋。以此爲レ不レ墜二家聲一乎。則其志可二以觀一矣。蓋仲英方レ館二于郭翁一。或有下以雖二於爲レ後者一。故冒及レ之也爾。余嘗過二其房一。於二几上一見レ有二端明集一。乃亦知其於レ文不レ必レ漢。於レ詩不レ必レ唐。詩亦集二宋美一以成レ大者也。而退省二其所レ爲一。文不レ必レ漢。未二嘗不レ漢。詩不レ必レ唐。未二嘗不レ唐。而二者雜二諸宋一。未二嘗墮レ宋。則雖レ所レ不二必守一乎。而竟未レ得レ不レ以二家風一矣。

を爲さんと欲する者のみ。嘗て曰く、苟も我に得ること有れば、家風と雖も必ずしも守らざる所なり。我れ不肖と雖も、豈に歩趨自ら施すこと能はず、徒に人に從つて周旋し、此を以て家聲を墜さずと爲すに至らんやと。則ち其志以て觀る可し。蓋し仲英郭翁に館するに方つて、或は以て後たるを難ずる者有り、故に言之に及べるのみ。余嘗て其房に過り、几上に端明集あるを見たり。乃ち亦知る、其文に於ける漢を必とせず、詩に於ける唐を必とせず、將に宋美を集めて以て大を成さんとする者なるを。而して退いて其の爲す所を省るに、文漢を必とせざるも、未だ嘗て漢ならずんばあらず。詩唐を必とせざるも、未だ嘗て唐ならずんばあらず。而して二者諸を宋に雜へて、未だ嘗て宋に墮ちず。則ち必ずしも守らざる所と雖も、而も竟に未だ家風を以てせざるを得ずと。

(一) 大内熊耳　(二) 新しき發明をなす　(三) 自分勝りにて歩み走ること能はずして人に從ひて立ちまじる　(四) 窟　(五) 多くの美を集め取る　(六) 漢唐を宋に交へて宋にまちず

藤煥圖。字東壁。小字仁右衛門。號二東野一。下野人。東野本姓瀧田氏。幼爲レ孤。乃來二江戸一業二於安藤氏一。因冒二其姓一。又修爲レ藤。初學二於中野撝謙一。亡レ幾更師二徂徠一。憤激自奮。才氣大發。於レ是以レ儒仕二柳澤侯一。年二十九

卷之七

藤煥圖

藤煥圖、字は東壁、小字は仁右衛門、東野と號す。下野の人。

東野本姓は瀧田氏、幼にして孤となり、乃ち江戸に來り安藤氏に養はる。因つて其姓を冒す。又修して藤となす。初め中野撝謙に學ぶ。幾も亡く更めて徂徠を師とし、憤激(一)自ら奮ひ、才氣大に發す。是に於て儒を以て柳澤侯に仕ふ。年二十九にして官を罷む。侯猶ほ優待して粟を輪(二)ると云ふ。徂徠始めて古文辭を唱ふるや、世の學者舊聞(三)に牽かれ、之を信ずる者罕なり。東野、縣周南(四)と早く諸子に先んじて之に歸し、東野最も肯綮(五)を得たり。徂徠終に海内に木鐸(六)たること、東野實に之を贊翼(七)す。

一 自ら發奮して才氣大に發す　二 歲米を給る　三 今まで聞く所にひかれる　四 山縣周南　五 物の急所を

謁レ官。侯猶優待輪レ粟云。徂徠始唱二古文辭一也。世之學者牽二於舊聞一。罕二信レ之者一。東野與二縣周南一早先二諸子一歸レ之。東野實贊翼之。

うきくとらへたることば、書社骨につけるの肉、深く骨のいりくゆる所、古、料理の名人が、牛を料理するに、其及び骨節にあたりしかの事より出づ　六 社會を敎へ導く者　七 たすく

東野家屢空。嘗寄二書徂徠一借レ財。徂徠誤解其數。今撮二錄各書于左一。東野書曰。向者舖書二天中記一至。曰。九日在レ邇。主人潢二黃白一之切。交金在二節前一。二國三方而得レ易。若不レ能。東野家屢空し。嘗て書を徂徠に寄せ財を借る。徂徠誤解して其數を違ふ。今各書を左に撮錄せん。東野の書に曰く、向に書舖天中記を齎して至る。曰く、九日邇(一)に在り。主人黃白(二)に渴するの切なる、交金節前(三)に在らば、二國三方にして易ふることを得。若し能はずんば、三國二方にして獲んことを請ふ者先に在りと。不佞(四)此物に渴すること久し。唯圖にして方なる者、猶ほ之れ其の渴するがごときなり。先生其れ或は能く僕の爲に一朝の供(五)を損じ、其渴を免れしめんや否や。九月は吾れ能はず。其れ十月に至らば、必ず能く算帳を了へん。伏して方便を冀ふ。千祈萬祝(六)と。徂徠の答書に曰く、承(七)く金を求むること

詩二三圓二方而擭一者先在焉。不佞渇二此物一久矣。唯圓而方焉者。猶二之其渇一也。先生其或能爲レ僕損二一朝之供一。令レ免二其渇一否。九月吾不レ能矣。其至二十月一必能了二算帳一。伏冀二方便一。千祈萬祝。徂徠答書曰。承求レ金。其言若二周蝌斗時券契者狀。子幸不レ生二天王家一。天王則必書二

を。其言蝌斗時(八)の券契といふ者の狀の若し。子幸に天王家に生れず。天王ならば則ち必ず春秋(九)に書せん。子の求貸を爲す所、蓋し呂にして足らず、㗊にして餘あり。品か品か。是亦易易たるのみ。書き訖つて、東方朔(一〇)・郭舍人の儔れる所の隱者のごときを覺ゆ。聊か病牀の一玩に供するのみと。東野又書して曰く、所謂二天三地(一一)は、向に既に以て先生の諾を蒙る。唯先生其方なる者を品(一二)とす。乃ち僕又隨つて之を圓にせんを欲す。未だ知らず能く易易たりや否やを。九・十月の間、廩米(一三)目に在り。伏して冀くは握中(一四)の玉をして佗人に是れ歸するなからしめよ。則ち人をして或は僕を智嚢と稱せしむるもの、實に此物に在るなり。即ち毳毛(一五)と雖も、然れども亦倘しくは先生の六翮(一六)間の物ならん。力新甫(一七)、蠢なれども信ずるに餘あり。若し附(一八)せられなば、亦僕が親受に等しきなりと。徂徠又答ふる書に曰く、鄉に所謂蝌斗時の券帖は、予嘗て誤り謂つて方なる者三とす。足下則ち之を篆(一九)にす。是れ予が月俸の餘を併

于春秋一矣。子之所レ爲二求貸一。蓋呂而不レ足。㗊而有レ餘。品乎品乎。是亦易易耳。書訖。覺二東方朔郭舍人所レ爲隱者一。聊供二病牀之一玩一耳。東野又書曰。所謂二天三地者。向既以蒙二先生之諾一。唯先生品二其方者一。乃僕又欲二隨而圓一レ之。未レ知能易易乎否。九十月之間。廩米在レ目。伏冀使三握中玉無二佗人是歸一哉。則令三人或稱二僕智嚢一者。實在二此物一也。即雖二毳

せて以て優游歳を卒ふる所の者、何ぞ以て能く足下の需に應ぜんや。然りと雖も足下則ち曰く、九・十月の交(二〇)云爾と。猶ほこれ外府(二一)のごとくなるかな。且や篆(二二)、蝌斗の時を距ること未だ遠からずと爲す。吾れ過てり。吾れ過てり。謹で團團たる者三を以て、諸を左右に致すと。

(一) 九月九日重陽の節句 (二) 錢なり、其色よりいふ (三) 金の支那節句以前ならば二つの圓いものと三つの四角いものにて貸るべし、二圓三方は蓋し二兩三分をさす (四) 天中記を欲すること多年 (五) 一朝の食饌を缺してわが渇望を醫したまはんや (六) 九月には返金なし難けれど十月に至らば必ず勘定を濟さん (七) 金を貸せとのこと承知せり (八) 蝌斗の文字を使ひし時代の意、蝌斗の文字は字の畫點がおたまじやくしの形に似たるよりいふ、支那の古文字也 (九) 說文 (一〇) 史記滑稽傳に見ゆ。隱者は隱語の意 (一一) 二圓三方と同じ (一二) 四角のもの三つ、即ち三分 (一三) 廩米下げ渡し眼前に在り (一四) 手の中の玉、即ち審物 (一五) むくげ (一六) 大鵬の有する六箇の大羽 (一七) 下僕の新甫。越後水原の農市島大伯のこと (一八) 使に託せられなば、僕の直接に受けたるに等しとなり (一九) 蝌斗の文字を篆書にしたること、即ち誤らざるやう一歩見易く書かれたりとの意 (二〇) 九月十月の頃には廩米下がれば辨濟するといひしをさす (二一) 金穀財物を藏め置く倉庫 (二二) 前書と後書との間違からざれば未だ時期を失はじとの意を含めていふ也

毛一哉。然亦倘先生六關問之物也。力新甫。蘆有餘二予信。若蒙見附。亦等二僕親受一也。徂徠又答書曰。鄉所謂蝸斗時券帖者矣。予嘗誤謂方者三。足下則篆之矣。是予所下倩二月俸之餘一以優游卒歲者。何以能應二足下之需一哉。雖然足下則曰。九十月之交云爾。猶二之外府一哉。且也篆距二蝸斗時一爲未遠也。吾過矣。吾過矣。蘆以二鄙圃者三。致二諸左右。

東野俊傑不羣、之に加ふるに刻苦淬勵なる、天性に出づ。其鴻文鉅藻、既に藝苑に魁たり。惜しいかな卒に劬悴を以て咯血の疾を致して沒す。年僅に三十七。世、交不交の者を問はず、之を惜まざるはなし。嗚呼天少しく之に年を假さば、殆ど量る可からざるなり。

● 骨折り苦しみて執學す　● すぐれて大なる文才文理圓一　● 心勞を過勞す　● 交際するとせざるとを論ぜず

東野俊傑不羣。加之剛苦淬勵。出二於天性一。其鴻文鉅藻。既魁二藝苑一。惜哉卒以二劬悴一致二咯血疾一沒。年僅三十七。世不レ問二交不交一。不レ惜レ之。嗚呼天少假二之年一。殆不レ可レ量也。

徂徠の東野に於ける、才學優長、且つ門に及ぶの最も先なるを以て之を愛重す。疾んで終るに至り惜むこと甚だし。其徒に與ふる書に、言之に及び、讀者をして感動せしむ。一二を左に擧げん。富春山人に與ふるに曰く、綿り悲む東壁四月十三日を以て死するを。蓋三世大淵獻を以て降り、亦終に之を以て勝る。記す十年前、蔡歸長吉と同じうして、殆ど將に心肝を嘔盡し以て死せんとして、死せず。今遂に心肝を嘔出して以て死す。豈に白玉樓記、必ず其人を待つか。天圖書の府、以て久しく虛しうす可からざるか。悲しいかな。蔡子なくして、壙冢奠予として歸する所なし。蔡が親戚姻の蔡を祝つて裸にせんと欲す。余勢力めて之を爭ふ。廼ち免る。又其家に塔葬せんと欲す。諸友人匍匐して以て之を救ふ。廼ち金を糾せ石を買つて之を碑建し、百歲の後をして其の儒者の墓たるを識らしむ。蔡生平著す所其藁を留めず。諸友人百方之を求め、勝錄卷を成す者、僅かに三。且つ其の遺に在る者、悉く集るを俟つて、後之を梓し、諸友人の爲る所の碑志、及び哭詩祭文を彙めて、以て其後に附す。庶くは以て蔡を不朽にするに足らんのみ。足下豈に蔡が甲を裏にして以て送りし時の事を忘れ

先二受二業之一。至二疾終一。諸者往。與二其往一書。言及レ之。使二聽者感動一。擧二一二於左一。與二富春山人一曰。綿悲東壁以二四月十三日一死。邇三世以二大淵獻一降也。亦終以レ之勝焉。記十年前。與歸長吉一。面殆嘔二長吉一。面殆嘔二心肝一以死。圖不レ死。今遂嘔二心肝一以死。豈白玉樓記。必待二其人一邪。天圖書府。以久虛。蔡子無レ歸。壙冢奠予。諸者相爭。廼免。又欲二塔葬一。諸友人匍匐救之。廼金糾石買。碑建。百歲後。使二儒者識一。蔡生平著。不レ留。諸友人百方求。勝錄成。僅三。且其遺。諸友人彙。以レ附。庶不朽。足下豈以二甲裏一送。時事忘。

書之府。不可以久虛一邪。悲哉。渠無子。而嬌女賢乎無所歸焉。渠親戚欲下視二嬌之窮一而裸余體力爭之。遂免。又欲塔二婆其冢一。諸友人個個以救之。遂糾金買石而碑二建之一。俾四百歲後識三其爲二備者墓一焉。渠生平所著不留二其稿一。諸友人百方求之。謄錄成卷者。僅三焉。且峽二

しか。足下渠が詩若しくは文を藏せば、則ち之を寫致せよ。渠の已に散ずるの魂、庶くは亦來り歸せんかなと。又香國禪師に與ふるに曰く、渠平生其親戚の力を得ず。惟だ不佞に是れ倚る。故に其疾と死とに當つては、不佞の百事皆廢す。是れ其の久しく留めて師の書に報ぜざる所以の故なり。蓋し昔者師を草堂に享す。樂を張れば、東壁橫吹以て之を倡ふ。詩を賦すれば、東壁曼聲以て之に和す。而して師の賜ふ所の金巨羅、亦東壁能く三酌以て之を賞す。今は則ち亡しと。又下館侯に與ふるに曰く、十二日不佞往いて覲れば、則ち相顧みて曰く、歲大淵獻にあり。吾れ東壁に歸るの期至れり。世心世肝、既に已に嘔盡すと。辭氣壯なること甚だし。渠蓋し不佞が爲す所の字說中の語を記して爾云ふ。不佞謂ふ猶ほ尚ほ能く戲る。且つ死せじと。豈日訃至る。悲しいかな。渠が貧窶は君侯の知る所。君侯卿にして之を翼すること、不佞諸人の知る所。然るに其貧を免れて以て死する能はず。貧は固より士の常、庸何ぞ傷まん。

其在レ遠者悉集。而後梓レ之。愛二諸友人所レ爲碑志。及哭詩祭文。以附二其後一。庶足三以不二朽渠一已。足下豈忘二渠衷一甲以送時事一邪。足下藏二渠詩若文一。則寫二致之一。渠已散之魂。庶亦來歸哉。又與二香國禪師一曰。渠平生不レ得二其親戚之力一。惟不佞是倚。故當二其疾與レ死。不佞之百事皆廢。是其所二以久留不レ報二師書一之故也。豈昔者享二師于草堂一。張レ樂乎。東壁橫吹以倡レ之。賦レ詩乎。東壁曼聲以和レ之。而師所レ賜金巨羅。亦東壁能三酌以賞レ之。今則亡矣哉。又與二下館侯一曰。十二日不佞往覲。則相顧曰。歲在二大淵獻一。吾歸二東壁一之期至也。世心世肝。既已嘔盡。辭氣壯甚。渠豈記二不佞

渠の才と學を以て、之に假すに年を以てせば、豈に不佞の能く及ぶ所ならんや。天之を貧にし之を窶にし、又之が年を奪ひ、加ふるに後なきを以てす。何ぞ其れ毒するや。不佞亦祝予の嘆を免かれんやと。

一 十二支の亥の別名、卽ち亥の年を以て生れ、亥の年に死せゞとなり　二 唐の李長吉　三 嘔血　四 李長吉將に死せんとして夢に一服書を持するを見る。曰く、天上の白玉樓成る、君を召して記を作らしむと　五 天上の圖書府を司る文士缺員となれるを以て東野を召し上す　六 編はやもめ、鰥々は獨りさびしげに立てるさま　七 財布の金を參つては使かれせんとす　八 佛式に從ひ卒都婆を建てんとす　九 こけつまろびつ急ぎて之に赴く　十 うつして送る　十一 禪師をわが家にもてなす　十二 笛を吹く　十三 卿を賢にゐはひて感化せしむ。少時扶持せしをさす　十四 今年は亥の歲　十五 俗世の心肝すべに吐きつくす。嘔血をさす　十六 公羊傳に、子路死す、孔子曰く、天予を殺つ、とあり、說は斷つなり、卽ち天が吾がたのゝとする者を斷てりとの意

所レ爲字說中語二云レ爾。不侯謂猶倘能戲。且不レ死。寧日計至。悲哉。遍貧窶君侯所レ知。君侯卵而翼レ之。不侯請人所レ知。然不レ能レ免二其貧一以死。貧固士之常。庸何傷乎。以二集之才之學。而假之以レ年。豈不侯之所二能及一哉。天貧レ之窶レ之。又奪二之年。加以無レ後。何其毒也。不侯亦免二覩乎之嘆一乎。

東野沒後二十年。遺稿三卷。剞劂始成。春臺序陳レ初本多侯將二捐レ貲刊レ之。而終不レ果レ事。此序春臺文集所レ載者。多二二百七十八字。皆刺侯也。蓋侯將レ布二字印一爲レ一版乎。俱錄呈レ侯。書曰。嘉活字解成。則東壁且レ不レ朽。後。且之子無レ鬚。豈寧レ俾二字有レ鬚乎。

東野の沒後二十年にして、遺稿三卷剞劂始めて成る。春臺の序、初め本多侯將に貲を捐て之を刊せんとして、終に事を果さざるを陳ぶ。此序春臺文集に載する所の者、二百七十八字多し。皆侯を刺るなり。蓋し侯將に字印を布いて一版を爲さんとするや、俱錄、侯に呈する書に曰く、承く、活字頗る成ると。則ち東壁且に朽ちざらんとす。且つ之の子鬚なし。豈に字に鬚あらしむべけんやと。

● 出版費を出す　● 出版を引受ける人の費として世の生ずることに假りて鬚せしなちん

宇士新與二大潮禪師一書曰。夫元美世所レ推。誰不レ希者。而庶幾者鮮矣。嗣吾物翁新寧縱橫。是太海紫瀾。滕東壁長語或有二庶幾一焉。近時僧大典。以二能文一擅二時名一。每曰。蘐園徒善二文章一者。獨藤東壁。東野墓碑銘。服南郭撰。詩銘秋濤園撰。墓在二淺草茅原福壽院一。小石碑勒二銘序一。後刻二同盟十有七人貲一立之。

宇士新、大潮禪師に與ふる書に曰く、夫れ元美は世の推す所、誰か希はざる者ぞ。而も庶幾する者鮮し。獨り吾が物翁、新意縱橫、是れ大海紫瀾なるかな。滕東壁の長語或は庶幾き有りと。近時僧大典、能文を以て時名を擅にす。每に曰く、蘐園の徒文章を善くする者、獨り藤東壁のみと。

● 宇野士新　● 王元美　● 迫隨し得るもの少し　● 物徂徠先生は斬新の意見を縱橫自在に揮ふ　● 大洋の波濤の如く宏大　● 東野　● 徂徠門の文士

東野の墓碑銘は、服南郭の撰、詩銘は秋濤園の撰なり。墓は淺草茅原福壽院に在り。一小石碑、銘序を勒す。後に、同盟十有七人貲を合せて之を立つと刻す。

● 服部南郭　● 秋元子師　● 墓碑銘の序文を刻みつける

山縣孝孺。字次公。小字少助。號周南。周防人。仕國侯。周南父長白。字子成。官長門職。居師儒。欲周南不堅家學。攜至江戸。托祖徠受業。時周南年甫十九。英特負才氣。已學於家庭。通其大義。及見祖徠。孜孜更無他念。學日益進。是時祖徠業未大振。而周南東野早登其門。迭爲羽翼。是以及祖徠成大

山縣孝孺

山縣孝孺、字は次公、小字は少助、周南と號す。周防の人。國侯に仕ふ。周南が家學を墜さざるを欲し、攜へて江戸に至り、祖徠に托して業を受けしむ。時に周南年甫めて十九、英特才氣を負ふ。已に家庭に學び、其大義に通ず。祖徠に見ゆるに及び、孜孜として更に他念なし。學日に益〻進む。是時祖徠業未だ大に振はず。而して周南・東野早く其門に登り、迭に羽翼たり。是を以て祖徠大家を成すに及ぶや、二子を待つこと羣弟子に異なりと云ふ。

● すぐれて周南、才氣をたのむ ● 道の大意を知る ● 大家となる

家。待二二子一者異二羣弟子一云。

正德辛卯。朝鮮信使。途歷二長州一。館二赤間關一。周南乃奉二君命一。接二對之一。筆談唱酬。信使驚二其儁才一。雨伯陽嘗稱曰。海西無雙。祖徠書曰。夫雨生者。故不レ足三以輕重一足下一。雖レ然。海西者苞二筑以南一而言レ之也。謂二之無雙一者。莫二之與京一也。盛哉言乎。非二足下一未レ足三以當レ之矣。吾始以爲海內唯足下與二東壁一。而今而後又有二雨生一。

正德辛卯、朝鮮の信使、途長州を歴、赤間關に館す。周南乃ち君命を奉じて之に接對す。筆談唱酬、信使其儁才に驚く。雨伯陽嘗て稱して曰く、海西無雙と。祖徠の書に曰く、夫れ雨生は、故以て足下を輕重するに足らず。然りと雖も、海西とは、筑以南を苞ねて之を言へるなり。之を無雙と謂ふは、之と與に京なるはなしとなり。盛なるかな言や。足下に非ずんば未だ以て之に當るに足らず。吾れ始め以爲へらく、海內唯だ足下と東壁とのみと。而今而後又雨生有りと。

● 元年 ● 書問の使 ● 筆談にて問答す ● 雨森芳洲 ● 九州に比擬し ● 雨森芳洲の官は足下の義 ● 價を左右するに足らず ● 筑前筑後以南をとめていふ ● 安藤東野 ● 今よりして後芳洲あり

周南少二南郭一四歲。文章雖レ不レ及。亦自足二不朽一。然不二自足一。病中尚ほ書を南郭に寄せて曰く、今疾年を踰えて已えず。崖岌乎たり。傾く者は必ず覆へる。幾ど起たざらん。余文辭に於て喩る所無きは、老兄の熟知する所なり、諸友門人梓して傳へんと欲す。拒んで允さず。數〻請ひ數〻拒む。今に於て數年所なり。余死せば彼必ず其意を行はん。其意を行はば必ず諸を老兄に圖らん。請ふ足下を勞せん我が爲に蕪を刈り莠を除き、嗒繩墨を存し、同社の記を貽すことなからば幸甚と。

周南、南郭より少きこと四歲。文章及ばずと雖も、亦自ら不朽たるに足る。然るに欿然自ら足れりとせず、病中尚ほ書を南郭に寄せて曰く、今疾年を踰えて已えず。崖岌乎たり。傾く者は必ず覆へる。幾ど起たざらん。余文辭に於て喩る所無きは、老兄の熟知する所なり、諸友門人梓して傳へんと欲す。拒んで允さず。數〻請ひ數〻拒む。今に於て數年所なり。余死せば彼必ず其意を行はん。其意を行はば必ず諸を老兄に圖らん。請ふ足下を勞せん我が爲に蕪を刈り莠を除き、嗒繩墨を存し、同社の記を貽すことなからば幸甚と。

(一) 不滿足にもゝふ說　(二) 危き高き皇　(三) 多分回復せざるべし　(四) 履行し　(五) 後世に傳ふ　(六) 出版せん　(七) 蕪は荒れたる畑なり、莠は雜草、卽ち草をかり荒れたる地を開く意にて、文學を開發改良するをいふ　(八) 淡に協ふや　(九) 我同社中の恥辱

祖徠於二古人一。指擊詆訶不レ遺二餘力一。其徒承二口脗一。漫失二厚道一。獨周南溫良馴雅。其持論稍平。書二吉齋漫錄後一曰。向者在二東都一。或有二言者一。仁齋先生倡レ學。本有二帳中之書一。諸弟子輩不レ得二與見一。曰吉齋漫錄。曰橫記。余甚不レ信。既而得レ見二漫錄一。其言鑿鑿有レ味。所レ謂

祖徠の古人に於ける、指擊詆訶餘力を遺さず。其徒口脗を承襲し、浸厚道を失す。獨り周南溫良馴雅、其持論稍平かなり。吉齋漫錄の後に書して曰く、向者に東都に在り。或は言ふ者有り、仁齋先生學を倡ふるに、本帳中の書有り。諸弟子輩與り見るを得ず。曰く吉齋漫錄、曰く橫記と。余甚だ信ぜず。既にして漫錄を見るを得て、其言鑿鑿として味有り。所謂理氣性命、宋學の謬誤舉既に發揮す。實に先づ我口の嗜む所を得る者なり。夫れ述べて作らざるは、君子の道なり。仁齋何ぞ珠を竊み櫝を還すの陋有らん。苟も是を之れ述べば、惡ぞ其書一言も相援及せずして自ら古處する者有らんや。馴ふに其書既に成るの後適〻諸を見るか、或は不幸終身見得ざる者有らんも、皆知る可らざるなり。是を以て仁齋を刺るは誣ふるなり。

(一) 力のありだけ攻擊し、そしる　(二) 祖徠が他人を好んでそしる口さきをうけつぐ　(三) 溫厚の道を失す　(四) もだやかにれれてある　(五) 秘藏の書　(六) しつかりとして味あり　(七) 天地間先づ理あり然る後に氣あつて物を

理氣性命。宋學謬誤擧既發揮。實先得二我口之所一嗜者也。夫述而不一作。君子之道。仁齋何有二竊一球璵之陋。苟是之述。惡有二其書一冒不二相援及一。而自古處者乎哉。顧其書既成後適見一踏。或有二不幸終身不一得一見者一。皆不一可一知也。以一是刺二乎仁齋一誣矣。

先世且つ人性は天より享受すとなす說　まちがひを皆說明す　先聖の道を祖述して自ら作爲せず　自己の述著

護苑之徒。春臺獨以二禮法一自任。且其賦性之嚴。辨論之勁。縱有一所一疑。其徒不二敢議一。而獨周南能忠告之。其書曰。日者於二子遷所一得一見二老兄鎌倉紀行一。記載該博。縱ひ疑ふ所有るも、其徒敢へて議せず。而して獨り周南のみ能く之に忠告す。其書に曰く、日者子遷の所に於て、老兄の鎌倉紀行を見るを得たり。記載該博、文辭豐縟、當今の時、麟の角なるかな。其中に疑ふ可き者有り。皇某皇某とは、是れ何の言ぞ。老兄は一代の名儒、社中の巨擘、世の矜式する所、言は則ち法と爲る。廟も舌に及ばず。弟嘗て謂ふ、大東、宇宙に超ゆる者三あり。開國以來、一姓君と爲す。載籍の記せざる所なり。周二分を有ち、人に服

護苑の徒、春臺獨り禮法を以て自ら任ず。且つ其賦性の嚴にして、辨論の勁き、縱ひ疑ふ所有るも、其徒敢へて議せず。而して獨り周南のみ能く之に忠告す。其書に曰く、日者子遷の所に於て、老兄の鎌倉紀行を見るを得たり。記載該博、文辭豐縟、當今の時、麟の角なるかな。其中に疑ふ可き者有り。皇某皇某とは、是れ何の言ぞ。老兄は一代の名儒、社中の巨擘、世の矜式する所、言は則ち法と爲る。廟も舌に及ばず。弟嘗て謂ふ、大東、宇宙に超ゆる者三あり。開國以來、一姓君と爲す。載籍の記せざる所なり。周二分を有ち、人に服

文辭豐縟。當今之時。麟之角哉。其中有二可一疑者一。皇某皇某者。是何言也。老兄一代名儒。社中巨擘。世所二矜式一。言則爲一法。廟不一及一舌。弟嘗謂。大東超二於宇宙一者三焉。開國以來。一姓爲一君。載籍所一不一記也。周有二二分一。服二于人一也。稱爲二至德一。今也有二天下一。而不一去二臣位一。秦人壞二封建一。利名以治。堂堂中國。於一今三千年一。不一能二復復一。當今封建密二於周人一。而仁浹二於海隅一也。漢以來所一不一聞焉。此三者實超二于宇宙一矣。名教存二

するや、稱して至德となす。今や天下を有するも、而も臣位を去らず。秦人封建を壞ち、刑名以て治む。堂堂たる中國、今に於て三千年、復復すること能はず。當今封建周人より密にして、仁海隅に浹し。漢以來聞かざる所なり。此三者は實に宇宙に超ゆ。名教吾輩に存す。老兄の爲にこれ言はざるを得ず。如何、如何

一 うまれつき　二 先日　三 服部南郭　四 記載する所ひろく、文章美し　五 誠めて稀なる論　六 當時社中の頭目　七 世人の敬ひのつとる所の人　八 廟堂の堂かなるも一旦言ひしことには迫ひつかれず　九 日本が世界に超越する理由三　一〇 建國以來一姓連綿として君主たるは書物にもなきこと　一一 周は天下の二分の一を領有しながら殷に服從せるを至德と稱す　一二 德川氏天下を領有するも猶ほ臣位に在り　一三 諸侯ありて各地方を治め、官位地を世襲する制度、中央集權に對して地方分權の稱　一四 名を以て實を責め毫も容する所なき主義、申不害・韓非等之を唱ふ　一五 また再び封建制に復すること能はず　一六 仁德四海の隅々までもゆきわたる名分を正す教は吾等の保持する所

於吾數。不ル得ヲ爲ニ老兄之不也言。如何。如何。

嘗師ニ林祭酒。此事不ル見ニ行狀及墓記。獨金華贈序詳之。曰。長侯墓ニ林子之學。而公侯之貴。出入有ル度。則不ル能ヲ朝ニ夕其家ニ躬親肆業。特ル使ヲ次公就ニ弟子列ニ受而傳之。次公不ル肯。慨然嘆曰。物先生在矣。其唯成ル我也。奈何。借ニ人權鉏。匽面大磯。謂ニ

嘗て林祭酒を師とせんとす。此事行狀及び墓記に見えず。獨り金華の贈序之を詳かにす。曰く、長侯林子の學を慕ふ。而も公侯の貴き、出入度あり。則ち其家に朝夕して躬ら業を肆ふこと能はず。特に次公をして弟子の列に就き受けて之を傳へしめんとす。次公肯ぜず。慨然として嘆じて曰く、物先生在り。其れ唯我を成さんや。奈何ぞ人の鋤鉏を借り、既にして大に穫れば、富天にありと謂ひ、擲棄顧ずして可ならんや。而れども人各〻見る所あり。苟も其見る所にして爲さんか、何ぞ其れ脊脊故を愛みて已まず、狐裘にして羔袖瑕にして害あるならずとして、終に撫く所を知る無く、首鼠以て壟斷の望を爲さんや。即ち其の熱を執て之を濯ぎ、一朝にして豹變し、同盟を絕ち載書を焚き、名を佗の師に更へ、青雲自ら致さざる靡し。人或は特操なしと謂つて、目を側て視、惡聲道路に載つるも、辭せざる所なり。若し其可とする所を可とせば、

害在ル天。擲棄不ル顧可ル乎。蓋人各有ル所ル見也。苟其所ル見面爲乎。何其眷眷愛ル故弗ル已。狐裘而羔袖不ニ瑕有ル害。無ル知ル所ニ終薄。首鼠以爲ニ壟斷之望ニ乎。即其執ル熱濯ル之。一朝而豹變。棄ル不ル絕ニ同盟ニ焚ニ載書ニ更ニ名佗師。青雲自致。人或謂ル無ニ特操。側ル目而視。惡聲載ニ道路。所ル不ル辭哉。

君命も聽かざる所あり。涅すれども緇せず。正を得斃れて斯に已まん。或は其の親を負うて逃げ、海濱に建つて處り、版築居釣するも、猶ほ奴婢自ら悔り、夏畦以て安じ、身を沒して爲すことなき者に愈らざらんやと。則ち之を物先生に謀る。先生曰く、緊次公君亡きの國にあらば可なり。而れども父母の在すあり。區區の節、己を潔うして名に近づく。大義を如何にせん。君子豈に匹夫匹婦の諒を以てせんや。父母在すあり。君亡きの國あらば可なりと。次公愕然として且つ懼れ且つ泣き、遂に君命を奉ずと云ふ。

❶ 大義顯　❷ 平野金華　❸ 長州侯毛利氏　❹ 出入する に規則あり　❺ 出處周嚮　❻ 鋤鉏は田畑を鋤す すきくは。即ち大意は、人(徂徠を指す)の農具を借り受けて自己の田畑を鋤し(徂徠より教を受けて學び五經みのれば(業成り功成すれば)わが學識は天の道にして人の力にあらず(祖徠の恩にあらず)として、すべて之を顧みざるが如き事を爲し得んやとなり　❼ 見て似て得を信ずる所を敢行するとなきば　❽ ひたすら似きを願ひ願ひてやまず　❾ 狐の皮衣の貴重なるに羊の皮衣の賤しきを附するも何等発支なしとして歸着すべき所を知らず。獸が穴より首を陽したり入れたりするが如く心を二途にわかつ　❿ 壟の上より市場を見渡して利益を獨占する故事より

若可二其所一レ可也。君命所レ不レ聽也。涅而不レ緇。得レ正鵠斯已。或其負レ親而逃。遯二海濱一而處。販樂居釣。不レ猶愈中奴婢自侮。跪起如二子性一。百役無レ不二是奉一。嗟來而飽。夏畦以安。沒レ身而無レ爲者乎。則謀二之物先生一。先生曰。緊次公有二亡レ君之國一可也。而有二父母在一。區區之節。潔レ己近レ名。如二大義一何已。君子豈以二匹夫匹婦之諒一爲乎。有二父母在一。有二亡レ君之國一可也。次公愕然且慨且泣。遂奉二君命一云。

紫芝園漫筆曰。古人絶句。有下入レ耳能令二人感レ節者一。如二宋延清邙山。賀季眞回鄉偶書一。是也。物

紫芝園漫筆に曰く、古人の絶句、耳に入り能く人をして誦を成さしむる者有り。宋延清の邙山、賀季眞の回鄉偶書の如き是れなり。物先生、君彝が函嶺に遊ぶを送るに曰く、昨日晁郎藥を採つて還り、井郎今日又山に遊ぶ、山中の芝草知んぬ長短、玉筍流雲重ねて攀づ可しと。近日縣次公、子和が參州に之くを送

出づ　一一　一度にかちりと鳴る　一二　豆約を破り絶石を記したる誓約書を鳴く　一三　しつかりとしたる操守無し　一四　惡い評判　一五　論めても聞く論まず。精神の操守不拔なるをいふ　一六　以下支那の故事をひきて、自ら可とする所を可とせば、以下の人々の爲す所にも劣るまじと、其覺悟を述べしなり。蘇源云々は孫叔敖が海より驅げられしを、販鹽は傳說が版築の間より驅げられしを、屠は伊尹、釣は呂尙をさす　一七　自から奴婢の如く卑屈に　一八　人に諂ひ笑ふは夏の田を耕すより苦しと云ふ成語より、上官に諂ひ仕へて甘んずる意　一九　小さき部屋　二〇　自分の身を潔白にして名を售る　二一　俗人の所謂誠とするもの

先生送二君彝遊一函嶺一曰。昨日晁郎採レ藥還。井郎今日又遊レ山。山中芝草知長短。玉筍流雲可二重攀一。近日縣次公。送二子和之一參州一曰。休レ唱陽關三疊詞。陽關三疊不レ勝レ悲。送レ君多馬河邊柳。折自南枝二至二北枝一。亦皆易レ成レ誦也。

つて曰く、唱ふるを休めよ陽關三疊の詞、陽關三疊悲に勝へず、君を送る多馬河邊の柳、折つて南枝より北枝に至ると。亦皆誦を成し易しと。

一　口に誦す　二　君彝は山井鼎といふ、故に井郎といへり　三　函嶺は山井鼎の號なり、林羅山の門人、多く玉筍・浮雲の二山に在り　四　山縣周南　五　平野金華　六　唐の王維、元二の安西に使するを送る詩に曰く、渭城朝雨浥輕塵、客舍青々柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人と。此の結句を三たび繰返してうたふを三疊といふ　七　多摩川

平玄中

平玄中、字は子和、小字は源右衛門、金華と號し、文莊と私謚す。姓は平野、修めて平氏と爲す。陸奥の人。守山侯に仕ふ。

平玄中。字子和。小字源右衛門。號二金華一。私二謚文莊一。姓平野。修爲二平氏一。陸奥人。仕二守山侯一。

金華器宇偉然。才鋒出二儕輩一。學二徂徠一。閑二修辭一。家素貧窶不レ能レ案レ書。架上惟有二左傳・禮記・莊子・通鑑撮抄數卷一而已。其將レ屬レ文。必先見レ之者數遍。而後下レ筆。

金華、器宇偉然、才鋒儕輩に出づ。徂徠に學び、修辭に閑ふ。家素貧窶にして書を案ること能はず。(一)架上惟左傳・禮記・莊子・通鑑の撮抄數卷有るのみ。其の將に文を屬せんとするには、必ず先づ之を見ること數遍にして、後筆を下す。

(一) 器量偉大　(二) 同輩、なかま　(三) 字句を選ねて文を作るに長ず　(四) 書籍の上

少嘗遊。侮二弄一世一。獨任不レ拘。侯家嘗令布レ令曰。佳節見レ君者。宜レ用二新衣一。禁二垢衣一。而金華著二其妻衣一而出。吏尤曰。所二前布一之令。要在レ教レ君而已。

少うして嘗て遊達、一世を侮弄す。官に服するも尚ほ縱任拘らず。侯家嘗て令を布いて曰く、佳節に君に見ゆるには、宜しく新衣を用ふべし、垢衣を禁ずと。而るに金華其妻の衣を著て出づ。吏尤めて曰く、前に布く所の令、要は君を敬するに在るのみ。然るに子男女衣裳を同じうす。是れ何の禮ぞやと。金華從容として曰く、薄祿の小臣、家貧にして新衣を給する能はず。而も令犯す可からず。幸に荊婦一衣の稍華なるを有し、以て罪戾を免るゝを得たりと。事

(一) 世人を輕侮す　(二) 墨守に拘束されず富をはしいまゝにす　(三) つまりは主君を敬ふため　(四) 一枚の衣のやや美しきを有す

侯に聞ゆ。即日祿數石を加賜す。

然子男女同二衣裳一。是何禮也。金華從容曰。薄祿小臣。家貧不レ能レ給二新衣一。而令不レ可レ犯。幸荊婦有二一衣稍華一。以得レ免二罪戾一焉。事聞二于侯一。即日加賜祿數石。

嘗て徂徠と同じく墨多河に泛ぶ。問うて曰く、吉原の倡家は知らず東か西かと。徂徠東方を指示して曰く、江上に長堤有り、日本堤と名づく、所謂吉原妓樓は其堤下に在りと。金華笑つて曰く、先生の妄言、惟文字上のみにあらず、地理に於ても亦能く妄言すと。(一)

嘗與二徂徠一同泛二墨多河一。問曰。吉原倡家不レ知東邪。西邪。徂徠指二示東方一曰。江上有二長堤一。名二日本堤一。所謂吉原妓樓在二其堤下一也。金華笑曰。先生妄言。不二惟文字上一。於二地理一亦能妄言。

(一) 先生のでたらめは惟文字の上だけにあらず

金華有二一妾一。僕名月

金華に一妾一僕有り。妾名は月小夜、僕名は染之助。又猫を愛すること甚だしと

小夜。僕名染之助。又愛猫爲甚。其所蓄息蓄息二十八頭。

紫芝園漫筆載。一日余與平子和語及天文。子和曰。吾不識星。唯識北斗與明星而已。余曰。北斗信子識之乎。其所謂明星者。果是太白邪。蓋是以二歲星爲明星耶。子和笑曰。吾不識二眞明星一也。

金華與春臺。每自稱老。春臺以爲非禮。數貽書責之。而金華不改。春臺書云。足下每與純書牘。自稱愚老。老尊稱也。故呼先生長者曰老。禮也。若自稱曰老者。以卑高人。倨傲之辭也。故與門人小子言。或時以之自稱耳。其於朋友。雖已年長於彼。然猶自稱曰弟。亦禮也。先賢所行可見矣。純雖不才。未委質於足下。

爲す。其蓄ふ所蓄息して十八頭に至る。

㊀ 蓄殖、ふゆ

紫芝園漫筆に載す、一日余平子和と語天文に及ぶ。子和曰く、吾れ星を識らず。唯北斗と明星とを識るのみと。余曰く、北斗信に子之を識るか。其所謂明星とは、果して是れ太白か。是れ歲星を以て明星と爲す莫きかと。子和笑つて曰く、吾れ眞の明星を識らざるなりと。

㊀ 平野金華　㊁ 金星

金華書を春臺に與ふるに、毎に自ら老と稱す。春臺以て非禮と爲し、數〻書を貽りて之を責む。而るに金華改めず。春臺の書に云ふ、足下純に書牘を與ふる毎に、自ら愚老と稱す。老は尊稱なり。故に先生、長者を呼んで老と曰ふは、禮なり。若し自稱して老と曰ふは、齒を以て人に高ぶる倨傲の辭なり。故に門人小子と言ふ、或は時に之を以て自稱するのみ。其朋友に於ける、己が年彼より長ずと雖も、然も猶ほ自ら稱して弟と曰ふ、亦禮なり。先賢の行ふ所見る可し。純不才と雖も、未だ質を足下に委せず。且つ犬馬の年、亦足下の先に在り。足下純と言ふには、宜しく自ら稱して老といふべからず。純に於ける尚ほ可なり。若し他人と此の如くならば、必ず將に足下を禮を知らずと謂はんとす。純竊かに足下の爲に恥づと。又書に云ふ、抑〻足下純を以て無禮の言を出し、以て足下を欺くと爲すか。請ふ復之を言はん。禮に愆言老を稱せずと。鄭康成以て敬を廣むと爲す。夫れ老を稱せざるを以て敬を廣むと爲さば、則ち老を稱するを不敬と爲すこと知る可し。古者大夫七十にして事を致し、若し謝を得ざれば、則ち必ず之に几杖を賜ひ行役婦人を以てし、四方に適くに安車に

且犬馬之年。亦在二足下之先一。足下與レ純言。不レ宜二自稱曰レ老。於レ純尚可。若與二他人一如レ此。必將レ謂二足下不レ知レ禮。純竊爲二足下一恥也。又書云。抑足下以レ純爲レ固二無稽之言一。以欺中足下上乎。請復言レ之。禮恆言不レ稱レ老。鄭康成以爲レ廣レ敬。夫以不レ稱レ老爲レ廣レ敬。則稱レ老爲二不敬一可レ知矣。

乘り、自ら稱して老夫といふ。然らば則ち古時には大夫年未だ七十ならざれば、且つ猶ほ老と稱するを得ざりき。況や其下をや。今足下未だ始衰に及ばずして自ら稱して老といふ。豈に太だ早からざらんや。純見る所此の如し。是を以て前書有りて云へり。足下若し以て然らずと爲さば、則ち盍ぞ答書以て之を辨ぜざる。純不敏と雖も、將に拜して教を受けんとす。今足下然らず。特に謝すの一聲を致すのみ。則ち其の悅ばれざるや明かなり。純其罪を知らず。故に玆に復た請ふ。足下若し我れ仲尼の徒に非ず、何ぞ禮法を以てせんと曰はば、則ち純が知る所に非ざるなりと。

㊀ 春盛の名 ㊁ 年齢を以て人に高ぶる傲慢のことば ㊂ 足下に師事せず ㊃ 自己の年齢を謙遜していふ ㊄ よりどころの無き言 ㊅ 禮記に、平素の言に老といはずとあり ㊆ 敬の辨解を推し廣む ㊇ 辨解す ㊈ 許可を得ず ㊉ 臨息と杖 ㊊ 召使ふに婦人を以てす ㊋ 安座し得るやうに造れる車 ㊌ 五十論をいふ、禮記に五十にして始めて衰ふとあり ㊍ これ故前便の書にて申上げたり ㊎ 鄭玄の辨解し ㊏ 孔子のともがちにあらざれば禮法などはどうでもよろし

古者大夫七十而致レ事。若不レ得レ謝。則必賜二之几杖一。行役以二婦人一。適二四方一。乘二安車一。自稱曰二老夫一。然則古時大夫年未二七十一。且猶不レ得レ稱レ老。況其下乎。今足下未レ及二始衰一。而自稱曰レ老。不二太早一乎。純所レ見如レ此。是以有二前書一云。足下若以爲レ不レ然。則盍二答書以辨レ之。純雖二不敏一。將二拜而受レ教。今足下不レ然。特致二謝一聲一而已。則其不レ見レ悅也明矣。純不レ知二其罪一。故玆復請。足下若曰レ我非二仲尼之徒一。何二禮法一爲。則非二純所レ知也。

南郭送序曰。嘗相與登二東山一。瓦望數十里。邑屋臺榭相屬。而子和臨レ之。飄然心已蔑二視一世一。乃顧謂レ余曰。寥寥乎無聞哉。使三我頓生二自愛之心一。凡其大言自稱。率此類也。

南郭の送序に曰く、嘗て相與に東山に登る。瓦望數十里、邑屋臺榭相屬す。而して子和之に臨み、飄然として心已に一世を蔑視す。乃ち顧みて余に謂つて曰く、寥寥乎として聞ゆる無し。我をして頓に自愛の心を生ぜしむと。凡そ其大言自稱、率ね此類なり。

㊀ 見渡すこと數十里 ㊁ 民屋 ㊂ 臺は土を高く築きしもの、之に屋を作るを榭といふ、此處は大屋高樓を斥す ㊃ ひつそりとして世に聞ゆるものなし ㊄ 自己の偉大なるを自覺し傾かに自分の身ををしむ念生ず

金華文章尤

金華、文章は尤も其の自賞する所なり。徂徠稱す、古の狂簡吾れ裁する所無

其所二自賞一也。徂徠稱古狂簡吾無レ所レ裁。此徂徠寛大愛レ才。稱譽每過二其實一者也。宇士新痛斥二金華之文一。嘗著二彈金華稿一。附二名公四序評一。後以印行。

しと。此れ徂徠寛大にして才を愛し、稱譽毎に其實に過ぐる者なり。宇士新痛く金華の文を斥け、嘗て彈金華稿刪を著し、名公四序評の後に附し以て印行す。

㊀ 論語公冶長篇に曰く、吾黨の小子狂簡にして斐然として章を爲す、之を裁する所以を知らずと、意は、孔門の弟子志大にして事に疎略に、文采美しきあやをなせども之を裁制して中道に合せしむる所以を知らずとなり、吾れ裁する所無しとは謙めて謙辭するなり ㊁ はめ言葉が實際より過ぐ ㊂ 宇野士新

金華好レ酒痛飲。徂徠送二其之一三河序一曰。子和飲レ酒傲睨。深慕二伯倫一。青蓮之爲レ人。紫芝園漫筆曰。何充善飲。

金華酒を好み痛飲す。徂徠其三河に之くを送る序に曰く、子和酒を飲みて傲睨、深く伯倫・青蓮の人となりを慕ふと。紫芝園漫筆に曰く、何充善く飲む。劉惔常に云ふ、何次道が酒を飲むを見れば、人をして家釀を傾けんと欲せしむ。予、平子和に於て亦云はんと。南郭墓に記して曰く、酒を飲んで忼慨す。時に或は激烈泣下るに至ると。

劉惔常云。見二何次道飲レ酒。使下人欲レ傾二家釀一。予於二平子和一亦云。南郭記レ墓曰。飲レ酒忼慨。時或激烈至二泣下一。

㊀ 己を高く持して人をにらみ下すこと ㊁ 劉伯倫と李青蓮と、共に酒を愛して名高し ㊂ 家醸は家に醸れる酒なり、何次道が酒を飲む樣を見れば、人をして其家に醸れる酒を盡く飲ませ見んとの心を起さしむ

鳴鳳卿。一名信遍。字歸德。又字子陽。成島氏。成鳴倭讀同。故假修爲二鳴氏一。稱二道筑一。號二錦江一。又號二芙蓉道人一。陸奥人。仕二大府一。錦江本姓平井氏。生二于陸奥白河一。幼來二

鳴鳳卿

鳴鳳卿、一名信遍、字は歸德、又の字は子陽、成島氏、成と鳴は倭讀同じ、故に假に修して鳴氏と爲す。道筑と稱す。錦江と號し、又芙蓉道人とも號す。陸奥の人。大府に仕ふ。

錦江本姓は平井氏、陸奥の白河に生る。幼にして江戸に來り、十七歳にして成島道雪といふ者の嗣と爲る。性學を好み徂徠の說を悅ぶ。乃ち其徒と周旋し、一

江戸。十七歳爲二成島道雪者嗣。性好レ學。悅二徂徠之說。乃與二其徒一周旋。一時著稱。成島氏仕二大府一爲二坊主。錦江襲二其職。元文二年嘗二同朋之班。至二其爲レ人。則有二南郭贈序。足三以想二其概一曰。歸德朔北之產。爲レ人弘毅。志尙二節概。而又與二倜儻恢廓之士一相親善。雖下俠少年居二邑屠一者上。苟有二義氣若才能一者。必撫而愛レ之。用以令レ盡二其力。躬亦專以レ奉レ公立レ志。聞二人之善言。若見下有二奇策一者上。乃傾レ身引二薦之。唯恐レ後。實三以供二國家用一也。前後由レ此有下拔爲二良吏一效上。歸德恆言。世人好レ學。談玄雖レ有レ餘。何益二乎吾縣官之務一乎。尙矣哉。古聖人之治。今豈猶以爲二不レ可レ行レ之者一乎哉。誠有レ味二其言一也。故有二奇策良吏之才一者。聞レ之。時試焉施行。頗有レ效云。是歸德餘事也。歸德既以三自竭二勤力一遂矣。雖三亦盛世所二明試一。非二其忠誠奉レ公。何以至レ此乎。則士不レ可三以不二弘毅一者乎。

時著稱あり。成島氏大府に仕へて坊主たり。錦江其職を襲ぎ、元文二年同朋の班に昏む。其人と爲りに至つては、則ち南郭の贈序有り、以て其概を想ふに足る。曰く、歸德は朔北の產なり。人となり弘毅にして、志、節概を尙ぶ。而して又倜儻恢廓の士と相親善し、俠少年邑屠に居る者と雖も、苟も義氣若しくは才能有る者は、必ず撫して之を愛し、用ひて以て其力を盡さしむ。躬も亦專ら公に奉ずるを以て志を立つ。人の善言を聞き、若しくは奇策ある者を見ては、乃ち身を傾けて之を引薦し、唯後れんことを恐れ、以て國家の用に供せんことを冀ふ。前後此に由つて拔かれて良吏と爲り績を效すもの有り。歸德恆に言ふ、世人學を好む、談玄餘有りと雖も、何ぞ吾が縣官の務に益あらんや。尙いかな、古聖人の治、今豈に猶ほ以て之を行ふ可からざる者と爲さんやと。誠に其言に味有り。故に奇策良吏の才有る者之を聞き、時に試みて施行するに、頗る效有りと云ふ。是は歸德の餘事なり。歸德既に自ら勤力を竭す

を以て達す。亦盛世の明試する所なりと雖も、其忠誠公に奉ずるに非ずんば、何ぞ以て此に至らんや。則ち士は以て弘毅ならざる可からざる者かと。

(一) 徂徠門のともがらと往來す　(二) 白河の產なればいよ　(三) 心强く氣魂をたつとぶ　(四) 倜儻は常人と異なり　(五) 志大なること、恢廓は志のひろく大なること　(六) 邑は村里、屠は殺多なり、賤しき者を指す　(七) 撫育す　(八) 世間の學を好む輩高遠なる學問を說くに十分なれども屬吏たる務めに益無し　(九) 常人の治も之を實行し得ざるものとなさんや　(十) 餘談　(十一) 忠勤の力をつくすことゆきとどくるべし。論語泰伯篇にあり　(十二) 士たるものは強毅寬弘にして忍耐强くあ

錦江方二享保間一。侍二講禮記明律一。寵遇日厚。賜二十三經

錦江、享保間に方つて、禮記明律を侍講し、寵遇日に厚し。十三經二十一史を賜ひ、其餘恩之に準ずるの書甚だ多し。自ら芙蓉樓の記を作つて曰く、辛亥の冬、余一小樓を江上に架し、之に顏して芙蓉といひ、以て藏書の所と爲す。

二十一史。其餘恩準之書甚多。自作芙蓉樓記曰。辛亥之冬。余架一小樓於江上。題之曰芙蓉。以爲藏書之所。芙蓉名何取。取諸芙蓉當乎軒也。芙蓉相距實三百餘里矣。而坐挹三峰雪者。其高且秀也。樓何由起。蓋家有賜書千餘卷。恐辱帷房側溷之地。此樓之所起云云。

錦江又善倭歌。鄙自冷泉公。其集名曰寄郁詠捺寄。實三代波。蓋歷泉家三代點定。故以名云。屋木鬱鬱。獨木幹篤詠。

芙蓉の名何にか取れる。諸を芙蓉軒に當るに取るなり。芙蓉相距る實に三百餘里。而も坐して三峰の雪を挹るは、其の高く且つ秀でたればなり。樓何に由つてか起る。蓋し家に賜書千餘卷有り。帷房側溷の地に辱さんことを恐る。此れ樓の起る所なり云々と。

(一) 享保十六年　(二) 鬱々り、屋根をかゝぐるなり　(三) 富士山麓端に見ゆ　(四) 帷房はねや側溷は浴室のそばをいふ

錦江又倭歌を善くす。冷泉公より傳ふ。其集の名を、みよのなみといふ。三代波を言へるなり。蓋し泉家三代の點定を歷たり。故に以て名づくと云ふ。思へども人のわざには限あり、力を添へよ天地の神。(譯していふ、涯有り人の做業、何護神祇を仰ぐ) 直なるを護るときけば何事も、神に任する身こそ安けれ。(譯し

(一) 點譯していたゞく

ていふ、聞く、神正直に與すと、一任す此身の安きを) 此二首嘗て自ら書して信濃飯田の人某に與ふ。偶〻狐に憑かるゝ者有り。三年にして去らず。某乃ち斯の歌を誦す。狐即ち去る。此狐後又江戸本所石原商家の女に憑り、自ら太だ錦江の歌を畏るゝと陳ぶ。

(一) 點譯していたゞく

(譯曰。聞神與正直。一任此身安。此狐即去。此狐後又憑江戸本所石原商家之女。自陳畏錦江歌。)

(一) 嘆曰。有人憑。仰神祇。斯枯捺兒屋。儒木兒寫吉結跋。捺暱蔑篤木。苟密暱儒苟斯兒。密穀速鶏斯結列。

元文二年。金輪寺住持宥衛。奉命立碑于飛鳥邱。錦江代撰文并書。人往觀之

元文二年、金輪寺の住持宥衛、命を奉じて碑を飛鳥邱に立つ。錦江代つて撰文し并に書す。人往きて之を觀る者多し。後搨裝して帖と作し、傳へて奇賞を爲す。遂に轉じて櫻町天皇の乙覽を歷と云ふ。

(一) 石版ずりにし、綴釘して書帖となす　(二) 乙夜の覽に備ふ

者多。後揭裝作ノ帖。傳爲ニ奇賞ト。遂轉歷ニ櫻町天皇乙覽ニ云。

相模酒匂川。歲漲流爲ノ患。官吏治ノ之無ノ功。田中丘隅。字喜古。武藏川崎人也。錦江嘗一見卽察ニ其非常人ト。遂薦治ニ酒匂ト。果底績。乃堤ニ其東西ト。名曰ニ文命ト。立ノ碑以紀ノ事。錦江代ニ喜古ノ作ノ文。享保十四年。喜古沒。錦江又撰ニ其墓記ト。芙蓉樓集藏ニ于家ト。未ニ刊布ト。余嘗借ニ覽之ト。卷帙頗爲ニ浩瀚ト。虞交ニ時彥ト。

相模の酒匂川、歲〻漲流して患を爲す。官吏之を治むるも功無し。田中丘隅、字は喜古、武藏川崎の人なり。錦江嘗て一見卽ち其の常人に非ざるを察し、遂に薦めて酒匂を治めしむ。果して績を底す。乃其ち東西に堤し、名づけて文命といひ、碑を立て以て事を紀す。錦江、喜古に代りて文を作る。享保十四年、喜古沒す。錦江又其墓記を撰ぶ。

芙蓉樓集、家に藏して、未だ刊布せず。余嘗て之を借覽するに、卷帙頗る浩瀚と爲す。廣く時彥に交る。錦江在職五十餘年、一日も直を闕かずと、傳に見ゆ。而も餘暇の撰著此の如し。常人の及ばざる所なり。

● 手柄をあぐ　● 卷數非常に多し　● 時の名士　● 續貂

錦江在職五十餘年。一日不ノ闕ノ直。見ニ于傳ト。而餘暇撰著如ノ此。常人所ノ不ノ及也。

復ニ荻正卿ト書曰。老禿今茲七十有二歲。肉斤酒斗。步走如ノ飛。此爲ニ寶曆十年春事ト。嗚呼老健之不ノ足ノ賴也。是歲九月十九日沒。友人入ノ江南溟傳ト。墓在ニ江戶本所本法寺ト。

荻正卿に復する書に曰く、老禿今茲七十有二歲、肉は斤酒は斗にして、步走飛ぶが如しと。此れ寶曆十年春の事と爲す。嗚呼老健の賴むに足らざるや、是歲九月十九日沒す。友人入江南溟傳を作る。墓は江戶本所本法寺に在り。

● 荻生友山、河越の人　● 老人の自稱　● 老人の健康はあてにならず

岡白駒

岡白駒。字千里。小字太仲。號ニ龍洲ト。播磨人。仕ニ蓮池侯ト。龍洲少時。自ニ播磨ト徙ニ攝津ト。以醫爲ノ業。及ノ儒ト。晚年蓮池侯之徵ニ應ジ。文敎ヲ掌ル。其志經ヲ治ムルニ在リ。頗

岡白駒

岡白駒、字は千里、小字は太仲、龍洲と號す。播磨の人。蓮池侯に仕ふ。龍洲、少時播磨より攝津に徙り、醫を以て業と爲す。京に徙るに及び業を改めて儒と爲る。晚年蓮池侯の徵に應じ、文敎を掌る。其志經を治むるにあり。頗

徒レ京攻レ業爲レ儒。晩年應二聽池侯徵一。掌二文教一。其志在レ治レ經。頗善二文章一。又通二小說俗語一。名聲藉二甚一時一。蛻巖答書曰。足下關西古學。不レ待二讙圖一而興者。北二時賢一臭味自別。不レ問而知二其不二肯苟交一也。又赤松國鸞。與二劉文翼一書曰。平安之於二文學一。其由來尙矣。然以レ今觀レ之。不レ及二東都之盛一遠甚。乃足レ稱三名下果無二虛士一者。唯岡千里一人。其他彭彭憔憔。要亦春秋無二戰戰一。

龍洲嘗過二書商一。見二新鐫春臺增註孔子家語一。卽以爲我更作レ註以壓二倒之一。乃謂レ商曰。雖夫其學固淺。今見二此註一果多二舛誤一。吾嘗爲二注解一。將二爲レ世錄レ梓。已歸始乘レ筆作二補註一。

南郭所二校刻一蒙求。當時盛行二于世一。龍洲作二箋注一。乃欲三以壓二南郭一也。故其例言志詆二嘗南郭校本一曰。舊本多二誤謬一。近世刻本改正焉。而十機一二耳。又曰。蒙求南郭が校刻する所の蒙求、當時盛に世に行はる。龍洲箋注を作り、乃ち以て南郭を壓せんと欲す。故に其例言に志に南郭の校本を詆訾して曰く、舊本誤謬多し。近歲の刻本改正と稱して、十に機一二のみと。又曰く、蒙求の纂する所、正史の外に出づるもの有り。謝承の後漢書、王隱の晉書の如き、其事多く世說の劉義慶の註に見ゆ。新刻本、世說の註に據り、舊本の文を刪落す。殊に知らず、世說は風旨を片言隻語に取れり、故に引證する所亦其要を撮り、其事を簡省せるを。蒙求は則ち事實詳かなるを主と爲す。李良の所謂注下敷演

(一) 一藩の學事をつかさどる　(二) 名聲の世に聲なること　(三) 藩閥によらずとも特立して超るべきもの　(四) 監世の賢者に比しおもむき異なり　(五) 官額調門、江戸の人　(六) 彭彭憔憔何れも人の多きこと　(七) 春秋に義戰なきが如く、學者は多けれど、秀てたる者なし

(一) 新鐫　(二) 春臺の字　(三) 舛はなまり、誤はあやまり

所レ塞。有レ出二於正史之外一者。如二謝承後漢書。王隠晉書一。其事多見二世說劉義慶註一。新刻本據二世說註一。刪落甚本文。殊不レ知。世說取二風旨於片言隻語一。故所二引證一亦擬二其要一。簡二省其事一。蒙求則事實詳爲レ主。李良所レ調注下敷演者。即是已。豈可二刪落一哉。今仍二舊本一補レ之。以復二其舊一。又曰。新刻本考例云。文獻通考藝文部。載二蒙求三卷一。按二文獻通考一。無二藝文部一。經籍考小學部。載二蒙求一。是目未レ睹二其書一。而杜撰引證。其所レ考亦可レ知巳。

する者は、即ち是れのみ。豈に刪落す可けんや。今舊本に仍つて之を補ひ、以て其舊に復すと。又曰く、新刻本の考例に云ふ、文獻通考藝文の部に、蒙求三卷を載すと。文獻通考を按ずるに、藝文の部に無し。經籍考小學部に、蒙求を載せたり。是れ目未だ其書を睹ずして、杜撰引證するもの。其の考ふる所亦知る可きのみと。

㊀ あざけりそしる　㊁ 削り去る　㊂ もくむきを編めて短き語句にて表す　● 簡單に要をつまみ、繁文を省略に引きて證とせりとなり　㊃ 註を下して意をのべひろむ　● 編纂に要をつまみ、繁文を省略す

龍洲著書甚多。時經毛傳補義。治レ詩者以爲レ便。近時

龍洲著書甚だ多し。詩經毛傳補義は、詩を治むる者以て便と爲す。近時繩溫

繩溫頗稱レ之曰。就二龍洲著述中一。爲二尤善一。孟子解。子龍洲駁二孟子一之言上爲レ序。又其解中。掊擊不レ遺二餘力一。此解而衆レ刺者也。左傳荀子史記世說四部觸。多二謬妄臆說一。世乃謂爲二白駒失孤石栗一。

頗之を稱して曰く、龍洲の著述中に就いて尤も善しとすと。孟子解に、男子龍洲性褊急にして、其使令を受くる者、毎に將に堪へざらんとす。獨り門人加島宗叔といふ者、能く龍洲の意を得、龍洲亦能く己を折つて宗叔の言を用ふ。是を以て家人動れば宗叔に謂つて請ふ。

龍洲性褊急。受二其使令一者。毎將不レ堪。獨門人加島宗叔者。能得二龍洲意一。龍洲亦

龍。龍洲が孟子を駁するの言を錄して序と爲す。又其解中、掊擊餘力を遺さず。此れ解にして刺を衆ぬるものなり。左傳・荀子・史記・世說四部の觸は、謬妄臆說多し。世乃ち謂ひて白駒がしくじりと爲す。四の音失。觸此にくじりと譯す。俗に過失を謂ひてしくじりと爲す。

㊀ ありたけの力を以て攻擊す　㊁ 解釋にして且つそしりを衆ぬるもの　● 觸は「くじり」と訓ず、結を解くの義也、上りて解の義とす、四と失と音通、四の失解の義にて「しくじり」といふ也

龍洲性褊急。受二其使令一者。毎將不レ堪。獨門人加島宗叔者。能得二龍洲意一。龍洲亦

龍洲性褊急にして、其使令を受くる者、毎に將に堪へざらんとす。獨り門人加島宗叔といふ者、能く龍洲の意を得、龍洲亦能く己を折つて宗叔の言を用ふ。是を以て家人動れば宗叔に謂つて請ふ。

㊀ 氣短か、せつかち　㊁ 氣心をのみこむ　● 我意を曲げる

能折己用二宗叔曾一是以家人勸諭二宗叔一請焉。

吾祖過庭紀談曰。僧修二其道一。又爲二詩文若書畫諸技藝一。嘗之曰。禪寂澄心卽禪也。其禪之外以究二經論一爲餘。故禪餘之暇。禪與餘二者之暇也。京師一先生。序二釋大潮西溟餘稿一曰。禪之餘暇深嗜二斯文一。此以二禪餘之餘一爲二餘暇一也。可發二一噱一所謂一先生謂二龍洲一也。

吾が祖過庭紀談に曰く、僧其道を修め、又詩文若しくは書畫諸技藝を爲し、之を書して禪餘の暇某某の事を爲すといふ。是れ禪寂澄心卽ち禪なり。其禪の外經論を究むるを以て餘と爲す。故に禪餘の暇は、禪と餘と二者の暇なり。京師の一先生、釋大潮の西溟餘稿に序して曰く、禪の餘暇深く斯文を嗜むと。此れ禪餘の餘を以て餘暇と爲すなり。一噱を發す可しと。所謂一先生とは龍洲を謂ふなり。

(一) 禪定に入りて心を清淨にすること卽ち禪　(二) 詩文論部を研究するを餘と為す　(三) 一大笑

照朝文苑。載龍洲贈二廟皐君一詩二首。

照朝文苑に、龍洲が廟皐君の寄せらるゝに酬ふる詩二首を載す。此外絕えて其詩を覩ず。因つて此に表出す。

(一) 廟皐君は公達、號は龍洲、尾張の人　(二) 物悲しき風寂しげに吹く　(三) 皐君を斥す　(四) 君樂の絃妙なるをいふ　(五) 雅音久しく耳にせざりしが今すぐれたる音すみ上る　(六) 游子は謫州自ら、佳人は皐君　(七) 車輪轉じて進み行くにつれ別離の情に堪へず中心甚だ悲し　(八) 詩文を作り互の零落を憐みすぐれたる氣象を論ず

首。此外絕不視二其詩一。因表二出於此一。曰。驅車向二東路一。東路遠且長。悲風何蕭蕭。風吹二我衣裳一。攬轡正徘徊。拔衣登二高岡一。中原有二佳人一。意思不二凡常一。鳴琴白雪飛。吹笙青雲翔。大雅久不聞。逸響初飄揚。此會雖二再遇一。離別如一方。遊子懷二佳人一。何以慰二我傷一。悵悵長嘆息。車輪轉二中腸一。願得雙羽翼。高飛在二君傍一。其二。扁舟曾乘興。五煒照二秦城一。沈醉黃金盡。狂歌白雪清。文章落魂魄。詞賦豪英。論二海內誰長友。中原堪數名。

し、悲風何ぞ蕭蕭たる。颯として我が衣裳を吹く、轡を攬つて正に徘徊し、衣を披いて高岡に登る、中原佳人有り、意思凡常ならず、琴を鳴らせば白雪飛び、笙を吹けば青雲翔ける、大雅久しく聞えず、逸響初めて飄揚す、此會再遇し難し、離別す天の一方、遊子佳人を懷ふ、何を以てか我が傷を慰めん、悵悵として長嘆息すれば、車輪中腸を轉ず、願くは雙羽翼を得て、高く飛んで君の傍に在らん。其二、扁舟曾て興に乘じ、五煒秦城を照す、沈醉黃金盡き、狂歌白雪清し。文章落魂を憐み、詞賦豪英を論ず、海內誰か畏友、中原名を數ふるに堪へたり。

日本詩史。於二龍洲一頗貶駁之。然亦表二其豪爽一。不レ立二人籬下一。似レ爲二眞論一。乃記二於左一。千里初在二摂之西宮邑一。以レ醫爲レ業。一旦投二刀圭一而來二于京師一。專以レ儒行。是時京師已有レ悅二傳奇小說一者。千里倡二其說一。都下翕然傳レ之。其名躁二于一時一。千里於レ是不二復作レ詩。人或乞レ詩。則辭以二不能一。於レ是人人謂。千里文而不レ詩。其實非也。余嘗レ千里在二摂一時作。亦自當レ行。所二以云一者。有レ說也。千里急二於名一。又好レ勝レ人。是時東都有二服子遷一。赤石有二梁景雲一。南紀有二祇伯玉一。詩名海內。千里自量雖レ與二此數子一並馳。而世方勤二復古業一。左國史漢人人師レ之。託二其訓詁一。亦足二不朽一。故廢レ詩專意作二諸觸一。以網二羅其名一。既而恐レ後人以二文士一視レ己。則傳二註詩書論孟一。以崇二其名一。然已急二於名一。又好レ勝レ人。故其所二論說一引證不レ精。且以二臆見一勇二斷疑義一。或勦二襲他人說一。以爲二其著作一。雖取二快於一時一。雖レ免二識者指摘一。余爲二千里一深惜レ之云。

日本詩史の龍洲に於ける、頗る之を貶駁す。然れども亦其豪爽にして人の籬下に立たざるを表す。具論と爲すに似たり。乃ち左に記さん。千里初め摂の西宮の邑に在り。醫を以て業と爲す。一旦刀圭を投じて京師に來り、專ら儒を以て行ふ。是時京師已に傳奇小說を悅ぶ者有り。千里兼ねて其說を唱ふ。都下翕然之を傳へ、其名一時に躁し。千里是に於て復詩を作らず。人或は詩を乞へば、則ち辭するに不能を以てす。是に於て人人謂ふ、千里は文にして詩ならずと。其實は非なり。余千里が播・摂に在りし時の作を覽るに、亦自ら當に行ふべし。爾いふ所以の者は、說有るなり。千里名に急に、又人に勝つことを好む。是時東都に服子遷あり。赤石に梁景雲あり。南紀に祇伯玉あり。詩名海內に聞ゆ。千里自ら量るに此數子と並び馳せ難く、而も世方に復古の業を勤め、左・國・史・漢人人之を誦す。其訓詁に託するも、亦不朽にするに足れりと。故に詩を廢して專意諸觸を作り、以て其名を網羅す。既にして後人文士を以て己を觀んことを恐れ、則ち詩・書・論・孟を傳註して、以て其名を崇うす。然れども已に名に急に、又人に勝つことを好む。故に其論說する所、引證精しからず。且つ臆見を以て疑義を勇斷す。或は他人の說を勦襲して、以て其著作と爲し、快を一時に取ると雖も、識者の指摘を免れ難し。余千里の爲に深く之を惜むと云ふ。

(一) 人の垣の下に立たず、卽ち人の下風に立たず　(二) 也もなる論　(三) 醫業をやむ　(四) 唐宋以後の小說書籍　(五) 人〻其說を祖傳へて　(六) 理由あり　(七) 駿部靖朝　(八) 紀州に武藤靖海あり　(九) 復古學の註釋を作る　(十) ぬすみまねる　(十一) 文字文句の註解に微事しても絲名を遺すに足れり　(十二) 詩經・書經・論語・孟子　(十三) 物論りの批評をのがれがたし

餘承裕

餘承裕。字子綽。大内氏。小字忠太夫。號熊耳。陸奥人。仕唐津侯。熊耳生于陸奥三春熊耳村。自兒時嗜學。年十七。負笈來江戸。就秋子帥問業。乃介子帥謁徂徠。既而到京見東遷。遂赴長崎留講業。是時始見李滄溟集大喜。即自謄寫全部。日以讀誦焉。居十年。去復來江戸。教授于淺草。於是名聲藉甚。問寄者日踵其門。亡何召爲唐津侯文學。

餘承裕、字は子綽、大内氏なり。小字は忠太夫、熊耳と號す。陸奥の人。唐津侯に仕ふ。

熊耳は陸奥三春熊耳村に生れ、兒時より學を嗜む。年十七にして、笈を負うて江戸に來り、秋子帥に就いて業を問ふ。乃ち子帥を介して徂徠に謁す。既にして京に到つて東涯に見ゆ、遂に長崎に赴き、留つて講業す。是時始めて李滄溟集を見大に喜ぶ。即ち自ら全部を謄寫し、日に以て讀誦す。居ること十年、去つて復江戸に來り、淺草に教授す。是に於て名聲藉甚、奇を問ふ者日に其門に踵る。何も亡く召されて唐津侯の文學と爲る。

● 秋元以正、字は子帥、綱興と號す、興崎藩の文學　二 名聲遠に世に聞ゆ　三 儒官

熊耳於二俗事一。一切姓稱二大内一。至レ臨レ文則稱レ餘。自謂其先出レ自二百濟明帝太子餘琳一。故以レ餘爲二本姓一。有二竹雨齋者一。亦餘姓也。榊原玄輔記二其墓一曰。按馬韓國餘璋王太子琳聖。航レ海歸化。推古天皇。館二於周防多多良一。琳聖七世之孫曰二正恒一。賜二姓多多良一。號二大内一。其後子孫遂以大内爲レ氏。餘章王事。東涯乘燭談載レ之。其說云。日本紀所謂餘豐璋。唐書曰扶餘豐。此璋其祖武王名。扶餘百濟氏。今世以爲二百濟餘章王一者誤矣。不レ知稱二餘姓一者。未レ及レ攷レ之乎。將或修爲レ餘乎。

熊耳の俗事に於ける、一切姓大内を稱し、文に臨むに至り則ち餘を稱す。自ら言ふ其先百濟の明帝の太子餘琳より出づ。故に餘を以て本姓と爲すと。竹雨齋といふ者有り。亦餘姓なり。榊原玄輔其墓に記して曰く、按ずるに馬韓國餘璋王の太子琳聖、海に航して歸化す。推古天皇、周防の多多良に館せしむ。琳聖七世の孫を正恒と曰ひ、姓多多良を賜ひ大内と號す。其後子孫遂に大内を以て氏と爲すと。餘章王の事、東涯の乘燭談に之を載す。其說に云ふ、日本紀に所謂餘豐璋とは、唐書にて扶餘豐と曰ふ。此れ璋は其祖武王の名、扶餘は百濟の氏なり。今世以て百濟の餘章王と爲すは誤れりと。知らず餘姓を稱する者、未だ之を攷ふるに及ばざるか。將た或は修して餘と爲すか。

● 餘姓の由來をしらべ出すこと能はざるか、又扶餘を略して餘となすか

熊耳、徂徠の學を慕ひ、尤も工に古文辭を修む。時人以て當今の于鱗と爲す。南郭屢〻稱して曰く、熊耳の文章に於ける、滄溟に刻意す。故に殆ど之に肖たり。方今筆を秉つて李に擬する者甚だ衆し。而も皆及ぶ能はざるなりと。

㊀ 李于鱗、姓は李、名は攀龍、明代の古文辭學者なり、王世貞と相對して世に李王の古文辭といふ、所詩選は其編に係る　㊁ 李于鱗の號、其の文に倣せんことを苦心す

熊耳於二南郭一。雖レ不レ取レ贄。每承二其謦欬一。文章尤得二南郭刪潤一而長進。故其集中於二南郭一必推二尊之一。以二先生一稱レ之。

熊耳の南郭に於ける、贄を取らずと雖も、毎に其謦欬を承く。文章尤も南郭の刪潤を得て長進す。故に其集中南郭に於ては必ず之を推尊し、先生を以て之を稱す。

㊀ 入門せず　㊁ をしへけびます　㊂ 添削をうけて進歩す

薩原明遠。字深藏。中村氏。號二蘭林一。又號二益進齋一。江戸人。仕二大府一。蘭林初稱二玄春一。承二父玄悅一。爲二醫官一。乃能修二其業一。所レ著有二醫方綱紀三卷一。博學莫レ所レ不レ窺。延享四年正月十九日。改レ醫擢二儒員一。時年五十一。蓋國初以降。以醫而轉レ職。蘭林一

藤原明遠

藤原明遠、字は深藏、中村氏、蘭林と號し、又益進齋とも號す。江戸の人。大府に仕ふ。

蘭林初め玄春と稱す。父玄悅を承けて醫官と爲り、乃ち能く其業を修む。著す所醫方綱紀三卷有り。博學窺はざる所なし。延享四年正月十九日、醫を改め儒員に擢でらる。時に年五十一なり。蓋し國初以降、醫よりして職を轉ずるは、蘭林一人と云ふ。鳴歸德の芙蓉樓集に、蘭林が儒官と爲るを賀する序あり。曰く、滕先生、疇官方技、死を起たしめ骨に肉し、聲東方に振ふ。最も經術文學を喜び、一旦匙を釋てて歎じて曰く、士君子世を濟ふ、奚ぞ翹に艸根樹皮のみならんや。嗚呼軒岐邈たり。扁倉古し。肘後の載籍、叔世滋〻博く、汎乎として要寡し。若し乃ち天人を合同し、及び物を知るの明、安に適として

人云。鳴鶴德芙蓉樓集。有下賀三蘭林爲二儒官一序。曰。蹙先生。鳴官方技。起死肉骨。聲振二東方。最喜二經術文學一。一旦釋レ匙而歎曰。士君子濟レ世。奚翅艸根樹皮哉。嗚呼軒岐遠矣。扁倉古矣。肘後戴籍。叔世滋博。汎乎寡レ要。若乃合二同天人一。及知レ物之明。安適施二今之世一乎。生命亦大。一失折レ肱。則駟亦不レ及。已矣。已矣。於レ是乎。不三復從二事醫藥一。電滬網二藥籠一。乃上言請レ爲二儒官一。不レ報。居數年。入目二侍醫一行二經筵事一。雖二則特恩一。非二其志一也。丁卯春正月。定降二爵侍講一。束髮衣冠。從二事禮一也。於レ是乎。先生之喜可レ知也。

今の世に施さんや。生命亦大なり。一たび失して肱を折らば、則ち駟も亦及ばず。已んぬ。已んぬと。是に於てか、復た醫藥に從事せず。電滬藥籠に網す。乃ち上言して儒官たらんと請ふ。報ぜられず。居ること數年、入つて侍醫を目て經筵の事を行ふ。則ち特恩なりと雖も、其志に非ざるなり。丁卯の春正月、定めて侍講に降爵し、束髮衣冠、禮に從事す。是に於てか、先生の善知る可きなり。

(一) 藤原の略　(二) 前官は醫者にて死者をたゝしめ骨に肉をつくるほど巧み　(三) 經學と文章　(四) 草の根々編の皮、藥品のこと　(五) 軒は軒轅氏即ち黄帝の姓、岐は岐伯、共に支那醫學の祖、遍たりは遍き說　(六) 扁鵲と倉公、共に支那古代の名醫　(七) 唐書藝文志、葛洪に肘後救卒法六卷ありと見ゆ　(八) 後代なり、即ち後代に至るに隨つて醫書益々多く、卷々瓶囊のみ博くなりて要を得ること少なし　(九) 一度失敗して肱を折りしならばとりかへしつかず。三度肱を折らざれば名醫となれずと云ふ古語より出づ　(十) 蜘蛛が藥ばこに網をはるとなり、醫を止めたるをいふ　(十一) 閑暇けちれず

蘭林書を讀み力を極めて撮抄す。其の著す所多くは抄を積んで編を爲す者なり。然るに皆統紀體裁あり。學山錄の若き、尤も常儒の及ぶ所に非ざるなり。識者稱して唐土の人に愧ぢずと爲す。

(一) 要領をつまんで抜書す　(二) 統一して記錄し體裁整ふ

蘭林、鳩巢の門に出でて、博學精密、世以て寒水青藍と爲す。蘭林宋學を奉ずる者なりと雖も、鳩巢の宋說に於て、毫も疑を容れざるが如きに非ず。寛延元年、韓使來聘す。蘭林之と筆語し、朱子を議すること甚だ多し。彼れ足下の論は、乃ち伊藤氏の爲にこれ誤たるゝ毋からんや。伊藤氏の貴邦に於ける、豪傑の士と謂ふ可し。而るに聖學の工夫に於ては大に謬戾有り。足下果して之を知るかと曰ふに至る。其の朱子を議する略に曰く、朱子の諸經傳註、亦最も精密を窮め、復た餘蘊なしと雖も、然れども或は言古訓に違ひ、義古意を失するもの、

(一) 蘭林書を讀み力撮抄。其所レ著多積レ抄而爲レ編者也。然皆統紀有二體裁一。若二學山錄一。尤非二常儒所一及也。識者稱爲レ不レ愧二唐土人一。

(二) 蘭林出二於鳩巢門一。而博學精密。世以爲二寒水青藍一。蘭林雖下奉二宋學一者上。非如下鳩巢之於二宋說一。毫不容レ疑。寛延元年。韓使來聘。蘭林與レ之筆語。議二朱子一

者甚多。至彼曰足下之論。毋乃爲伊藤氏之所誤乎。伊藤氏於貴邦可謂豪傑之士。而於聖學工夫。大有謬戾。足下果知之乎。其譏朱子略曰。朱子諸經傳註。亦雖最窮精密。無復餘蘊。然或冒進古調。義失古意者。未必爲無。大抵於性命道德之間。失諸高遠者有

未だ必ずしも無しと爲さず。大抵性命道德の間に於て、諸を高遠に失する者有り。是を以て僕、朱子の解に於て、亦間然する無き能はずと。又曰く、僕竊かに謂ふ、凡そ古書を讀むには、須らく其時の言辭に通ずべし。蓋し三代の書には、三代の言辭氣象有り。漢・魏の書には、漢・魏の言辭氣象有り。苟も其の然る所を知らざれば、則ち說得て當ると雖も、或は其言意に畔く者有り。今姑く歷史を以て之を言はん。兩漢史に言ふ所、六朝史と同じからず。六朝史の言ふ所、亦唐宋史と同じからず。蓋し言辭の道、時と升降す。其の一ならざる有るも亦自然の勢なり。但宋儒每每近言を以て古言を解し、今意を以て古意を解す。是を以て古意に非らざる者或は之れ有り。今明德の一事を以て之を言はんに、朱子の大學に於ける、心の虛靈不昧を以て之を說く。其意精妙ならざるに非ず。然りと雖も、諸を古書に證するに、此の例無きに似たり。夫れ明德の一語は、尙書・易・詩・左傳等に、每每之を言ふ。而して皆以爲へらく、聖人の道

矣。是以僕於朱子之解。亦不能無間然。又曰。僕竊謂凡讀古書。須通其時之言辭。豐三代之言辭。豐三代之言辭氣象。漢魏之書。有漢魏之言辭氣象。苟不知其所然。則雖說得當。或畔其言意者有矣。今姑以歷史言之。兩漢史所言。與六朝史不同。六朝史所言。亦與唐宋史不同。豐言辭之道。與時升降。其有不一。亦自然之勢也。但宋儒每每以近言解古言。以今意解古意。是以非古意者。或有之矣。今以明德一事言之。朱子於大學。以心之虛靈不昧說之。其意非不精妙。雖然。讀古書。似無此例。夫明德一語。尙書易詩左傳等。每每言之。而皆以爲。聖人之道德光輝發越以施乎物者。而未嘗以心之妙用說之也。豈大學一書。惟德、光輝發越以て物に施す者にして、未だ嘗て心の妙用を以て之を說かざるなり。豈に大學の一書のみ、惟別に此意有らんやと。又更に宋儒の體を說くの論、朱註を讀む論、中庸論を作し、以て韓使を詰問す。其他學山錄・講習餘筆等、往往宋儒の信ず可からざる者有るを載す。

一 是傳く是疏同樣　二 本は水より出で水より勝く、青は藍より出で藍より青しの約にて師よりすぐれたる意　三 仁齋　四 師説の研究に於ては大にまちがひあり　五 經書の註解　六 說き殘せる所無し　七 言が古代のよみにちがひ、意義が古代の意味を失ふ　八 人の天賦の性及び道德を說く點に於て高尙深遠に過ぐ　九 まゝ非難すべきところあり　一〇 時代に遷れて變化す　一一 特有の言語と氣風と　一二 前漢書と後漢書　一三 魏・晉・齊・梁・陳の六朝の史書　一四 心の德たるや形無けれど其の作用靈妙にして明かなり　一五 朱子の說の如く、明德を以て心の妙用として說くもの一もなし

別有二此意一乎。又更作宋儒說體論。讀二朱註一論。中庸論。以詰二問韓使一。其他學山錄講習餘筆等。往往戟宋儒有不可信者。

蘭林一意耽學。胷中更無二世務一。對二不讀書者一。則惟敍二寒暄一耳。絕無二他話一。以故世謂爲二癡呆一。

蘭林一意學に耽り、胷中更に世務無し。書を讀まざる者に對すれば、則ち惟寒暄を敍ぶるのみ。絕えて他話なし。故を以て世に謂つて癡呆と爲す。

● 時餘の談話 ● ばか

蘭林垂終遺命。寄納其所藏書四十九部于足利學部。其意以爲欲傳二之永世一以供中後人之覽。其目如左。漢魏叢書。玉海。杜氏通典。明文翼運。吳臨川集。名山藏詳節。唐文粹。皇朝類苑。自警編。餘冬序錄。呂氏春秋。後山叢談。東國史略。石林燕語。周禮訓僞。讀書管見。經籍會通。六經奧論。千百年眼。江關筆談。南島志。蝦夷志。東雅。唐律疏議。古今餘材抄。湖亭涉筆。異稱日本傳。周易翼傳。易翼傳。周易集解。皇王大紀。事纂。羅豫章集。

蘭林終に垂として遺命して、其の藏する所の書四十九部を足利學校に寄納す。其意之を永世に傳へて以て後人の覽に供せんと欲す。其目左の如し。漢魏叢書。玉海。杜氏通典。明文翼運。吳臨川集。名山藏詳節。唐文粹。皇朝類苑。自警編。餘冬序錄。呂氏春秋。後山叢談。東國史略。石林燕語。周禮訓僞。讀書管見。經籍會通。六經奧論。千百年眼。江關筆談。南島志。蝦夷志。東雅。唐律疏議。古今餘材抄。湖亭涉筆。異稱日本傳。周易翼傳。易翼傳。周易集解。皇王大紀。事纂。羅豫章集。學齋佔畢。鼠璞。大極圖述。唐國史補。大學衍義。問奇類林。雜錄。寓意錄。軍籍綜言。老學菴筆記。孫可之文錄。李習之文集。曲洧舊聞。創業起居註。書疑。考工記解。禹貢論。

學齋佔畢。鼠璞。大極圖述。唐國史補。大學衍義。問奇類林。雜錄。寓意錄。軍籍綜言。老學菴筆記。孫可之文錄。李習之文集。曲洧舊聞。創業起居註。書疑。考工記解。禹貢論。

蘭林墓。在二谷中玉林寺一。小石碑。正面銘曰。蘭林藤原明遠之墓。左側曰。寶曆十一年辛巳。九月三日。其

蘭林の墓は、谷中玉林寺に在り。小石碑、正面に銘題して曰く、蘭林藤原明遠之墓。左側に曰く、寶曆十一年辛巳九月三日と。其の勒する所僅かに此れのみ。此れ蓋し蘭林の遺意なり。蘭林、墓石は惟其姓名生卒を記すを以て足れりと爲し、言行を誌すが如きは、謂つて浮華の事と爲す。其說學山錄及び講習餘筆に見ゆ。

所レ勒僅此而已。此蓋蘭林之遺意也。蘭林以三墓石惟記二其姓名生卒一爲レ足。如レ誌二言行一。謂爲二浮華事一。其說見二學山錄及講習餘筆一。

字鼎。字士新。小字三平。號二明霞軒一。本姓宇野。親爲二宇氏一。平安人。士新父安治。屬二角倉與市一司二運漕一。士新自レ少脫二脫樂利一。潛心載籍。始受二章句于向井滄洲一。名有。字子登。後無レ所二師承一。與二弟士朗一共發憤自奮。遂特二海內文柄一。其所レ著論語考。爲二最大有レ力。士新固不下與二時輩一爲レ伍。其學將二精究以聽一世。於レ是杜レ門掃レ軌。切磋甚勤。釋大典書燈記曰。太田見良。嘗謂二宇先生一曰。比歲儉米貴。吾與二君等一所二尤病一也。先生曰。吁一掬之米。可二以并レ日而不レ餓。抑何所レ病。但米貴物從レ之。乃使二油燈記一曰。太田見良、嘗て宇先生に謂つて曰く、比ろ歲儉に米貴し。吾れ君等と尤も病ふる所なり。先生曰く、吁一掬の米、以て日を并せて餓ゑざる可し。抑〻何の病ふる所ぞ。但米貴ければ物之に從ふ。乃ち油をして貴からしむ。是れ吾が獨り病ふる所なりと。先生の志、是に於てか知る可きのみと。

宇鼎

宇鼎、字は士新、小字は三平、明霞軒と號す。本姓は宇野、裁して辛氏と爲す。平安の人。

士新の父は安治、角倉與市に屬して運漕を司る。士新少より桑利を屣脫し、意を載籍に潛む。始め章句を向井滄洲（名は三省字は子登）に受け、後、師承する所無し。弟士朗と共に發憤自ら奮ひ、遂に海內の文柄を持す。其の著す所、論語考、最も大に力有りと爲す。士新固より時輩と伍を爲さず。其學將に精究以て世を聽しうせんとす。是に於て門を杜ぢ軌を掃ひ、切磋甚だ勤む。釋大典の書

(一) 離字をはりつける　(二) 生れた日と死んだ日

士新刻厲書を讀み、足戸闕を躐えざること十有餘年。時人之が爲に語して曰く、都下見ざる者三有り。宇野三平が市に至るを見ず。谷左中が文を作るを見ず。香川太沖が病を治せしを見ず。

士新刻厲讀レ書。足不レ踰二戸閾一。十有餘年。時人爲レ之語曰。都下不レ見

(一) 刻苦勉勵　(二) しきみ

者有レ三焉。不レ見二宇野三平至レ市。不レ見二香川太沖治レ病。不レ見二谷左中作レ文。

士新奉二李王一善二古文辭一。然與二徂徠南郭一齟所レ作殊二其趣一。初得二大潮禪師指授一。其復二出文瑟一書曰。僕始學レ文。嘗就二潮公一而正焉。於レ今思レ之。其刪潤皆當。非レ若二世儒不レ辨レ體。不レ論レ格。點レ金作レ鐵。變レ夏爲レ夷者一。大潮亦嘗稱二士新文一爲レ得二元美髓一。夫大

士新、李・王を奉じて古文辭を善くす。然れども徂徠・南郭が輩の作す所と其趣を殊にす。初め大潮禪師の指授を得たり。其の田文瑟に復する書に曰く、僕始めて文を學ぶや、嘗て潮公に就いて正す。今に於て之を思ふに、其刪潤皆當れり。世儒が體を辨ぜず、格を論ぜず、金を點し鐵と作し、夏を變じて夷と爲す者の若きに非ずと。大潮亦嘗て士新の文を稱して元美の髓を得たりと爲す。夫れ大潮の文既に海内に名あり。而して近時又大典、能文を以て一時に聞ゆ。此二釋は、勿論(九)鞳林に泰斗たり。之を操觚者流に求むるも、亦得易からざるなり。而して一は則ち士新に傳へ、一は則ち士新に受く。

㊀ 李攀龍と王世貞、共に明代の古文辭學者 ㊁ 指示教授を受く ㊂ 田中琦字は文瑩、號は大觀、平安の人、十新の門 ㊃ 盛制皆當を得 ㊄ 文の體裁をわきまへず、法式を論ぜず ㊅ 黄金の如き佳文に批點して鐵の如き下品のものとなし、中國の風を學じて野蠻の風とかす ㊆ 王世貞の骨髓を得たり ㊇ 大典・大潮の二師若は無論僧侶なかまての立派な人物なり ㊈ 僧侶なかま ㊉ 文學者なかま

潮文既名二海内一。而近時又大典。以二能文一聞二一時一。此二釋。勿論泰二斗於鞳林一。求二之操觚者流一。亦不レ易レ得也。而一則傳二士新一。一則受二士新一。

姓氏解二卷、古今を綜理し、倭漢を考覈し、姓氏の一事に於ては殆ど餘蘊無し。而して其卷首作者の名姓を題署せざるは、此れ士新の深意にして、蓋し古國字を以て書する者に倣へるなり。(說、吾が國の過庭紀談に群かなり) 然るに近時京師の人、松本愼といふ者、近江宇鼎士新著の七字を以て、舊板の卷首に撰入し、且つ之が序を作つて、其の複姓を修して單姓と爲すは是にあらずとの論を附す。大に士新の意を失へり。

㊀ 古より今までをすべをさめ日本と支那とを比較研究す ㊁ 加ひ入る ㊂ 字野を略して字と云ふは不當

姓氏解二卷。綜二理古今一。考二覈倭漢一。於二姓氏一事一殆無二餘蘊一焉。而其卷首不レ題二署作者名姓一者。此士新深意。蓋倣レ古以二國字一書者上也。(說群于語組語屬紀野。) 然近時京師人。松本愼者。以二近江宇鼎士新著七字一。撰二入舊板卷首一。且作二之序一。附了其修二複姓一爲二單姓一。非レ是論。大失二士新意一。

人の後と爲りて其姓を承くること、士新以て非と爲す。一日江村某至る。此人爲二人後一。承二其

姓。士新以爲非。一日江村某至。此人冒二他姓一。問曰。大人先生之實父乎不。士新毅然曰。吾家之父。不三始有二虛實一。

他姓を冒す。問うて曰く、大人は先生の實父なりや不やと。士新毅然として曰く、吾が家の父、始より虛實あらずと。

(一) 吾が家の父は始めより假の父實の父の區別なし。卽ち養子となりて其の姓を受けざればかくいふ

士新撰二上杉謙信傳一。雖二偶然一。其立志創業。士新有下髮二鬚之一者上。夫謙信生二戰國之際一。自レ少不レ御レ內。天資驍勇。將下兵勢大奮。以懷二保平一以降之亂一。更立中業。而年四十九。功不レ成

士新上杉謙信の傳を撰ぶ。偶然なりと雖も、其立志創業、士新之に髮鬚たる者有り。夫れ謙信は戰國の際に生れ、少より內を御せず。天資驍勇にして、兵勢大に奮ひ、將に以て保平以降の亂を撥め、更に業を立てんとす。而るに年四十九、功成らずして卒す。然れども世皆其力必ずしも信長・秀吉に減ぜざるを知る。士新(一)健(二)の世に生れ、未だ嘗て妻妾を置かず。志厚氣邁、強學人に越え、將に以て漢・魏以來の諸說を統べ、別に一家を立てんとす。而るに年四十八、志(九)(十)酬いずして沒す。然れども世皆其學必ずしも仁齋・徂徠に讓らざるを知る。

(一) 目的を立て、事業を創始す　(二) 似寄る　(三) 妻妾を近づけず　(四) うまれつきつよく勇し　(五) 保元・平治以來の騷亂を平げて割據の勢を立てんとす　(六) 弓矢を入る、袋、弓矢を袋にするより、轉じて太平の世の稱　(七) 志厚く氣象すぐる　(八) 學をつとむること他にまさる　(九) 一派の見を立つ　(十) 目的を果さずして死す

卒。然世皆知二其力不三必減二信長秀吉一。士新生二鼎鼎之世一。未三嘗置二妻妾一。志厚氣邁。強學越レ人。將下以統二漢魏以來諸說一。別立中一家上。而年四十八。志不レ酬沒。然世皆知二其學不三必讓二仁齋徂徠一。

士新於二徂徠一。著二論語考一。痛糾二其謬誤一。或至レ謂二如レ是果孔子之罪人也。先王之罪人也。天下之罪人也。他作レ辨擊二春秋說一。作二名公四序評一。彈二文章一。春臺斥非曰。三平自負二其才

士新の徂徠に於ける、論語考を著して痛く其謬誤を糾し、或は是の如きは果して孔子の罪人、先王の罪人、天下の罪人なりと謂ふに至る。他に辨を作つて春秋の說を擊ち、名公四序評を作つて文章を彈ず。春臺の斥非に曰く、三平自ら其才氣を負みて、別に意見を立て、以て徂徠に勝らんことを求む。其の果して能く徂徠に勝るやは則ち知らざるなり。余恐る三平の徂徠に勝らんとするは、適に其の自ら卑下する所以なりと。士新の徂徠を駁すること此の如し。然れども其實徂徠に心醉す。是を以て其の沒するや、祭文哭詩を作つて之を褒揚す。杉以成既に以て過稱と爲す。士新書を與へて曰く、僕物子を稱する、未だ敢へて

氣。而別立二意見一。以求レ勝二徂徠一。其果能勝二徂徠一。則不レ知也。余恐三平之勝二徂徠一。適其所二以自卑下一也。士新駁二徂徠一者如レ此。然其實心醉徂徠。是以其沒也。作二祭文哭詩一褒揚之。杉以成既以爲二過稱一。士新與レ書曰。僕稱二物子一。未三敢過二其實一。庸何病。物子所二自負一經術也。其文其實に過ぎず。庸何ぞ病へん。物子の自負する所は經術なり。其文固より未だ遺南に及ばず。余亦之に過ぎたりと謂はず。然れども經術文章相兼ぬること、彼も亦未だ及ばざる所有り。則ち不佞の稱する所何の過ぎたることか之れ有らんと。又芥彦章に與ふる書に曰く、夫れ物夫子は實に東方開闢の一人にして、其の華夏に在りても亦其比を難うす。而して陪臣を以て散職に居る、何ぞ華夏を論ぜん。即ち國中に在つては、兒童に君實たらず、走卒に司馬たらず。又未だ學者に泰斗たらず。晩に乃ち稍仰がる。然れども矮人場を觀る、未だ實に知る者有らず。是れ夫の富士の僻せると與に、其の不幸と爲す。豈に余が病の比ならんや。然りと雖も、是れ何ぞ論ずるに足らん。是れ何ぞ論ずるに足らん。其の發憤を爲す所、乃ち摛藻天庭に掞き、傳施する所測る可からざるなりと。又玄海上人に答ふる書に曰く、謂ふ洛の諸山嶮・宕最も秀づ。僕の兄弟之に比す。它人は則ち諸山たりと。又謂ふ、僕の兄弟富士を稱すと雖も、唯嶮を固未レ及二濟南一。余亦不レ謂レ過レ之。然經術文章相兼。彼亦有レ所レ未レ及。則不佞所レ稱何過之有。又與二芥彦章一書曰。夫物夫子者實東方開闢一人。其在二華夏一亦雖二其比一。而以二陪臣一居二散職一。何論二華夏一。即在二國中一。不レ君二實於兒童一。不レ司二馬於走卒一。又未レ泰二斗於學者一。晩乃稍見レ仰。然矮人觀レ場。未レ有二實知者一。是與二夫富士之僻一。其爲二不幸一。豈余病之比哉。雖レ然。是何足レ論。其所レ爲二發憤一。乃摛藻掞二天庭一。所二傳施一不レ可レ測也。又答二玄海上人一書曰。謂洛諸山嶮宕最秀。僕兄弟比レ之。它人則爲二諸山一。又謂僕兄弟雖

庶幾す可し。而も未だ絶頂に到らず。僕の志す所固より近小にあらず。而して今の得る所、諸を登山に譬ふれば、尚ほ其足に在り。曾て未だ半に到らず。何ぞ絶頂を論ぜん。而して嶮又願ふ所に非ざるなり。富士の若き則ち物先生に非ざれば能く當ることなし。吾輩物先生の故を以て常に之を稱するのみ。固より敢へて期せざる所にして、亦願ふ所に非ざるなりと。

(一) ゐやまり　(二) 士新が徂徠に勝ちんとするは是れ自ら徂徠に及ばざるをあらはす譬にて却て身を卑くするに當る　(三) むかふ打込む　(四) 祭文及び死者を哭する詩を作つてはめあげる　(五) 自慢　(六) 李于鱗　(七) 經學と文章と　(八) 自分　(九) 芥川煥、字は丹丘、士新門　(一〇) 中華、支那　(一一) 比ぶるもの少し　(一二) 常職錢き官　(一三) 君實は司馬光の稱、即も兒童に知らるゝこと司馬光の如くならず、又召使はしり小僧にまで知らるること般の如くならず　(一四) 學者の頭目とならず　(一五) 一寸法師が芝居を見る如く實際のことを知る者なし　(一六) 死後天に上り飼鶴天帝の庭に舞ふ　(一七) 嶮は嶽山と愛宕山と　(一八) 富士を標準とすれども嶽山ぐらゐに遥し得べし　(一九) 富士の頂を極むることはおもひよらず

稱二富士一。唯審可二庶幾一。而未レ到二絶頂一。僕之所レ志固不二近小一。而今之所レ得。辟二諸登山一。尚在二其足一。曾未レ到レ半。何論二絶頂一。而審又非レ所レ願也。若二富士一則非二物先生一莫二能當一。吾輩以二物先生故一常稱レ之爾。固所レ不二敢期一。而亦非レ所レ願也。

南郭答二了願師一書曰。二子固難レ得之才也。熊耳孟鉉序曰。古學父子。應二國家右文之化一。繼レ踵而起。宇氏兄弟。乘二大業復古之運一。雁行而漸。風二靡一時一。以雪二戰國五百年斯文之抑鬱一。則亦可レ謂二一振一也。豈人之好惡各異。是非互議。要可レ待二公論一耳。原田東岳觀二士新一者甚卑矣。東岳筆嘯曰。徂徠東涯二先生西也。而徂徠在レ堂。東涯在レ室。南郭春臺二子西也。而南郭在レ戶。春臺在レ門。蘭嶼周南二子匹也。而僧在二廊廡下一。金華士新二子匹也。而僧窺二門牆一。未レ能

南郭、了願師に答ふる書に曰く、二子は固に得難きの才なりと。熊耳が小野孟鉉を送る序に曰く、古學父子、國家右文の化に應じ、踵を繼いで起る。宇氏兄弟、大業復古の運に乘じ、雁行して漸み、一時を風靡し、以て戰國五百年斯文の抑鬱を雪ぐ。則ち亦一振と謂ふ可きなりと。蓋し人の好惡各〻異なり、是非互に議す。要は公論を待つ可きのみ。原田東岳士新を視ること甚だ卑し。東岳筆嘯に曰く、徂徠・東涯の二先生は匹なり。而して徂徠堂に在り、東涯室に在り。南郭・春臺の二子は匹なり。而して南郭戶にあり、春臺門にあり。蘭嶼・周南の二子は匹なり。而して僧に廊廡の下に在り。金華・士新の二子は匹なり。而して僧に門牆を窺つて未だ入ること能はず。宇氏は最も等の劣れる者なりと。筆嘯に又曰く、士新妄に其酉洞博覽を誇つて、自ら其執拗據援を知らず。族幟を建てて勝を徂徠先生に取らんと欲し、多く羣書を引きて論語考を著す。然れども其說泛然として適從する所無し。華人、經に於て傳注を爲す者古今甚だ多し。而るに此の如きは未だ嘗て之れ有らざるなり。其文大氏窘澀舒暢を缺く。故に其の綴緝結構する所の者、所謂樗櫪殺接是れ古文辭を謬り擬するなり。豈に哀しからずや。明霞遺稿の如き、識者之を駁す。則ち徂徠先生に及ばざるもの遠きこと甚だしと。

一 宇は宇なり、宇氏兄弟なり　二 大内熊耳　三 伊藤仁齋と其子東涯をいふ、古學派を挙げればなり　四 文運の變なる世　五 ならび行きて少し退く　六 一時代をもしなびける　七 文風の靡勢を挽回す　八 すき嫌ひ　九 著述　一〇 西廡するの意　一一 豈は表座數、室は奥座數。卽ち室に在るは一歩長ぜるなり　一二 戶口　一三 廊下のきした　一四 平野金華　一五 垣根　一六 執拗はねぢけたるなり、據援はみだれはづれたるなり　一七 ひろくしてしまりなし　一八 うるはひありてなだらか　一九 綴りあつめ組立てる　二〇 無用の文字連續す

入。宇氏最等劣者也。筆晴又曰。士新妄誇二其西洞博覽一。不三自知二其執拗撩戾一。欲下建二旗幟一取中勝於徂徠先生一。多引二羣書一著二論語考一。然其說泛然無所二適從一矣。華人於經爲二傳注一者古今甚多。而如レ此者未二嘗有一之也。其文大氏缺二霑潤舒暢一。故其所二綴緝結構一者。所謂樗櫟殺接是謬二擬古文辭一也。豈不レ哀哉。如二明霞遺稿一識者駁レ之。則不レ及二徂徠先生一者遠甚。

明霞遺稿載。澤村琴所墓銘敍。野子賤以爲二文辭不レ佳。改撰附二琴所刪稿一。書二其後一云。先生之歿也。門人前島當完等。狀二其遺事行一。以乞下銘二墓碑一於平安宇先生上。後七年。宇先生病且レ沒。其文乃成。遺二命

明霞遺稿に載す、澤村琴所が墓銘の敍、野子賤しんで以て文辭佳ならずと爲し、改撰して琴所刪稿に附す。其後に書して云ふ、先生の歿するや、門人前島當完等、其遺せる事行を狀し、以て墓碑に銘せんとを平安の宇先生に乞ふ。後七年、宇先生病んで且に沒せんとし、其文乃ち成る。其門人片徽猷に遺命し、淨寫以て諸を當完の所に致す、と。余受けて之を讀むに、銘辭流暢誦す可し。其敍文に至つては則ち蕪甚だし。蓋し其臨終に門人に口授し、門人受けて之を經紀するに、盡く其意の如くなる能はざるを以ての故に、此鹵莽を致すのみ。今玆將に稿刪を木せんとするや、同志の士之を附刻せんと欲し、乃ち相共に議して其敍文を去る。但銘の以て孤行すべからざるを以て、其敍中の歇語を節取し、

其門人片徽猷。淨寫以致二諸當完所一。余受讀レ之。銘辭流暢可レ誦。至二其敍文一則蕪甚。蓋以下其臨終口二授門人一。門人受而經二紀之一。不下能三盡如二其意一故。致二此鹵莽一耳。今玆將レ木二稿刪一也。同志之士欲レ附二刻之一。乃相共議去二其敍文一。但以二銘之不レ可二以孤行一也。節二取其敍中歇語一。以具二一當之文一云。

以て諸を其端に弁し、以て一篇の文を具すと云ふ。

一 澤村琴所の門弟　二 宇野士新　三 綴は片中、字は季秩、號は北海、越後人　四 銘の辭句はのびやかにして誦するに足る　五 偽稿　六 疏漏、亂雜　七 印刷に附す　八 單獨に出す

吾先友天履仁。爲レ人寡欲。於二世味一泊如也。惟以二肘不レ離レ案爲二人間至樂一。而甚慕二吾祖與二宇氏兄弟一。其著書皆自寫珍藏。稱不レ容レ口。論語考。自二里仁一至二雍也一三卷。上梓亦成二履仁手一。

吾が先友天履仁、人と爲り寡欲、世味に伯如たり。惟肘案を離れざるを以て人間の至樂と爲す。而して甚だ吾が祖と宇氏兄弟とを慕ふ。其著書は皆自ら寫して珍藏し、稱して口を容れず、論語考、里仁より雍也に至る三卷は、上梓亦履仁の手に成る。

一 天沼俊一、字は履仁、號は仮庵、江戸の人　二 俗世の名利に對して淡泊なり　三 机によつて筆を運む

宇鑒。字士茹。改字士朗。小字兵介。士新弟。平安人。士朗與士新友愛篤至。其學充實不相讓。世稱平安二字先生。而年僅三十一。先士新卒。嗟乎天少假年。其樹立當未可量。士新序遺稿云。余與子朗同學者十餘年。而自顧所成。曾未能如士朗誠才哉。且余以疾故。省思慮。精神不操觚者久之。則其先余翩翩固宜。而不宜先者之先。獨何歟。

宇鑒

宇鑒、字は士茹、改字は士朗、小字は兵介、士新の弟なり。平安の人。

士朗、士新と友愛篤至にして、其學充實相讓らず。世平安の二字先生と稱す。而るに年僅かに三十一、士新に先んじて卒す。嗟乎天少しく年を假さば、其樹立當に未だ量る可からざるべし。士新、遺稿に序して云く、余士朗と學を同じうすること十餘年。而して自ら成す所を顧みるに、曾て未だ士朗の如くなる能はず。士朗誠に才ある哉。且つ余疾を以ての故に、思慮を省き精神を一にし、觚を操らざること久し。則ち其の余に先だつて翩翩たるは固に宜なり。而して宜しく先だつべからざる者の先だつは、獨り何ぞや。

㊀ 兄弟のなかよきこと此の上なし ㊁ 其學問の空虛ならざること互に負けず ㊂ 今少しく生き延びしならば大成すること其程度の推測しがたきはどなもん ㊃ 思慮を少なくし精神を散らさず ㊄ 文を作らざること久し

嘗來二江戸一入二讓園之社一。與二周南南郭金華輩一相交。無何歸二于京一。徂徠有二贈言一。贈二于季子一序。是也。春臺斥非曰。兵介嘗遊二東都一。從二我徂徠先生一學二古文辭一。既歸二平安一而畔レ之。與二其兄一俱非二徂徠一。此言之過

㊀ 弟士朗がひちひちと自分より先だち飛びゆくは尤もなり ㊁ 學問に於て先だつは尤もなれど弟として兄に先だち死するは何事ぞや

嘗て江戸に來りて讓園の社に入り、周南・南郭・金華の輩と相交る。何もなく京に歸る。徂徠贈言有り。季子を贈る序、是なり。春臺の斥非に曰く、兵介嘗て東都に遊び、我が徂徠先生に從つて古文辭を學ぶ。既にして平安に歸りて之に畔き、其兄と俱に徂徠を非ると。此れ言の過激なり。士朗必ずしも然らず。其の大潮師に與ふる書に曰く、夫れ物翁は當世の龍門なれば、四方の士の其門に踵る者何ぞ限らん。而るに翁容れずして曰く、我を溺すことを爲す毋かれと。卽ひ之を容るゝも、再三往かざれば見ることを獲ず。卽ひ見ることを獲るも、亦必ずしも其提諦を得ずと云ふ。鑑の謁を取るや、翁方に客を會し笙を炙る。輒ち鑑を呼び、入れて之に坐を命ず。而して又之に食を命じ、遂に二三子の

激。士朗不二必然一。其與二大潮一書曰。夫物情當世龍門。四方之士踵二其門一者何限。而翁弗レ容曰。毋二溷レ我爲一也。即容レ之。不二再三往一不レ獲レ見焉。即獲レ見。亦不三必得二其提撕一云。鑑之取レ鶴。翁方會レ客炙レ笙。輒呼レ鑑入命二之坐一。而又命二之食一。遂令レ從二二三子之後一。博レ我約レ我。叩二其兩端一而竭焉。鑑鄙人也。才性駑下。何以有レ此。於翁一也。則惟師之故愛及二屋烏一耳。又與二玄海師一書曰。文豈易レ言哉。綜二該古今一。包二括天地一。然後爲レ得也。今求二其人一海內之大。而一物先生在焉。

後に從はしむ。我を博くし我を約し、其兩端を叩いて竭す。鑑は鄙人なり。才性駑下、何を以てか翁に此ることあらん。則ち惟師の故愛屋烏に及ぶのみと。又玄海師に與ふる書に曰く、文豈に言ひ易からんや。古今を綜該し、天地を包括し、然る後に得たりと爲すなり。今其人を求むるに、海內の大、而も一物先生あるのみと。

● 祖徠の家號　● 山縣周南、服部南郭、平野金華　● 蹇蹇河水を詐つて龍門の地に至れば觀覽にして登る能はざ、登る者あらば鶴になるといふ、因て蹇蹇高きもの〻喩にいふ也　● 敎訓　● 士朗の名　● 笙を吹く者、鶴の鳴の詩に「日嘉方敎鼓、天樂更炙笙」　● 弟子　● 論語子罕篇に曰く、我を博むるに文を以てし我を約するに禮を以てすと　● 師(大潮)に對する祖徠の愛情が轉して我にまで及べる　● ナベるはナ　● 一つにまとめる　● 天下の大にして、只一人の祖徠先生あるのみ

芥彥章丹丘詩話曰。絕句之義。迄無二定義一。謂レ類二近體首尾或中二聯一。恐不レ足レ避。吾友宇士朗謂絕句者。謂二一句一絕一。律詩句句聯排。絕句不レ然。故絕句對二律詩一之稱耳。此說明白可レ據。古人未二嘗言一及。

芥彥章の丹丘詩話に曰く、絕句の義、迄に定義無し。近體の首尾或は中二聯を裁つと謂ふ。恐らくは憑るに足らざらん。吾が友宇士朗謂ふ、絕句とは、一句一絕を謂ふ。律詩は句句聯排なれども、絕句は然らず。故に絕句は律詩に對するの稱のみと。此說明白據るべし。古人未だ曾て言及せずと。

● 古詩に對して五七言律詩　● 一句にしてきれる　● 句と句とが對句になる　● 傳ナベし

秋山儀。字子羽。小字儀右衛門。號二玉山一。肥後人。仕二國侯一。玉山世祿二于本藩一。秋山需菴者。爲二玉山從父一。以二扁倉術一。亦受レ俸焉。玉山出爲二之後一。早習二其技一。又自レ少好レ學。博寓二筆精一。其所二發明一。富學皆驚嘆。於レ是侯命更奏二佗子一。調レ醫。使二玉山壹爲二儒學一。乃來二江戸一。從二祭酒林鳳岡先生一。先生奇二愛其才一。學方講說日已有二疾病一。則使二玉山代一。久之業大進。其歸二于國一也。執レ贄及レ門者踰レ千云。

卷之八

秋山儀

秋山儀、字は子羽、小字は儀右衛門、玉山と號す。肥後の人。國侯に仕ふ。玉山世〻本藩に祿す。秋山需菴といふ者、玉山の從父たり。扁倉の術を以て亦俸を受く。玉山出でて之が後と爲り、早く其技を習ふ。又少より學を好み、博く羣籍を窺ふ。其發明する所宿學皆驚嘆す。是に於て侯命じて更に佗子を養ひて醫を嗣がしめ、玉山をして壹に儒學を爲めしむ。乃ち江戸に來り、祭酒林鳳岡先生に從ふ。先生其才學を奇愛し、講說の日己れ疾病有るに方つては、則ち玉山をして代らしむ。久しうして業大に進む。其の國に歸るや、贄を執り門に及ぶ者千を踰ゆと云ふ。

(一) 肥後藩　(二) 叔父　(三) 醫術を以て俸祿を受く　(四) 老儒者　(五) 他人の子を養子とす　(六) 大學頭の廣名　(七) 東師を訪ねて入門す

寶曆乙亥、熊本新に時習館を創む。此れ玉山建議して興す所なり。玉山乃ち之が提學と爲り、學規十三則を掲げ、俊才を薦め子弟を敎ふ。是に於て藩中斐然として化に嚮ふ。岩謙齋に復する書に曰く、廟學の命新に下る。以て菊池氏の廢を興すに足る。是れ則ち不佞が涓埃我が公に報いんことを圖る所以なりと。又越子聰に復する書に曰く、敝邑菊池氏の時、蓋し始めて學を建つ。加藤氏に至るに及ぶや、荒廢修めず、絃誦久しく熄む。加藤氏亡びて國除かれ、未だ幾ならずして我が先公實に茅土の封を享けて入つて立つ。五世にして今公に及ぶ。儒敎を尊信し、學館を再興す。扁して時習といふ。臣儀蓋し與つ

焉。是則不佞所以涓埃圖報二我公一矣。又復二越子聽一書曰。敝邑菊池氏時。蓋始建學。及玉二加藤氏一也。荒廢不修。絃誦久熄。加藤氏亡國除。未幾我先公實享茅土之封一而入立焉。五世及二今公一。尊二信儒教一。再興學館一。扁曰二時習一。臣儀豈與有一讒焉。

て議する有りと。

㊀ 五年 ㊁ 教頭 ㊂ あやまりて美なり ㊃ 感化にかんむく ㊄ 興廢、此處にては肥後藩の學校を建つる命令下りしなり ㊅ 南北朝の頃菊地武時父子肥後に在りて學を興す ㊆ 自己の識解 ㊇ 一滴の水と一粟のちり、極めて少きをいふ ㊈ 趙智囊夢 ㊉ 加藤清正肥後に封ぜられ子孫國の世に亡ぶ ㊊ 學校荒れすたるより諸侯に授けたる故事 ㊋ 扁額を掲ぐ

紀平洲小語曰。肥後秋山儀子羽。與二余一親交十數年。會飲醉語。是非四應。未嘗一一聞二拒一人之言一。又曰。子羽外柔內剛。有二親友一。作二鬲一懷杯一者。諸客皆舉。獨子羽不二敢飲一。作二詩一諷之。

紀平洲の小語に曰く、肥後の秋山儀子羽、余と親しく交ること十數年。會飲醉語、是非四應、未だ嘗て一も人を拒むの言を聞かずと。又曰く、子羽、外柔內剛なり。親友に鬲膈杯を作る者有り。諸客皆舉ぐ。獨り子羽のみ敢へて飲まず。詩を作つて之を諷すと。

㊀ 細井平洲、名は德民、尾張の人、米澤侯の賓師となる ㊁ 一所に酒飲みて醉ひ語る ㊂ 是といへば是、非といへば非、凡て人の言に賛す ㊃ 外はやさしくむはたけし

登二富士山一者。修二役小角法一。以下自二六月朔一至中七月二十日。爲二登陟期一。然玉山以二七月二十一日一登。是日天清風和。獨勝。遂有二富嶽記一。其文朗暢。人之所賞也。南郭嘗稱曰。天地有二富嶽一。乃始有二此記一。苟神而不二文一則已。摹玉之圖一題二名山一。萬古愈增二顏色一。若二夫木華之神一。則固當三槩然啓二玉齒一爾。

富士山に登る者、役の小角の法を修め、六月朔より七日二十日に至るを以て、登陟の期と爲す。然るに玉山七月二十一日を以て登る。是日天清く風和ぎ、獨り霓勝を擅にす。遂に富嶽記有り。其文朗暢人の賞する所なり。南郭嘗て稱して曰く、天地富嶽有りて、乃ち始めて此記有り。苟も神にして文ならずんば則ち已む、摹玉の圖一たび名山に題して、萬古愈〻顏色を增す。夫の木華の神の若きは、則ち固より當に槩然として玉齒を啓くべきのみと。

㊀ 役の小角、文武天皇時代、大和の人、呪術を善くし鬼神を使役す ㊁ 晴霽を十分になす ㊂ はがちかにしてのびやか ㊃ 淺間の神が文を解せずばそれまでなるが ㊄ 玉山が摹玉の圖といふ言を富士山に題してより永遠にいよ〳〵山のりつぱさを增す ㊅ 淺間神社の祭神、木華咲耶姫命 ㊆ 齒をあらはして美しく微笑すべし

一日古伯彝と、劉文翼の所に飲む。玉山謂つて曰く、余、伯彝と同じく酒を嗜む。而して伯彝は柳下惠たり、余は則ち伯夷なりと。蓋し伯彝は善否を問はず、玉山は醇に非ざれば飲まず。故に此言有り。

一日與二古伯彝一飲二劉文翼所一。玉山謂曰。余與二伯彝一同嗜レ酒也。而伯彝爲二柳下惠一。余則伯夷。蓋伯彝不レ問二善否一。玉山非レ醇不レ飲。故有二此言一。

玉山詩文を以て已に一時に冠冕たり。又工に字を作し、短章片墨と雖も人に傳へらる。赤松國鸞、三上宗順に與ふる書に曰く、秋玉山の詩一首、卽ち其の手書する所なり。詩は固より超乘、書亦凡ならず。遣つて以て清玩に供す。玉山は海内の一名家にして、僕嘗て忘年の交を辱うす。今は則ち亡しと。

玉山詩文以レ已一時冠冕。又工作レ字。雖二短章片墨一爲レ人所レ傳。赤松國鸞與二三上宗順一書曰。秋玉山詩一首。卽其所二手書一。詩固超乘。書亦不レ凡。遣以供二清玩一。玉山海内一名家。僕嘗辱二忘年交一。今則亡矣。

玉山林門に出でて、交道甚だ廣し。讙苑の徒に於ては、南郭・仲英・蘭亭・鶴臺の輩と尤も驩を爲す。南郭・蘭亭の沒するや、爲に詩數首を作りて之を弔ふ。

玉山出二於林門一。交道甚廣。於二讙苑徒一。與二南郭仲英蘭亭鶴臺輩一尤爲レ驩。南郭蘭亭之沒也。爲作二詩數首一而弔レ之。

青木敦書

青木敦書、字は厚甫、小字は文藏、昆陽と號す。武藏の人。大府に仕ふ。昆陽は初め處士なり。其清才、好學、早く大岡忠相に知られ、官庫の書を觀ることを賜ふ。乃ち以爲へらく、草莽の臣にして、官書を窺ふことを得るは、古

青木敦書。字厚甫。小字文藏。號二昆陽一。武藏人。仕二大府一。昆陽初處士也。其清才好學。早見レ知二於

① 古の字辛の門あ、辛島鼎井、字は伯彝、熊本の儒官　② 宮觀維翰、字は文翼、讙門と號す、自ら修して讙を長とす、紀伊の人　③ 論語微子篇に、伯夷を稱つて、其志を降さず其身を辱めずといひ、柳下惠を稱つて、志を降し身を辱むといへり。伯夷は其君に非ざれば事へず、柳下惠は汙君を恥ぢず、小官を卑とせず、三たび黜けられても去らざるをいふ　④ 酒の異稱　⑤ 美酒

① すぐれて頭立ちたる人の意　② 短い文一片の書　③ すぐれてりつぱ　④ 送りして足下の御覽にそなへる　⑤ 年齢の如何を問はず、唯だ學德を以てする交り

① 林氏讙の門弟なればいふ　② 交際廣し　③ 徂徠門の人々　④ 服部南郭、同仲英、高蘭亭、龍鶴臺　⑤ なかよく交はる

大岡忠相に賜へ親に官庫書を乃以て爲草莽臣。得て窺ふ官書を自古未之有也。雖西土亦然矣。如皇甫謐自表借書一車。蓋以武帝之舊好故也。予自非大岡公之遇。惡能爲此榮哉。元文己未。拜大府命。管典籍事。後屢奉旨到諸州。按梵刹民家。搜索其舊錄。足以徵國家事者。而進呈之。其所著述。亦莫不上。延享甲子。舉紅葉山火番。尋改評定所儒者。終遷爲書物奉行。

より未だ之れ有らざるなり。西土と雖も亦然り。皇甫謐自ら表して書一車を借りしが如きは、蓋し武帝の舊好を以ての故なり。予大岡公の遇に非ざるよりは、惡ぞ能く此榮を爲さんやと。元文己未、大府の命を拜して、典籍の事を管す。後屢〻旨を奉じて諸州に到り、梵刹民家に投じ、其舊錄以て國家の事を徵するに足る者を搜索して、之を進呈す。其の著述する所、亦上らざるは莫し。延享甲子、紅葉山の火の番に舉げらる。尋いで評定所の儒者に改め、終に遷つて書物奉行と爲る。

(一) 浪人　(二) りつぱな才ありて學問好き　(三) 大岡越前守忠相　(四) 民間仕へざる臣　(五) 支那　(六) 昔關係の故　(七) 厚き待遇　(八) 四年　(九) 幕府　(一〇) 寺院　(一一) 古き記錄　(一二) しらべ見る　(一三) 元年

昆陽出二伊藤

昆陽、伊藤東涯の門に出で、其學豈に有用に志し、經義、文章に於ては必ずしも

東涯門。其學豈志二有用一於二經義文章一。不二必究思一。故若下不レ類二堀川之徒一者上。然非二始有二他師一矣。山崎氏社中割記雜話續錄下青木文藏者。學二仲邨惕齋一。後師二淺見絅齋一。此同名異人。非二昆陽一也。

究思せず。故に堀川の徒に類せざる者の若し。然れども始より他師有るに非ず。山崎氏社中の割記（雜話續錄）に、青木文藏といふ者、仲邨惕齋に學び、後淺見絅齋を師とせし事を載す。此は同名異人にして、昆陽に非ざるなり。

(一) 世の中の實利　(二) 深く考へず　(三) 東涯京都の堀川に住り　(四) 山崎闇齋

嘗嘆曰。凡有レ罪非二死刑一者。遠放二之島嶼一。要在レ使二其終二天年一耳。然諸島少二五穀一。常以二海產水實一給レ食。是以往往不レ能レ免二餓死一。豈不二亦痛一

嘗て嘆じて曰く、凡そ罪ありて死刑に非ざる者は、遠く之を島嶼に放つ。要は其をして天年を終へしむるに在るのみ。然るに諸島五穀少なく、常に海產、木實を以て食に給す。是を以て往往餓死を免るゝこと能はず。豈に亦痛しからずや。

(一) 即ち種藝の地と雖も、歲歉に遇へば、則ち民菜色無き能はず。意者ふに百穀の外、以て穀に當つ可き者、薯蕷に如くはなしと。乃ち官に陳じ、種子を薩摩に求め、試に之を官の藥苑中に種うるに、則ち極めて蕃衍す。是に於て

國字を以て藩薯考一卷を著して、其培植の法を演ぶ。官、版に鏤み種子を併せて諸島及び諸州に行下す。未だ數年ならざるに、處として種ゑざるなく、今に至つて上下之を便とす。歳登らずと雖も、民遽かに餓ゑざるは、實に昆陽の惠、無窮に及べるなり。其墓門の碑に題して、甘藷先生之墓といふ。以有るかな。

㊀ 島流しにす　㊁ つまる所は罪人をして天藷を蒔へしむるため　㊂ 耕作のできる土地にても飢饉にてあへば人民食なくして顏色青ざむる如き事あり　㊃ さつまいも　㊄ 幕府の顯官、卽ち今の東京小石川の植物園なり　㊅ 殖え繁る　㊆ 日本文　㊇ 作りかた　㊈ 穀物みのちげ

昆陽の時に當り、未だ和蘭の學を講ずる者有らず。昆陽獨り以爲へらく、其說に於て必ず收用す可き者有らんと。而るに和蘭の字、蚊脚蟒行、未だ通解し

當二昆陽時。未有下講二和蘭之學一者上。昆陽獨以爲於二其說一必有下可二收用一者上。而和蘭之字。蚊脚蟒行。未レ易二通解一。於レ是或之二長崎一質二諸者一。或博攷二其書一。遂粗獲二了會一。近此學漸闢。而昔不レ得レ不レ本二昆陽一云。大槻玄澤六物新志曰。和蘭學之一塗。草創於二白石新井先生一。杉田先生。故近時從二事於斯一者。皆莫レ不レ淵二源於四先生一焉。

昆陽博學洽聞。著書甚富。而其所二鏤梓一

易からず。是に於て或は長崎に之いて譯者に質し、或は博く其書に攷へ、遂に粗了會を獲たり。近ろ此學漸く闢く。而して皆昆陽に本づかざるを得ずといふ。大槻玄澤の六物新志に曰く、和蘭學の一塗、草創は白石新井先生に於てし、中興は昆陽青木先生に於てす。休明は蘭化前野先生に於てし、隆盛は鶴齋杉田先生に於てす。故に近時斯に從事する者、皆四先生に淵源せざるはなしと。

㊀ 採用す　㊁ 其形蚊のあしの如く、其孚行かにの歩むの如く顚さまなり　㊂ 通譯　㊃ 蘭學　㊄ 蘭學者、名は茂實、字は子興、玄澤と稱し、磐水と號す、仙臺の藩醫　㊅ 手始め　㊆ 休は美し、明は明か　㊇ 杉田玄伯

昆陽、博學洽聞にして、著書甚だ富む。而も其鏤梓する所の者、惟藩薯考一卷のみ。餘は皆家に藏す。是を以て世未だ其の撰する所何書有るかを詳にせ

者。惟蕃書考一卷、餘皆藏二于家一。是以世未レ詳二其所レ撰有二何書一也。青木一清者。吾知レ之。即爲二昆陽後一。因得三遍見二遺著一。乃紀二其目一。經濟纂要前集十二卷。後集五卷。續集三卷。官職略記十三卷。刑法國字譯十二卷。昆陽漫錄六卷。續錄一卷。國家食貨略。國家金銀錢譜。答問小錄。奉使小錄。對客夜話。夜話小錄。一夕話。續一夕話。雜集。郡名考。和蘭勸酒哥解。和蘭櫻木一角說。長崎聞書、各一卷、和蘭文字略考三卷。和蘭話譯。草廬雜談各二卷。續草廬雜談一卷、

ざるなり。青木一清といふ者あり。吾れ之を知る。即ち昆陽の後たり。因つて遍く遺著を見るを得たり。乃ち其目を紀せん。經濟纂要前集十二卷。後集五卷。續集三卷。官職略記十三卷。刑法國字譯十二卷。昆陽漫錄六卷。續錄一卷。國家食貨略。國家金銀錢譜。答問小錄。奉使小錄。對客夜話。夜話小錄。一夕話。續一夕話。雜集。郡名考。和蘭勸酒哥解。和蘭櫻木一角說。長崎聞書、各一卷、和蘭文字略考三卷。和蘭話譯。草廬雜談各二卷。續草廬雜談一卷、

㊀ 學問廣く見聞あまねし　㊁ 反にきざむ

奥田士亨

奥田士亨。字嘉甫。小字宗四郎。號二蘭汀一。又號二南山一。又號二三角亭一。伊勢人。仕二津侯一。三角幼時。就二表叔柴田蘋洲者一學。蘋洲嘗謂曰。讀レ書宜レ師二天下第一人一。當二今之世一。京師伊藤原藏。即其人也。汝可二往而學一。於レ是即負レ笈遊二東涯門一。親炙十年。殆入二其室一。乃擢仕二津侯一。謹慎勤レ事。歷二事四君一。五十年未二嘗有レ過。侯皆眷注甚渥。老年致仕。後時招二見之一。呼

奥田士亨、字は嘉甫、小字は宗四郎、蘭汀と號す。又南山と號し、又三角亭とも號す。伊勢の人。津侯に仕ふ。

三角幼時、表叔柴田蘋洲といへる者に就いて學ぶ。蘋洲嘗て謂つて曰く、書を讀むには宜しく天下第一の人を師とすべし。今の世に當つては、京師の伊藤原藏、即ち其人なり。汝往いて學ぶ可しと。是に於て即ち笈を負うて東涯の門に遊び、親炙十年、殆ど其室に入る。乃ち擢でられて津侯に仕へ、謹慎事を勤む。四君に歷事し、五十年未だ嘗て過有らず。侯皆眷注甚だ渥し。老年致仕す。後時〻之を招見するに、呼んで先生と曰つて名いはず。

㊀ 母方の叔父　㊁ 東涯　㊂ 書を入るゝ嚢　㊃ 親しく昵近すること十年にして殆ど奥義に達す　㊄ 四代の主君につぎつぎに仕ふ　㊅ 目をかけらるゝこと厚し

曰二先生一不レ名。

三角賦質謙讓。年七十七。恐レ及二身後一人之撰中諛墓之文一。於レ是建二壽碣一。自紀二履歷一。其銘曰。起二于田間一。升二中廳一。直。何以得レ之。稽古之力。

年三十三。喪レ父。翌年訣二東涯一。爲絶二酒肉一。服二心喪一者。合四年。

亭之名二三角一。徹二愈退翁一存二

三角賦質謙讓なり。年七十七、身後に及び人の諛墓の文を撰ばんことを恐れ、是に於て壽碣を建て、自ら履歷を紀す。其銘に曰く、田間に起りて、中廳直に升る、何を以てか之を得たる、稽古の力なりと。

一 うまれつき謙遜　二 ゆもれり（つちひて作れる墓碑の文　三 生前に設くる碑を壽といふ　四 古道ををさめたる力

年三十三にして、父を喪ひ、翌年東涯に訣る。爲に酒肉を絶ち、心喪に服すること合せて四年なり。

一 心中に喪を守る。古制師には心喪に服す

亭の三角と名づくるは、愈退翁に倣つて、盈つるを虧くの戒を存するなり。集中に

虧レ盈之戒一也。集中載二亭記及詩一。詩有レ人間交際重二謙損一。天道循環警二滿虧一之句。後偏好二物之三角一。自二文房諸具一。至二百雜器一。多製以三三角二云。

亭の記及び詩を載す。詩に、人間の交際謙損を重んず。天道循環して滿虧を警むの句有り。後偏に物の三角なるを好み、文房諸具より、百雜器に至るまで、多く製するに三角を以てすと云ふ。

一 天道は次第にめぐりて滿つるものはかくるをいましむ

三角詩。其誦憶而從レ人者。食禁歌也。曰。天門赤豆勿レ食レ鯉。葱蒜鼈李惡二雞子一。棗菱酢李共長レ蜜。無腸公子避二梨柿一。妊婦桑椹鯉鱠卵。子薑發レ瘡生二

三角の詩にて、其誦憶して人を從する者は、食禁の歌なり。曰く、天門赤豆に鯉を食ふことなかれ、葱蒜・鼈・李に雞子を惡む。棗・菱・酢・李共に蜜を畏れ、無腸公子に梨・柿を避く。妊婦桑椹・鯉鱠・卵、子薑瘡を發し枝指を生ず。苦苣蜜を忌み鱔に醋を忌む。魚鱠に蓼を用ふれば肚裏を堅にす。胡桃・麻姑・鯽・蕎麥、葱麪・鮎魚渾て雉を犯す。饅頭・鰍・鱔は川椒を忌み、楊梅と葱、雀と李、筍・餳糖を畏れ、鶉に菌を畏る。莧・鴨と鼈と錡を同じうするを休めよ。魚目睫あり腹丹字、鳥足伸ばざるは是れ自ら死す。鯽魚と糖餅、黄魚と蕎、一たび

枝指。苦苣忌レ蜜。鱔忌レ醋。魚鱠用レ蓼。堅二肚裏一。胡桃麻姑。鯽蕎麥。蕈麪。鮎魚渾。犯レ雉。鰕蟹鰻鱔忌二川椒一。楊梅與レ葱。雀與レ李。笋鰕長レ糖。鶏畏レ蓴。鴨與レ薤。休レ同レ鑄。魚目有レ鍵。腹丹字。鳥足不レ伸。是自死。鯽魚糖餅黄魚蕎。一犯永訣屍變レ紫。醋蟹相犯。食經不載。而余二人死者一以錯二厨壁一。

犯せば永訣屍紫に變ず。(醋・鱔相犯すこと、食經に載せず。而も余二人の死者を見る。以て厨壁に掲ぐ。)

(一) 讀みあぶなし　(二) 食ひ合せ　(三) 天門は天門冬といふ植物、砂糖漬にす、赤豆はあづき　(四) 薤はねぎ、蕗はにんにく、蕈はすつぽん、李はすもも、雞子は雞卵　(五) 蓴は なつめ、菱はひし、酢はす、李はすもも　(六) 蟹の異稱　(七) 妊婦が蟹殼卵ち梨の實、鯉、鮒即ちなます、卵にしようがを混食すれば子にかさを生じ又は指の多き子を產むとなり　(八) ちさの一種　(九) キタゴ、鰕に似たる一種の魚　(十) 胃腸。經の字原本のまゝ、或は坐の古文誤にて「肚裏に坐す」と讀ずべきか　(十一) 胡桃はくるみ、鮒はふな　(十二) 素麺と雷魚とは矢にわるし　(十三) 鱔鰻も、鮮は鯰の類　(十四) 鯉の目にまつげを生じ、腹の丹の字のかたある時、又鳥の足ちゞんで伸びざるもの　(十五) 蓴はひゆ、鴨はかも　(十六) 雉　(十七) やまもも　(十八) たけのこ　(十九) 蓴はひゆ、鴨はか

三角集。巾箱本五卷。合三冊。詩文略有二諸體一。而缺二書牘一。曰。尺牘之文。固不レ足レ志。貴レ事似レ實。直。答レ問緩レ誇レ智。

三角集は、巾箱本五卷、合して三册。詩文略には諸體有り。而して書牘を缺く。曰く、尺牘の文、固より志すに足らず。事を言ふは直を賣るに似、問に答ふるは智を誇るに嫌ありと。

(一) 袖珍本　(二) 書面文　(三) 己の眞直を見せびらかす

三角集。文二卷。每二卷首一題二奥田士亨著一。詩三卷。每二卷首一題二揥水燕僧著一。揥水燕僧。不レ知二何謂一也。而近聞二其說一。伊勢有二櫛田川一。三角居近レ之。因曰揥水。而奥田反燕。士亨反僧。不三其見署二姓名一者。抑有レ故。南郭始刻二其集一。初編一也。入江南溟以爲

三角集、文二卷あり。卷首每に奥田士亨著と題す。詩三卷あり。卷首每に揥水燕僧著と題す。揥水燕僧とは、何の謂ひなるやを知らざるなり。而るに近ろ其の說を聞くに、伊勢に櫛田川有り。三角の居之に近し。因つて揥水と曰ふ。而して奥田の反燕、士亨の反僧、其の見に姓名を署せざるは、抑〻故有り。南郭始めて其集の初編を刻するや、入江南溟以爲へらく、古人の集は皆死後に及び人之を傳ふるなり。其身自ら之を梓に鋟るに至つては、則ち笑ふ可きの甚だしきなりと。乃ち書を三角に通じ以て之を辨ず。三角答書南溟に和し、俱に南郭を駁す。既にして世生前其詩文を鏤む者漸く多く、人亦稱して盛事と爲す。三角心に之を羨み、遂に自ら其集を刻す。然れども前言を恥ぢ、詩集に至つては則ち隱名を用ふ。

(一) 奥田(おうでん)の反切は燕(えん)、士亨(しかう)の反切は僧(さう)　(二) 賛成す

古人集皆及二死後一人傳レ之也。至三其身自編二之耳。則可レ笑甚也。乃通二書于三角一以辨レ之。三角答書和二南溟。俱駁二南郭。既而世生前續二其詩文一者漸多。人亦稱爲二盛事一。三角心羨レ之。遂自刻二其集。然恥二前言一。至二詩集一則用二隱名一。

高惟馨。字子式。號二蘭亭一。又號二東里一。本姓高野。裁爲レ高。江戸人。蘭亭父勝春。號二百里居士一。以二俳諧一名二于世一。蘭亭幼從二徂徠一學。既了二其大義一。而十七爲レ替。從レ是壹潛二心于詩一。三百篇以下。漢魏六朝唐

高惟馨

高惟馨、字は子式、蘭亭と號し、又東里とも號す。本姓は高野、裁して高と爲す。江戸の人。

蘭亭の父勝春は、百里居士と號し、俳諧を以て世に名有り。蘭亭幼にして徂徠に從つて學び、既に其大義を了る。而るに十七にして替となる。是より壹に心を詩に潛め、三百篇以下、漢・魏・六朝・唐・明大家の作は、大氐之を暗誦す。其の自ら賦する所、殆ど佳境に入り、遂に一時の名士南郭の輩と、聲譽並び馳す。紫芝園漫筆に曰く、胡元瑞の詩藪に云ふ、唐人宋雍、初め令譽無し。替疾に嬰るに及び、詩名始めて彰るゝと、雲溪友議に見ゆと。吾が友高子式、年十七にして明を失し、厥後詩才漸く高し。豈に造物の均か、人をして其長を兼有せざらしむる。抑〻造物の慈や、人をして彼に失ひ此に得しむると。

(一) 學問の大意　(二) 盲目　(三) 詩經に收むる所の詩三百篇　(四) 絶妙の境に達す　(五) 聲譽並び馳す　(六) 評判ならび高し　(七) よ
(八) 胡元瑞の詩藪に云ふ　(九) 視力を失ひて聲文に得

蘭亭生平舉止。盡俟二相者一。於レ是不レ爲二瞽者偃蹇狀一。嘗曰。余明未レ喪時。不レ堪レ見三盲人動搖一。索其左右也。豈今效之乎。

蘭亭生平の舉止、盡く相者を俟つ。是に於て瞽者偃蹇の狀を爲さず。嘗て曰く、余明未だ喪はざりし時、盲人の動れば其左右を摸索するを見るに堪へざりき。豈に今之に效はんやと。

(一) 介添人　(二) 道をふみまよふさま　(三) さぐりまはる

明大家之作。大氐暗誦之。其所二自賦一。殆入二佳境一。遂與二一時名士南郭輩一。譽並馳。紫芝園漫筆曰。胡元瑞詩藪云。唐人宋雍。初無二令譽一。及嬰二瞽疾一。詩名始彰。見二雲溪友議一。蓋造物之均邪。令二人不レ兼二有其長一也。抑造物之

世有二蘭亭盲一。後書蹟。此世人彊求者也。天履仁藏二數張。嘗曰。人之喜二蘭亭書一。徒供二玩弄一耳。余不レ忍レ使二其蹟佗日逢二人嫌讀一也。遂皆瘞二土中一。

世に蘭亭盲後の書蹟有り。此れ世人の彊ひて求むる者なり。天履仁數張を藏す。嘗て曰く、人の蘭亭の書を喜ぶこと、徒に玩弄に供するのみ。余其蹟をして佗日人の嫌讀に逢はしむるに忍びざるなりと。遂に皆土中に瘞む。

一 天履仁 二 なれけがす

蘭亭詩。與レ人往復者。每屬二藤華岡一書レ之。故時人或謂二華岡一爲二蘭亭之書佐一。

蘭亭の詩にして、人と往復する者は、每に藤華岡に屬して之を書す。故に時人或は華岡を謂つて蘭亭の書佐と爲す。

一 伊藤華岡、江戸の書家 二 書記

吾祖少年在二江戸一時。與二蘭亭一親善。嘗謂レ祖曰。余覓レ婚。衆媛云。有二二氏一。一則多二委色一。而捌二女工一。一則有二才德一。而貌甚醜。吁才色並茂。自レ古爲レ難レ得焉。苟有レ一二於此一。則足矣。余何之爲レ妻。祖曰。愛レ色者。目見而後心悅レ之也。未二始有レ見。則醜美何論。不レ如納二其善一。刺繡以使レ理二家事一也。蘭亭嘆曰。誠然。誠然。非二交以レ信。孰能買レ之。然終舍二才德一。娶二委色一。夫婦人雖レ不二必責以レ德。而亦不レ可二以レ色爲レ主也。蘭亭惑焉。果六娶終無レ子。

吾が祖少年にして江戸に在りし時、蘭亭と親善す。嘗て祖に謂つて曰く、余婚を覓む。媒媼云ふ、二氏有り。一は則ち委色に多くして女工に拙し。一は則ち才德有りて、貌甚だ醜しと。吁才色並に茂なるは、古より得難しと爲す。苟も此に一あれば則ち足れり。余何れをか妻とせんと。祖曰く、色を愛するは、目見て後心之を悅ぶなり。未だ始より見ること有らずば、則ち醜美何ぞ論ぜん。如かず、其の刺繡に善きを納れて以て家事を理めしめんにはと。蘭亭嘆じて曰く、誠に然り。誠に然り。交信を以てするに非ずんば、孰か能く之を買はんと。然るに終に才德を舍てて委色を娶る。夫れ婦人は必ずしも責むるに德を以てせずと雖も、而も亦色を以て主と爲すべからざるなり。蘭亭惑ふ。果して六たび娶つて終に子無し。

一 著者原善の祖父號桂 二 なかよくす 三 女の技藝 四 才德にても委色にても一つのすぐれたるものあればよろし 五 交際に忠信を主とするにあらざれば誰かかく思ひきつていはん

蘭亭性善レ酒。

蘭亭性酒を善す。而して豪宕奇を好み、常に髑髏杯を擧げて飲を爲す。伴蒿蹊の

而豪宕好奇。常携髑髏杯一爲飲。俳蒼蹊閑田次筆。百井塘雨筆記。引二蘭亭。甚誤矣。凡爲二倭學者多厭二儒者。一味慢罵。蒼蹊亦不免焉。蘭亭病者數月。終不起矣。非暴卒也。見山惟熊撰墓誌。余聞鎌倉今現有二大館次郎墓。過者必就弔之。奈何其得發之乎。秋玉山蘭亭友人也。有二髑髏杯行詩。陳不知爲何人髑

閑田次筆に、百井塘雨の筆記を引いて曰く、蘭亭鎌倉教恩寺に於て、平重衡が舞妓千壽と宴を爲しし杯を得、此より飲に興を添へ、尚ほ且つ足れりとせず。大館次郎の墓を發き、髑髏杯を制して、以て玩弄に供す。其の墓を發くに當つてや、大に雷雨す。而も敢へて顧みず、遂に其意を行ふ。翌年此日暴かに卒すと。此れ妄言を傳聞して佗に攷へざるなり。蒿蹊之を信じ、以て蘭亭を毀る。甚だ誤れり。凡そ儒學を爲す者多く儒者を厭ひ、一味慢罵す。蒿蹊も亦免れず。蘭亭病むこと數月、終に起たず。暴卒に非ざるなり。山惟熊の撰する墓誌に見ゆ。余聞く鎌倉今現に大館次郎の墓有り。過ぐる者必ず就いて之を弔ふ。奈何ぞ其れ之を發くことを得んや。秋玉山は蘭亭の友人なり。髑髏杯行の詩有り。何人の髑髏たるかを知らざるを陳ぶ。乃ち序を并せて之を錄せん。序に曰く、高子式山人は達士なり。髑髏杯を置き、時時把玩す。死生を一にし、形骸を遺れ、超然自適す。少年爭ひ飲んで豪舉と爲す。予獨り燈頰して飲むこと能はず。衆予が未達を笑ふ。因つて髑髏杯行を作て自ら嘲り、兼ねて髑髏の爲に嘲を解く。詩に曰く、慨に月支の頭に非ず、亦知伯が仇に非ず、山人奇を好んで奇骨に至る。目に美酒を盛るに髑髏を以てす。少年爭ひ飲んで豪舉を誇る、皆道ふ山人達士の流と。座中の一客字は子羽、燈頰飲まず心獨り憂ふ。試に問ふ髑髏汝何の事あつて、甘夢を驚破して休することを得ざるか。又問ふ汝何物ぞ、奴か隸か將た王侯か、榾柮頭を搖して嬉笑に供す。若し侏儒に非らずんば必ず俳優ならん、髑髏答へて言ふ世にある時、只記す沈湎酒池に飲むを、又記す朝に鹿酒巾を戴き、夕に白接䍦を著け、時有つて興來れば草聖と稱す。脫帽何ぞ妨げん髮絲の如きを、一たび塵累して山阿に歸せしより、貴賤貧富復知らず、我肉既に烏鳶の腹を飫かしめ、我が顱倜爾として鴟夷に匹す。我が形は須ひず司命の復するを。我が魂は要せず宋玉の辭。糟丘の極霞我を喚び起す。知己誰か山人の奇に如かん。山人日日我が頂を摩す。醒然何ぞ天下を

髏。乃并序錄之。序曰。高子式山人逮士也。置二髑髏杯一。時時把玩。一二死生。遺二形骸一。超然自適焉。少年輩爭飲爲二豪舉一。予獨愛類不レ能レ飲。衆笑二予未逮一。因作二髑髏杯行一自嘲。衆爲二髑髏一解レ嘲。詩曰。既非二月支頭一。亦無二知伯仇一。山人好レ奇奇至レ骨。日盛二美酒一以二髑髏一。少年爭飲誇二

利することを爲ん。蓬蒿を出離して綺席に剛る。子羽設りに支離を嘲ることなかれ。我れ聞く古の酒人、一棺徒らに身を戢むと。縱ひ陶家の土に葬らるるも、何ぞ湘水の濱に異ならん、涓滴到らず劉伶が冢。南州の雞絮豈に脣を沾さんや。淵明終に臨んで足ることを得ず。畢卓生を了へて復晨せず。古來酒人孰か我に如かん。宿習綿綿天眞に醉ふ。管せず功名の朽不朽。論ぜず形神の親不親。未だ作さず阿梨七分破るゝを。常に染む醉醺萬斛の春。君見ずや無功が日月醉鄉に終り、鄙生が意氣高陽に盡く。中山千日偏に短きを苦み、百年三萬亦長きにあらず。黙阮化して褐の父と爲り、黃公壚下暗に悲傷す。笑殺す人間北海の守、何ぞ如かん地下南面の王。自ら誇る、唯我れ酣暢なるを。長夜首を濡して首杯と作る。子羽の頭顱此語を聞き、同口に子羽を責む。子羽汝は生頭顱たり、彼は死頭顱たり。生死頭顱亦奚ぞ擇ばん。況んや子璋が血摸糊たるに勝るをや。蹙類飲まず一に何ぞ愚なる。汝今飲まざれば歲將に去

豪舉。皆逮山人逮士流。座中一客字子羽。蹙類不レ飲心獨憂。試問髑髏汝何率。驚二駭甘夢一不レ得レ休。又問汝何物。叔耶謙耶將王侯。樽前搖頭供二嬉笑一。若非二孫儒一必俳優。髑髏答言在世時。只記沈湎飲二酒池一。又記朝戴二漉酒巾一。夕著二白接䍦一。有レ時興來稱二草聖一。慵帽何妨

らんとす。俛仰の間彼と伍を爲さんと。

(一) 氣性大なり (二) 人の頭骨にて遊れるまかづき (三) 清廉の子、一の谷の投獄れて病となり鎌倉に送られし時白拍子千壽と押る (四) みだりの言を傳へ聞きて他に零へ合はせず (五) 一緩にあなどり嘲る (六) 頓死 (七) 秋山玉山 (八) 手にとりてもてあそぶ (九) 死と生とを同一視し身體をわすれ歡にぬきんでて自分のさまゝにす (一〇) 遠んなるふるまひ (一一) 愛はしかむ、刺は鼻ばしら、卽ち顏をしかむ (一二) 悟りのひらけざるをいふ (一三) 月兵とも稱す、鎌代に源義の賣にありし親族の稱 (一四) 趙襄子知伯を亡ぼし其髑髏を飲器とす (一五) 龍亭奇を好んで奇僻麗す (一六) 秋山玉山の字 (一七) かほをしかめる (一八) 快き夢をさまされて休むことを得ざるか (一九) 酒樽の前に頭を動かして人々の笑ひに供す (二〇) 一寸法師 (二一) 酒色におぼるゝこと (二二) 陶潛閑酒飲する毎に頭上の角巾を取りて酒を漉し出りて後之を着く (二三) 帽の名、晉書山簡傳に出づ (二四) 草書の名人、書言故事に張旭大に醉ひて呼呼狂走し、髮を草聖と稱すとあり、又杜甫の飲中八仙にも出でたり、凡て酒と關係ある事を以て此に引用す (二五) 酒業は蹙々を流轉するなり、山阿は山のくま、卽ち山中に葬られしをいふ (二六) 酒を愛るべき革囊と酒偶を爲せり (二七) 楚辭宋玉の招魂をいふ (二八) 龍亭を斥す (二九) 白骨の白々たるさま (三〇) 草むらつぱな廊に連なる (三一) 秋山玉山 (三二) 分散して全からず (三三) 吳の鄭泉平は酒を嗜む、死に臨んで曰く、願くは我を陶家の傍に葬れ、後陶家に其の土を取られて酒壺となりたしと (三四) 一海の酒 (三五) 晉の人、字は伯倫、酒を好むを以て名あり (三六) 隣家の酒を盜飲せる人、晉書に見ゆ (三七) 酒を嗜む習慣綿々として絕えず醉ひて天眞の純性をあらはす (三八) 功名の後に傳はると傳はらざるとをかまはず (三九) 形骸と精神 (四〇) 匿れて隱せる酒、又其色に似て晚春初夏に開く花の名、蓋し梨に對する修辭にて、其常に酒に親しむ意をあらはす也

髮知レ秋。一自三蓬累歸二山阿一。貴賤貧富不二復知一。我肉既飫二烏兎膏一。我顏偶爾四二時夷一。我形不レ須司命復。我魂不レ要宋玉辭。糟丘煙霞喚レ我起。知己誰如二山人奇一。山人日日聚二我頂一。翩然何利二天下一爲。出二離蓬茅一厠二椅席一。子羽莫三謾嘲二支離一。我聞古酒人。一棺徒戢レ身。纏綿葬二陶家土一。何異二湘水濱一。涓滴不レ到劉伶墓。南州雖繁豈沾レ脣。淵明臨レ終不レ得レ足。畢卓丁レ生不二復量一。古來酒人孰如レ我。宿習綿綿醉二天眞一。不レ曾功名朽不朽。不レ論形神親不親。未レ作阿梨七分破。常染醍醐萬斛春。君不レ見無功日月終二醉鄉一。鄙生意氣徒二高揚一。中山千日倒苦レ短。百年三萬亦非レ長。嵇阮化爲二禍之父一。黃公壚下唏悲傷。笑殺人間北邙守。何如地下南面王。自誇唯我酣暢哉。長夜濡レ首首作レ杯。子羽頭顱閉二此語一。同日責二子羽一。子羽汝爲二生頭顱一。彼爲二死頭顱一。生死頭顱亦奚擇。況誇二子瑋血模糊一。憂煩不レ飲一何愚。汝今不レ飲誠將レ去。俛仰間與レ彼爲レ伍。

蘭亭故勝情を貪ふ。鎌倉の山水奇麗を喜び、歳に一再は名人韻士と相追隨し、松濤館と名づけ、以て遊息の所と爲す。曰く、吾れ死せば其れ卽ち此に安ぜんかと。乃ち壽碣を建て、

(一) 名は貞其、滿の陳留高陽の人、郭公に謂し、賢に紀いて其七十餘城を下ししを以て有名なり　(二) 若巖と同時、竹林の七賢の中　(三) 冥北の北海郡に主たらんよりは死して地下の王となるべし　(四) 酒たけなはにして心のびやか　(五) 生きてゐるあたま　(六) 酒をしかめて酒を飲まず　(七) 俯仰の間に老死して死顱顱のなかまとならん

題殆遍。菅結二茅堂寺傍一。名二覺鶴館一。以爲二遊息所一。曰。吾死其卽安レ此乎。乃建二壽碣一。松崎君修記撰レ記。後三年、江戸に卒す。門人櫬を輿せ往いて之を營葬す。

(一) 名勝を愛するの情　(二) 名士詩人　(三) 勝景を評し之に題す　(四) 生前の墓碑　(五) ひつぎ

井通熙

井通熙、字は叔、小字は嘉勝、蘭臺と號し、又圖南と號す。姓は井上、修して井氏と爲す。江戸の人。備前侯に仕ふ。

蘭臺の先は、周防大内氏の族なり。七世の祖某、逆臣陶晴賢の難に死す。某井上氏を娶り、了心を生む。了心母姓を冒す。爾後世世之を沿襲す。父通翁字は玄瑞、大府の醫員なり。三男子有り。(一)伯は玄存、職祿を襲ぐ。(二)仲は蚤く夭す。(三)叔は則ち蘭臺なり。幼にして穎敏學を好む。年十二、元日に詩を賦して云く、天(六)

井通熙。小字嘉勝。號二蘭臺一。又號二圖南一。姓井上。修爲二井氏一。江戸人。仕二備前侯一。蘭臺之先。周防大内氏族也。七世祖某。死二逆臣陶晴賢難一。某娶二井上氏一。生二了心一。

了心冒二毋姓。爾後世世沿二稱之。父通翁字玄璠。大府醫員也。有二三男子。伯玄存。襲二職藩。仲玄天。叔則蘭臺也。幼穎敏好學。年十二。元日賦詩云。天邊雲物改。海上日華新。先酌屠蘇酒。趨庭獻二老親。父異之。期以二仙日盛名。弱冠從二天野曾原一名景孚。既而入二林鳳岡之門。享保中。鳳岡奉旨校二官庫書。蘭臺與焉。時未有二蘭臺號。而人以二蘭臺一呼之。遂以爲號。元文五年。應二辟備前侯。任二教授之職。

蘭臺字叔。而世以爲二子叔一者。自下石筑波序二山陽行錄一。稱中子叔上也。山陽行錄。蘭臺所レ著。

蘭臺字は叔。而して世以て子叔と爲すは、(一)石筑波山陽行錄に序して、子叔と稱せしによるなり。(山陽行錄は、蘭臺の著す所なり)

邊雲物改まり、海上日華新なり、先づ酌む屠蘇の酒、庭に趨つて老親に獻ず(七)と。父之を異とし、期するに他日の盛名を以てす。弱冠(八)、天野曾原(名は景孚)に從つて學び、既にして林鳳岡の門に入る。享保中、鳳岡旨の奉じて官庫の書を校するや、蘭臺與れり。時に未だ蘭臺の號有らず。而るに人蘭臺を以て之を呼ぶ。遂に以て號と爲す。元文五年、辟に備前侯に應じ、教授の職に任ず。(一〇)

一 聞質叛して其の主大内義隆を弑す　二 長男　三 次男　四 早死す　五 三男　六 空には雲のたなびくも改まり、海上には旭日新にさし昇る　七 孔子の子鯉、字は伯魚嘗て庭に孔子の前を趨る。父母及び師等長者のもとに到るにいふ　八 後日大名をあげんことを豫期す　九 二十歳頃　一〇 史官の異名

蘭臺不レ信二伊洛學一。嘗作二讀鳩巢宝先生文一。非二駁其固守二朱說一。且舉下國家不三必依二宋儒一之證上曰。通熙竊以爲序二山陽行錄一。稱中子叔上也。山陽行錄。蘭臺所レ著。

蘭臺閉レ戸讀レ書。有二客至一。則自答以二不在一。客以爲レ戲。蘭臺勵レ聲曰。主人自答如レ此。何僞之有。讀レ書不レ輟。

蘭臺戸を閉ぢ書を讀み、客至る有れば、則ち自ら答ふるに不在を以てす。客以て戲と爲す。蘭臺聲を勵して曰く、主人自ら答ふる此の如し。何の僞か之れ有らんと。書を讀んで輟まず。

蘭臺伊洛の學を信ぜず。嘗て鳩巢宝先生の文を作讀し、其の固く朱說を守るを非駁(二)す。且つ國家必ずしも宋儒に依らざるの證を舉げて曰く、通熙竊かに以爲へらく、先朝の行ふ所にして後主必ず行はば、漢武公羊を好む、宣帝當に穀梁を立つべからず。其の遇ふ所の時異なればなり。國初官板の諸書、亦皆宋儒の著す所に非ざるなり。豈に盡く程朱の說を取れりとせんや。文敏公嘗て經筵に

先朝所レ行。而
後主必行者。
漢武好二公羊一。
宣帝不レ當レ立二
穀梁。其所レ遇
之時異也。國
初官板諸書。
亦皆非二宋儒
所レ著也。豈爲三
盡取二程朱之
說一哉。文敏公
嘗侍二經筵一。進二
講論語一。號焚
章。神祖曰。讀レ
不爲レ否如何。
曰。臣謂。可レ問レ
人。亦可レ不レ問レ
焉乎。曰。然非二
朱熹之解一也。
臣愚以爲若

待し、論語を進講す。(九)既焚章にて、神祖曰く、不を讀んで否と爲すは如何と。曰く、臣謂ふに、人を問ふ可くんば、亦馬をも問はざる可けんやと。曰く、然らば朱熹の解に非らざるなり。臣愚以爲へらく、若し闕疑と云はば、則ち馬を問ふ可きなり。是は孔子の私疑なり。則ち人を重んじ畜を賤む。其義當に然るべし。不を讀んで否と爲すは、固より朱註の意に非らざるなりと。對問の語、載せて本集に在り。當時經筵、盡くは朱註に依らざること、亦見る可し。享保中、講官物先生、朝命を奉じて古註疏を校す。室先生亦與れり。(一〇)編成つて進呈す。悉く以て梓に鋟んで天下に頒布す。七經孟子考文是なり。伏して惟ふに、朝廷の德意、先後各立つる所有りて、必ずしも相因らざるなり。然れば則ち諸家の學、義相反すと雖も、猶ほ之を並置す。豈に編纂すべけんやと。

(九) 程子の學　(一〇) 執經反覆す　(一一) 講の武帝　(一二) 春秋の公羊傳　(一三) 春秋の穀梁傳　(一四) 德川幕府の初世

二三國屬。則可レ
問レ馬也。是孔
子之私疑也。
則重レ人賤レ畜。其義當レ然矣。讀レ不爲レ否者。固非二朱註之意一也。對問之語。載在二本集。當時經筵
不三盡依二朱註一。亦可レ見矣。享保中。講官物先生。奉二朝命一校二古註疏一。室先生亦與焉。編成進呈。
悉以鋟レ梓頒二布天下一。七經孟子考文是也。伏惟朝廷之德意。先後各有レ所レ立。不二必相因一也。
然則諸家之學。義雖二相反一。猶並置之。豈可二偏絕一哉。

(一) 論語「辰賞、子退朝曰、傷人乎、不問馬」の「不」を「否」とし「傷人乎否、問馬」といふ說につきての問答也　(二) 講官物在錄　(三) 片字殆に案ずる

蘭臺之學。有下
顧似二徂徠一者。
淺井太室曰。
蘭臺如レ告子
不レ得二于言一勿レ
求二于心一。(讀書會意)
答二邨正舒一書。
陳二其所見一。節二
錄于左一。曰。夫
道者如二大路一
然。學者往焉。

蘭臺の學、頗る徂徠に似たる者有り。淺井太室曰く、蘭臺は、告子の言に得ずんは心に求むる勿れ(讀書會意)の如しと。邨正舒に答ふる書に、其所見を陳す。左に節錄せん。曰く、夫れ道は大路の如く然り。(一)學者往き、(二)學者往く。豈に之を辨究せんや。心性は學問の先にする所に非ざるなり。是故に六經之を論ぜず、孔子も亦罕に言ふ所なり。(三)思孟の書首唱し、而して後性道の說、紛紛として競ひ起り、遂に宋儒に至つて極れり。其弊や(四)駸然大澤に陷ると。又曰く、夫れ古の聖王、道を立てて以て天下の人をして之に由つて行かしむること、

嬖者往焉。豈辨二究之一哉。心性者非二學問之所レ先也。是故六經不レ論レ之。孔子亦所二罕言一也。思孟之書首唱。而後性道之說。紛紛競起。遂至二宋儒一而極矣。其弊也厭然陷二于大澤一。又曰。夫古之聖王。立レ道以使二天下之人由レ之而行一者。豈如下黔壑水涸而可二徙跳一者上乎。道猶二溟渤之不レ可レ測也。人性亦猶二舟楫一也。舟楫遵レ海而漕。則百萬之粟可二運而致一焉。雖然乎。海與二舟楫一。非二一物一也。人性守レ道而行。則億兆之衆可二教而用一焉。雖レ然乎。道與二人性一。非二一物一也。又曰。熙幼孤貧。無二師保之訓一。雖レ然哉。誦レ詩而知レ有二雅頌一。讀レ書而知レ有二堯舜一。然後因學二十年如二一日一。益信二仲尼之道一。何暇及二宋儒滕物二家一也哉。宋儒不レ知二聖人一。不レ足二與言一之。滕維禎自稱二古學一。不レ免二宋儒之弊一。物茂卿作二爲二辨一。又著二論語徵庸學解一。亦唯與二二義及定本發揮一奚擇哉。有レ所二緣飾一而駁二仁齋一者。亦果是耶。非耶。熙之所レ未レ知也。

井上金峨受二業于蘭臺一。蘭臺友二視之一。不二待以二弟子一。每謂曰。子誠有レ才者也。自當レ

井上金峨、業を蘭臺に受く。蘭臺之を友視し、待つに弟子を以てせず。毎に謂つて曰く、子は誠に才有る者なり。自ら當に一家を成すべし。吾が籬下に立つて以て人に後るゝことなかれと。金峨後自己の見を立つ。而も尙ほ父執蘭臺先生と稱し、終身師事す。

(九) 豈に谿壑の水涸れて徒跳すべき者の如くならんや。道は猶ほ溟渤の測る可からざるがごとし。人性は亦猶ほ舟楫のごときなり。舟楫海に遵つて漕がば、則ち百萬の粟運んで致す可し。(一一) 然りと雖も、海と舟楫とは、一物に非ざるなり。人性道を守つて行はば、則ち億兆の衆も教へて用ふ可し。(一二) 然りと雖も、道と人性とは、一物に非ざるなりと。又曰く、熙幼にして孤貧、師保の訓無し。(一三) 然りと雖も、詩を誦して雅頌あるを知り、書を讀んで堯舜あるを知る。然して後困學二十年一日の如く、益〻仲尼の道を信ず。(一四) 何の暇あつて宋儒滕物二家に及ばんや。(一五) 宋儒聖人を知らず。與に之を言ふに足らず。滕維禎自ら古學と稱するも、宋儒の弊を免れず。物茂卿二辨を作爲し、又論語徵・庸學解を著すも、亦唯二義及び定本發揮と奚ぞ擇ばんや、緣飾する所有りて仁齋を駁する(二〇)は、亦果して是か、非か、熙の未だ知らざる所なりと。

(一) 孟子公孫丑上篇に在り。言語の上に關係する所ありとも心に强つて反求する勿れの意。具告子の心を動かさざる法 (二) 盲目 (三) つんぼ (四) わきまへ調べる (五) 心性研究は學問の第一目的に非ず (六) 心性の事は孔子言ふ所罕也、性の論思孟にはじまる (七) 子思の中庸と孟子 (八) 其の弊害やこゝろげたふれて大なる沼澤の中に陷る (九) 溟水涸れてかちにて渡る (一〇) 大洋 (一一) 運搬し得べし (一二) 億兆の民衆も之を教化して使用し得 (一三) 聽幽の名 (一四) 貧にして頼る所なく師の教訓を受けず (一五) 詩經は內容を風、雅、頌の三に分類す。風は風俗歌、雅は更に小大の二ありて、小雅は酒宴の樂、大雅は朝會の樂、頌は宗廟の祭歌 (一六) 苦學 (一七) 孔子 (一八) 伊藤仁齋と物徂徠 (一九) 文飾する

成二一家。勿下立二
吾鑑下一以後也
人。金峨後立二自己見一而尚稱二父執蘭臺先生一。終身師事焉。

嘗燒二齒于牛
島牛女祠畔。
立レ石表レ之。使二
金峨作レ記。東
江費丹。蘭臺
沒後。東江以
爲字未レ工。乃易レ石改書。蓋初以レ楷。後以二八分一。

蘭臺自レ少絕二
姪欲一。其於二婦
人一。無二老少一不
欲レ交二一語一。訪二
人所一。雖レ方二宴
飲爲歡時一。婦女出則遯辭去。

● 門下　● 父の友

嘗て齒を牛島の牛女祠畔に瘞め、石を立てて之を表し、金峨をして記を作り、東江をして書丹せしむ。蘭臺の沒後、東江以爲へらく、字未だ工ならずと。乃ち石を易へて改書す。蓋し初め楷を以てし、後八分を以てす。

● 東京向島牛の御前祠内　● 字の一書體。小篆と隸書との中間に在り

蘭臺少より姪欲を絕つ。其婦人に於ける、老少となく一語を交ふるを欲せず。人所を訪ひ、宴飲歡を爲す時に方ると雖も、婦女出づれば則ち速かに辭し去る。

● 酒を飲み興ずる

蘭臺戶氏之子二爲レ嗣。
潛字仲龍。號二
四明一。學博行
修。早有二重名一。
今年八十七。
曙鍱能談レ古。
男觀字賓王。
亦承二儒職一。有二
孫四人一。長天
祥。字徵民。次天覺。字先民。次天
訪。字順民。次天爵。字錫民。皆善士也。

蘭臺戶口氏の子を養つて嗣と爲す。潛字は仲龍、四明と號す。學博く行修り、早に重名有り。今年八十七、曙鍱として能く古を談ず。男觀字は賓王、亦儒職を承く。孫四人有り。長は天祥、字は徵民。次は天覺、字は先民。次は天訪、字は順民。次は天爵、字は錫民。皆善士なり。

● 年老いて元氣盛なるさま　● 德風の餘澤が子孫に影響す

石川正恒。字
伯卿。小字平
兵衛。號二麟洲一。
平安人。仕二小
倉侯一。

石川正恒

石川正恒、字は伯卿、小字は平兵衛、麟洲と號す。平安の人。小倉侯に仕ふ。

麟洲自レ幼好レ學貢二才氣一。先輩皆期二其有レ成。初從二柳滄洲堀南湖一學。比二弱冠一。其父拉來二江戸一。見二某生一。生即出二修辭家所レ作艱澀文一。試レ之。麟洲一目輒成レ誦。生驚器二重之一。及レ壯應二小笠原侯徴一。誘二掖後進一。其啓迪作興之功尤多。寶暦己卯。父在レ京。會疾作。遂不レ起。時年五十有三。

麟洲嘗著二辨道解蔽一。彈二刺徂徠學一。其持論多中レ窾。門人增井彦敬亦儒を以て名有り。同じく小倉に仕へ教授たり。石増二先生文抄世に行はる。彦敬嘗て書を吾が祖に修め以て交を求む。祖の復書に曰く、蓋し石子逝いて後其著す所の辨道解蔽といふ者を獲て之を讀む。亡論其鄙見と頗る異同有り。然れども其大要大に鄙衷に合する者有り。乃ち清然たること久しうして曰く、夫れ聖遠く道湮み、諸家紛然として、晩生後學墻面する無きにあらず。而して能く卓爾として羣を出で、以て後進の木鐸たるべき者、方今僅かに石子輩有るのみ。奚爲ぞ斯の人にして長逝するやと。

湯元禎

論多中レ窾。門人增井彦敬亦以レ儒有レ名。同仕二小倉一爲二教授一。石增二先生文抄行二于世一。彦敬嘗修二書吾祖一以求レ交。祖復書曰。蓋石子逝後獲二其所レ著辨道解蔽者一而讀レ之。亡論其與二鄙見一頗有二異同一。然其大要有二大合一。於鄙衷一者。乃清然者久之曰。夫聖遠道湮。諸家紛然。晩生後學匪レ無二墻面一。而能卓爾出レ羣。可二以爲一後進之木鐸一者。方今僅有二石子輩一而已。奚爲斯人而長逝矣哉。

湯元禎。字之祥。小字新兵衛。號二常山一。姓湯淺。修爲二湯氏一。備前人。世仕二國侯一。

常山父子傑。素好レ學。常山結髮受二庭訓一。知レ讀レ書。時其藩有二曹子漢一者。世二伊物之說一。常山見二事之一。勉學不レ倦。年二十四一來二江戸一。是時事二贄南郭一。專修二古文辭一。無幾還レ鄉。後八年復來二江戸一。與二春臺及蘭臺・觀海諸名人一結レ交。一時嘖嘖有二與稱一焉。

湯元禎、字は之祥、小字は新兵衛、常山と號す。姓は湯淺、修して湯氏と爲す。備前の人。世國侯に仕ふ。

常山の父子傑、素學を好む。常山結髮より庭訓を受けて書を讀むことを知る。時に其藩に曹子漢といふ者あり。伊・物の說を悅ぶ。常山之に兄事し、勉學倦まず。年二十四、江戸に來る。是時贄を南郭に取り、專ら古文辭を修む。幾もなく鄉に還る。後八年復江戸に來り、春臺及び蘭臺・觀海の諸名人と交を結び、一時嘖嘖として輿稱ありと云ふ。

(一) 少年　(二) 家庭教育　(三) 八田藩。字は子眞、備前の人　(四) 伊藤仁齋・物徂徠等の說　(五) 東語を納む、入門す　(六) 太宰春臺　(七) 井上蘭臺　(八) 口々にはやる　(九) 一般の好評

寬延庚午。奉二侯命一。赴二讚之丸龜一。海上風濤驟起。舟將二覆沒一。衆皆無二生色一。常山神色自若。朗吟曰。南溟奉レ使。使臣槎。直破長風萬里波。忽値怒濤似二奔馬一。起提二雄劍一。叱二龍鼉一。其豪氣如レ此。

常山爲レ人方正特立。忘レ身徇レ國。數歷二要職一。其所レ爲賑レ貧救レ窮詰レ慝舉レ滯。或使二訟者自恥無レ言。或發二契券一。以賑レ窮。或使二訟者自恥無レ言。或發二契券一。以

寬延、庚午、侯命を奉じて讚の丸龜に赴く。海上風濤驟かに起り、舟將に覆沒せんとす。衆皆生色なし。常山神色自若、朗吟して曰く、南溟使を奉ず使臣の槎、直に破る長風萬里の波、忽ち値ふ怒濤奔馬に似たるに、起つて雄劍を提げて龍鼉を叱すと。其豪氣此の如し。

(一) 三年　(二) 讚岐　(三) 生きたる顏色　(四) 顏色少しも變らずおちつき拂つて　(五) 暗の海　(六) 大すつぽんやわに、海の怪物なり

常山人となり方正特立、身を忘れて國に徇ふ。數〻要職を歷、其の爲す所貧を賑し窮を救ひ慝を詰り滯を舉ぐ。或は訟者をして自ら恥ぢて言無からしむ。或は契券を焚き以て衆人を庇覆す。然れども危言刺譏避くる所無く、終に乃ち貶黜せらる。是より門を杜ぎ客を謝し、著書自ら娛む。松崎子允に答ふる書に曰く、禎や豈に敢へて靡鴟を砥厲し、名聲を鼓簧せんや。亦唯公事に非らざれ

庇二衆人一。然危言刺譏無レ所レ避。終乃被二駁黜一。從レ是杜レ門謝レ客。著書自娛。答二松崎子允一書曰。禎也豈敢砥二厲廉隅一。鼓二賛名辭一乎。亦唯非二公事一。未三嘗至二於權貴之門一。十有七年一日。其所二自信一是已。又復二覲海一書曰。禎也行行之性。狂愚悖直。不レ識二機微一。危言無レ所レ忌。亦且抑レ强植レ弱。當路所レ惡。以二此數事一。當二衆口鑠レ金之日一。其及也宜矣。幸賴二寡君仁恕一。特從二末減一。使二明善襲レ祿。補二黑衣之缺一。執二人臣之事一。君恩不レ可レ不知也。

ば、未だ嘗て權貴の門に至らず。十有七年一日、其の自ら信ずる所是れのみと。又覲海に復する書に曰く、禎や行行の性、狂愚悖直、機微を識らず、危言忌む所無し。亦且つ强を抑へ弱を植つ。當路の惡む所、此數事を以て、衆口金を鑠すの日に當る。其の及ぶや宜なり。幸に寡君の仁恕に賴り、特に末減に從ひ、明善をして祿を襲はしめ、黑衣の缺を補ひ、人臣の事を執る。君恩知らざる可からざるなりと。

一 毅然として立つ　二 一身を忘れて國事に從ふ　三 ごまかしかくせるを詰問し租稅の未納なるをなやましむ　四 危言は正言高議、判議はそしる　五 役をおとししりぞく　六 廉直の節をみがき立つ　七 名譽評判を世に吹き立てる　八 剛直なる性質　九 ばか正直　十 人情の微密なる所を知らず　十一 多人數の衆言に通ふ　十二 當路のにくしみがかゝるもの　十三 權前僕のあ慈悲　十四 罪科減ず　十五 黑衣は賤衣、故に侍衛の士を斥す

常山恒好武。其文集紀古名將事者極多。著二常山紀談一。亦索二戰國死レ職伏レ節。忠臣勇者之迹一。或考二厥異傳雜說一。此皆出二于好レ武之心一也。每戒二子弟一曰。苟爲二武士一者。寧廢二文事一。勿レ廢二武事一。

常山、大府の代官野口直方（小字は辰之助）と友として善し。直方嘗て備中倉敷に住す。其の去つて江戸に赴くに及ぶや、侯、常山をして之を郊外に送らしむ。常山男子誠を携へて送り、謂ひて曰く、元禎今日君を送らんと欲し、公事有りて果さず。故に兒をして代らしむと。直方曰く、異なるかな言や。先生已に辱なくも自ら臨まると。常山曰く、今日君を送るは、寡君の命ずる所、私送に非ざるなり。余則ち兒をして代り送らしむるのみと。

常山恒に武を好む。其文集に古名將の事を紀する者極めて多し。常山紀談を著し、亦戰國の義に死し節に伏せし忠臣勇者の迹を索め、或は異傳雜說を考覈す。此れ皆武を好むの心に出づるなり。每に子弟を戒めて曰く、苟も武士たる者、寧ろ文事を廢するも、武事を廢するなかれと。

一 異なる言ひ傳へ、色々の說を折衷ししらべる

誠二而送。謂曰。元禎今日欲レ送レ君。有二公事一不レ果。故使二兒代一焉。直方曰。異哉言也。先生已辱自臨。常山曰。今日送レ君者。寡君所レ命。非二私送一也。余則使二兒代一送耳。

井四明撰二行狀一曰。先生壯歲喪レ父。哀毀過レ禮。衰以爲レ觀。三年不レ脫。每旦往拜二其墓一。慟哭而歸。二十五月而止。喪レ母亦若レ斯。値二其忌日一。必薦二所レ嗜者一。告以二生日之語一。哭泣失聲而已。

❶ 幕府　❷ 交情親密　❸ 町外れに見送る　❹ 不思議なる言葉　❺ 自分自らの見送りに非ず

❶ 井上潛、字は仲龍、四明を號す、岡山の儒官　❷ 悲み痛むこと禮以上なり　❸ 喪服を以て稱辭となす　❹ 生前の時の言　❺ 聲をあげて泣き口きけず

瀧長愷

井四明、行狀を撰びて曰く、先生壯歲父を喪ひ、哀毀禮に過ぐ。衰以て觀と爲し、三年脫せず。每旦往いて其墓を拜し、慟哭して歸る。二十五月にして止む。母を喪ふも亦斯の如し。其忌日に値へば、必ず嗜む所の者を薦め、告ぐるに生日の語を以てし、哭泣失聲するのみ。

瀧長愷。字彌八。號二鶴臺一。長門人。仕二本府一。鶴臺本姓引頭氏。爲レ後二於瀧一。遂蒙二其姓一。自レ幼英邁好レ學。其居レ鄉。從二周南一承二徂徠之說一。後來二江戸一。時徂徠沒已三年。乃遊二南郭門一。南郭異二其才一。不三覩以二弟子一。既而去到レ京。又之二長崎一。莫二所レ往而不レ重二其才學一。再來二江戸一。則名聲奉二君命一歸レ鄉。接二伴之一。韓使嘆二其學該博有力一云。

瀧長愷、字は彌八、鶴臺と號す。長門の人。本府に仕ふ。

鶴臺、本姓は引頭氏、瀧に後たり、遂に其姓を蒙る。幼より英邁學を好む。其の鄉に居るや、周南に從つて徂徠の說を承く。後江戸に來る。時に徂徠沒して已に三年なり。乃ち南郭の門に遊ぶ。南郭其才を異とし、視るに弟子を以てせず。既にして去つて京に到る。又長崎に之く。往く所として其才學を重んぜざるはなし。再び江戸に來る。則ち名聲大に起り、從遊甚だ多し。寶曆癸未、韓使來聘す。是に於て君命を奉じて鄉に歸り之に接伴す。韓使其の學の該博有力なるを嘆ずと云ふ。

❶ 山縣周南　❷ 從ひ學ぶ者　❸ 十三年　❹ 應接す　❺ 廣くして力有り

紀平洲小語曰。長門瀧長愷彌八。在鄉飲二于一權貴一。酒酣問曰。凡爲治和漢孰難易。彌八曰。漢難和易。曰何也。曰彼使不學之人居中政職。則必恥受其制。我雖不學之人爾居政職。而下亦不恥受其制。所以彼難我易也。合坐失色。其人以告君。君曰。諷刺公等。唯是此老。又曰。彌八豪邁不能屈物。然與二聞善言美行一。淚必交睫。

紀平洲の小語に曰く、長門の瀧長愷彌八。鄉にありて一權貴に飲む。酒酣にして問うて曰く、凡そ治を爲す、和漢孰か難易なる、と。彌八曰く、漢難く和易し、と。曰く何ぞや、と。曰く彼は不學の人をして政職に居らしむるときは、則ち必ず其制を受くるを恥づ。我は不學の人爾く政職に居ると雖も、而も下亦其制を受くるを恥ぢず。彼難く我易き所以なり、と。合坐色を失ふ。其人以て君に告ぐ。君曰く、公等を諷刺するは、唯だ是れ此老のみ、と。又曰く、彌八豪邁にして物に屈することを能はず。然れども善言美行を與り聞くときは、涙必ず睫に交る、と。

❶ 細井平洲 ❷ 貴人 ❸ 命令を受くるを恥とす ❹ 一座のくの顏色を變ず ❺ 暗にそしり諫む ❻ 善い言葉りつぱな行爲を人より聞く時は涙がまつげににじみ出る

鶴臺旁博釋氏書。殆極二其說一。行狀曰。最精二佛學一。其在二海北一。傾二佛藏一。究二其旨一。蕩宿僧無睡。無學類。皆極推服。其他編徒不レ得二其說一。則有二就而質焉者一。又無睡禪師雜華集載。謝二瀧彌八來訪一詩引曰。瀧生實天下奇才也。無論其深達儒術一。言語炙輠。傍精二吾佛學一。以故

鶴臺旁ら博く釋氏の書を窺ひ、殆ど其說を極む。行狀に曰く、最も佛學に精し。其の海北に在るや、佛藏を傾けて其旨を究む。蕩の宿僧無睡。無學の輩、皆推服を極む。其他編徒其說を得ざれば、則ち就いて質す者有り。又無隱禪師の雜華集に載す、瀧彌八の來訪を謝する詩の引に曰く、瀧生は實に天下の奇才なり。其の深く儒術に達し言語炙輠たるは無論、傍ら吾が佛學に精し。故を以て余と方外寡二の交を爲すこと、平生の贈答に見る可し。而して事尤も此集の序文に詳なり。爰に偶〻其來訪を辱うす。別に臨み此詩を賦し以て謝し、兼て和子亭に寄す。詩に曰く、運日青山黃鳥啼く、歡に堪へたり陶令が幽棲を訪ふを、城中運若し相問はば、爲に道へ君を送つて虎溪を過ぐと。

❶ 長門 ❷ 議論のあるかぎり教旨を研究す ❸ 僧侶 ❹ 輠は車の油を注入する所にして、之をあぶれば油出でて止まず、轉じて辯說水の流るゝが如く少しもとどみなきをいふ ❺ 佛徒以外の二輩き友 ❻ 春のなが日 ❼ うぐひす ❽ 陶淵明なり、以前に彭澤の令たりしよりいふ ❾ 世俗をのがれたる幽閑なる住居 ❿ 昔の蘇法師廬山に居ること三十餘年、客を送るに未だ嘗て虎溪を過ぎた謝靈運をいふ、以て和子亭に準ふ

與レ余爲二方外寡二之交一者。可レ見二平生贈答一。而寧尤詳二於此集序文一。爰偶尋其來訪一。臨レ別賦二此詩一以謝。兼寄二和子尊一。詩曰。運日青山黄鳥啼。堪レ歆陶令訪二蹤棲一。城中遂若相問。爲道送レ君過二虎溪一。

ることなし、一日陶淵明、陸修靜の二人之を訪ふ、三人與に語るに其道よく合す、惠遠乃ち興に乘じ二人を送つて思はず虎溪を過ぎ、三人顧見あはせて大笑せりといふ、此詩は即ち蹤蹟を陶令に比し、無隱自らを惠遠に比し、互に其心の合せるを叙べるなり

雜華集又載。瀧生能レ書。其嗜二羲之筆法一者。與レ余同癖。因爲二此詩一。相嘉尚。詩曰。相逢文雅友。把レ臂意何親。逸少墨池月。千里照二兩人一。鶴臺南塘先生一書曰。本邦之書。自下徐國王以二賦媚脆一而成中一家上。後世書家無下不レ被二其毒一者上也。王レ畫亦然。自下狩野氏以二浮靡輕佻一投二世俗之好一。擅中譽當時上。吠レ聲逐レ臭之徒。靡然嚮レ風。觀レ此鶴臺於二書畫一亦可レ謂有レ識矣。春臺嘗稱爲二西海第一之才子一。非二虛聲讚揚一也。

又兼て軒岐の術を好み、山脇玄飛・香川太冲・吉益周助輩と交る。所謂古醫方を喜び、宋・明後の說を屑とせず。其七劑屢〻效有りと云ふ。奈大夏に與ふる書に曰く、不佞斯にあり。詩を乞ひ、書を乞ひ、講を乞ひ、邀へ飲む者を論ずるなく、診を乞ふ者も亦履恒に戶に盈つ。其煩に勝へざるも、而も亦以て間曠を消すに足れりと。又は秦貞父に與ふる書に曰く、不佞近狀聞す可き者無し。醫事頗る劇しく、其煩に堪へず。然りと雖も、夫の世醫の利に趨り其術を攻めず、巧言拙を飾り、人を非命に斃すの不仁甚しきを疾む。是を以て眄勉

(一) 王羲之　(二) はめ寄せ　(三) 手をとりあつて歌ふ　(四) 王羲之　(五) 書聖法觀王、伏見天皇の第六子、天台座主、青蓮院宮門主、御家流の一派を開く　(六) 女々しく弱々し　(七) 多くの犬が一犬の聲に吠え立て、臭が臭を逐ふ如く、多くの俗人が其あとに從ふ　(八) 一聲に　(九) 世俗の賞讚

(一) 雜華集　(二) 嘉尚す。詩に曰く、相逢ふ文雅の友、臂を把て意何ぞ親し　(三) 逸少墨池の月、千里兩人を照す、と。鶴臺南塘先生に與ふる書に曰く、本邦の書、曾圓王が賦媚脆弱を以て一家を成しより、後世の書家其毒を被らざる者無きなり。畫に至つても亦然り。狩野氏が浮靡輕佻を以て世俗の好に投じ、譽を當時に擅にせしより、聲に吠え臭を逐ふの徒、靡然として風に嚮ふ、と。此を觀れば鶴臺書畫に於ても亦識有りと謂ふ可し。春臺嘗て稱して西海第一の才子と爲すこと、虛聲の讚揚に非ざるなり。

(四) 王羲之　(五) 書聖法觀王、伏見天皇の第六子、天台座主、青蓮院宮門主、御家流の一派を開く　(六) 女々しく弱々し　(七) 多くの犬が一犬の聲に吠え立て、臭が臭を逐ふ如く、多くの俗人が其あとに從ふ　(八) 一聲に　(九) 世俗の賞讚

(一) 醫方を喜び　(二) 宋・明後の說を屑とせず　(三) 不佞斯にあり　(四) 醫事頗る劇しく、其煩に堪へず　(五) 世醫の利に趨り其術を攻めず　(六) 人を非命に斃す　(七) 巧言拙を飾り　(八) 人を非命に斃すの不仁甚しきを疾む　(九) 是を以て眄勉

者。乞診者亦覆恢盈戶。不勝其煩。而亦足以消閒憤也。又與秦貞父書曰。不佞近狀無可聞者。醫事頗劇。不堪其煩。然。爽夫世醫趨利不攻其術。巧言飾拙。魔人於非命。不仁甚矣。是以黽勉從事。亦唯乘輿濟人之類。祇足以取誹笑也。

事に從ふ。亦唯、乘輿人を濟すの類、祇に以て誹笑を取るに足ると。

❶ 醫術 ❷ 點加減、調節 ❸ やつかれ ❹ 多くして常に絕えず ❺ ひまをつぶす ❻ 秦守節、字は貞夫、長州の人、周防門 ❼ 心耳に入れること能はし ❽ 世上の俗醫 ❾ 非業の死をとげさす ❿ つとめはげむ ⓫ 藥の大夫子高貴職にありながら、醫を以て人を濟す。經本を忘れて末節の仁を事とする意

宇惠。字子廸。小字惠助。號濡水。本姓宇佐美。修爲宇。南總人。仕出雲侯。

宇惠、字は子廸、小字は惠助、濡水と號す。本姓は宇佐美、修して宇となす。南總の人。出雲侯に仕ふ。

濡水生于南總夷濡郡。郡有川。曰夷濡川。居近之。因號濡水。父習翁好學有志。濡水年十七。父命來江戶。師在其塾者僅三年。徂徠沒。未全得徂徠之旨。則留與社友相劇切。居六年。携板美中來住芝三島街。開門授徒。晚以儒顯仕出雲侯。與聞其政。有勞勳云。

濡水は南總夷濡郡に生る。郡に川有り、夷濡川といふ。居之に近し。因て濡水と號す。父習翁學を好み志有り。濡水年十七、父の命にて江戶に來り、徂徠に師事す。乃ち其塾にあること僅に三年にして、徂徠沒す。未だ全く徂徠の旨を得ず。則ち留つて社友と相劇切す。居ること六年、板美中を携へて鄉に歸る。即ち美中を以て食客と爲し、日に切劇を資け、久しうして學大に進む。再び江戶に來り、芝三島街に住し、門を開いて徒に授く。晚に儒を以て出雲侯に顯仕す。其政に與聞して勞勳有りといふ。

❶ 今の上總國夷隅郡 ❷ 互に學德をみがく ❸ 板倉美中 ❹ 參與す

濡水家世居南總。以豪富聞。熊耳濡水父一頌曰。翁本大姓系乎藤氏。先著北

濡水の家世〻南總に居り、豪富を以て聞ゆ。熊耳、濡水の父を壽する頌に曰く、翁の本の大姓は藤氏に系す。先は北越に著れ武功是以ふ。子孫綿綿宇佐美と稱す。中葉微なりと雖も祀を絕つに至らず。來つて爰に居りしより此に數世、農と賈とに服し、家富を以て起る。豪宗多しと雖も曾て共に比するなし。翁其業

越二武功是以。子孫綿綿得二宇佐美一中葉雖レ微不レ至レ絶レ祀。自二來爰居一數二世于此一服二農及レ賈。家以レ富起雖レ多二豪宗一曾莫二共比一。翁繼二其業一益以不貲。鳴レ鐘食レ鼎幾乎千指一聚斯數レ之亦唯是理。賑二及鄰鄰一多恃湘錡。上下略

濃水篤信二徂徠一。舉レ力校二刻其遺著一。雖二高足弟子一。所レ不レ及也。如二四家雋。古文矩。文變考。絶句解。絶句解拾遺。南留別志。校刻皆變考。絶句解。

を繼いで益々以て不貲、(八)鐘を鳴し鼎に食するもの千指に幾し。聚れば斯に之を散ずる亦唯だ是理のみ。鄰鄰を賑及し多く恃んで湘錡す。(一〇)（上下を略す。）

一 大内熊耳　二 祝解　三 藍原氏　四 遺業して絶えざるさま　五 衆亡びて先祖の祭を絶つ　六 農業と商　七 豪家　八 財産が豊か　九 合鬲の鐘を鳴らして食事するもの千人ばかり　一〇 祖先の祭祀をなすとなり、詩の召南采蘋篇にとゝに以て之を湘(に)る維れ錡及び釜にとあり。則ち蘋を摘み、錡即ちあしがま(にて煮て祖先に供ふるをいふ

濃水、壯重嚴毅、師道卓然たり。列侯の教を請ふ者有れば、則ち先づ己を待つの儀を書し、之を致して後往く。井金峨の匡正錄に曰く、近世の諸老、諸侯の招に應ずるや、豫め之が禮待を期し、苟も是の如くならざれば則ち我れ敢へて見ずといふ者有り。夫れ見ざれば則ち已む、唯だ見て禮至らざれば、亦以て之を去る可きのみ。惡ぞ先づ之が極を爲して後往く者有らんやと。金峨の此言は義に於て乖くと爲さざるなり。然りと雖も、世の道を學んで苟合容れられんことを取る者、濃水に觀ば慚無かる可けんや。

一 もの〳〵しく嚴重　二 自己の待遇法を書き上げる　三 井上金峨　四 法を定め置きて往く　五 人の宜を迎へて論の一致をはかること

濟水、經義を以て任と爲し、頗る春臺の風有り。熊耳の長技文章にあつて、殆ど南郭を追ふ。而も交り相善し。熊耳謂つて久要兄弟の誼有りと爲す。

㊀ 經書の義を明らむるを任務とす　㊁ 長所は文章にあり　㊂ 久しき要約

濟水に一男有り。多病家學に堪へざるを以ての故に、片山兼山を養つて子と爲す。兼山、徂徠の說を喜ばず。是を以て終に歎を承くるを得ずして出づ。是に於て姪の德修字は子業を以て後と爲す。

㊀ 養父の意に叛はず

武欽繇、字は聖謨、梅龍と號す。初名は維嶽、字は峻卿、中ごろ名は亮、字は士明、文靖と私謚す。美濃の人。

梅龍、本姓は武田氏、其先三河篠田村に處る。故に世世篠田を以て氏と爲す。梅龍初め襲いで之を稱す。明霞遺稿中篠士明と稱する者は是れなり。後本に復すと雖も、亦田を省いて單姓と爲す。少年のとき伊藤東涯を師とす。東涯爲に維岳字は峻卿の說を作り以て之を勵む。而るに年二十一、東涯下世す。乃ち祭文有り。是に於て宇士新に從ふ。居ること十年にして士新も亦世を異にす。乃ち哭詩有り。此時學既に大成す。終に召されて妙法院親王の侍讀と爲る。

㊀ 死す　㊁ 宇野士新　㊂ 死す

名維嶽。字峻卿。中名亮。字士明。私謚文靖。美濃人。

梅龍本姓武田氏。其先處三河篠田村。故世世以篠田爲氏。梅龍初襲稱之。明霞遺稿中稱篠士明者是也。後雖復本。亦省田爲單姓。少年師伊藤東涯。東涯爲作維岳字峻卿說以勵之。而年二十一。東涯下世。乃有祭文。於是從宇士新。居十年士新亦異世。乃有哭詩。此時學既大成。終召爲妙法院親王侍讀。

梅龍非特通經

梅龍特に經文に通ずるのみにあらず、兼ねて武事に名有り。其の昔を憶ふ歌にい

藝文。號名二于武事一。其憶レ昔歌。東山年少抱二雄圖一。學レ弓走レ馬讀二孫吳一。腰間龍劍金轆轤。睥二睨青雲一。常鳥呼。翻然折レ節改二前途一。自見當年君子儒。又宇士新有二贈詩一云。閉レ關憐二我久一。說レ劍愛二君深一。又墓碣記云。少時習二武技一。講二明孫吳之書一。居常曰。絳灌無レ文。隨陸無レ武。不レ可レ稱二全士一也。

赤松國鸞出二於門一。其學亦一時領袖。而甚重二梅龍一。書曰。鴻少時游二平安一。從二宇先生一。歲餘。藩命有レ限。求レ歸レ請レ益而歸。無レ何先生逝矣。乃棲數歲。以二藩命一之二東武一。道過二平安一。即訪二林生一。相與謁二先生墓一。感泣不レ能レ已也。林生乃謂不佞。子何不下一見二武兄一而定中交也。其人才學富贍。且奉二宇先生數一有レ年矣。鴻不佞遂介二林生一見二足下一焉。則不二唯典刑之存一。其言之似二夫子一。使二人感喜交併一矣。

ふ、東山の年少雄圖を抱き、弓を學び馬を走らせて孫吳を讀む。腰間の龍劍金轆轤、青雲を睥睨して常に烏呼す。翻然節を折つて前途を改む。自ら見る當年君子の儒と。又宇士新贈詩有り云ふ、關を閉ぢて我が久しきを憐み、劍を說いて君が深きを愛すと。又墓碣の記に云ふ、少時武技を習ひ、孫吳の書を講明す。居常曰く、絳灌文無く、隨陸武無し。全士と稱す可からざるなり。と。

(一) 美濃の出なればいふ　(二) 大志　(三) 孫子と吳子と、兵書なり　(四) 比らみつく　(五) 心をかゝ志を曲げて未來の方針を改む　(六) 漢の絳侯周勃と灌嬰なり、共に高祖の功臣、武あつて文なし　(七) 漢の蕭何と陸賈共に高祖に仕へ、辯口あり　(八) 完全なる人物

赤松國鸞、同門に出でて其學亦一時に領袖たり。而して甚だ梅龍を重んず。其の梅龍に與ふる書に曰く、鴻、少時平安に游び、宇先生に從ふこと歲餘。藩命限り、未だ益を請ふことを盡さずして歸る。何もなく先生逝く。乃ち後數歲、藩命を以て東武に之く。道平安を過る。卽ち林生を訪ひ、相與に先生の墓に謁し、感泣已む能はず。林生乃ち不佞に謂ふ、子何ぞ一たび武兄を見て交を定めざるや。其人才學富贍、且つ宇先生の敎を奉じて年有りと。鴻不佞遂に林生を介して足下を見る。則ち唯典刑の存するのみならず、其言の夫子に似たる、人をして感喜交併せしむと。

(一) 領分　(二) 江戸　(三) 京都　(四) 武田梅龍　(五) 才すぐれ學問ゆたか　(六) 宇野士新の學の典刑が梅龍に存す　(七) 言も亦士新先生に似る　(八) 感しみと喜びと一所に起る

家祖原瑜

家祖原瑜。字公瑤。小字三右衛門。號二尙菴一。平安人。仕二唐津侯一。侯後移二古河一。瑜之父曰二光茂一。小字三右衛門。甲斐武田機山公之將原虎胤。美濃守。六世之孫也。住二平安一不レ仕。娶二原芸菴女一。芸菴原名子赤。賜二平安一。其子赤。賜二芸菴一。居二江戸一。共以享保三年十月十三日生レ瑜。

家祖原瑜、字は公瑤、小字は三右衛門、雙桂と號す。又尙菴と號す。平安の人。唐津侯（侯後に古河に移封せらる）に仕ふ。

祖の父を光茂といふ。小字は三右衛門、甲斐武田機山公の將原虎胤（美濃守）六世の孫なり。平安に住して仕へず。原芸菴（芸菴平安に居る。其子、赤芸菴を襲稱して江戸に居る。共に醫を以て名有り）の女を娶り、享保三年十月十三日を以て祖を生む。祖生れて凝儁(一)絜兒に異なり。十歲にして章句を伊藤東涯に受く。漸く長ずるや學を嗜むこと飢渴せるが如く、口誦手錄して、晝夜廢せず。父母內に之を奇として、其の或は疾を得んことを過慮す。謂つて曰く、雖(二)を下して發憤するは成人のことなり。兒は今童年、惟學に間斷無ければ可なりと。祖曰く、蚤に起きて文字を尋思すれば、心下豁爽を覺ゆ。稍晏すれば則ち頭擧擧として心裏甚だ安からずと。人或は曰く、其先美濃守曉勇を以て著る。此子

異二於羣兒一。十歲受二章句一。伊藤東涯。漸長嗜レ學如二飢渴一。日誦手錄。晝夜不レ廢。父母內奇レ之。而過二慮其或得レ疾。謂曰。下レ雖發憤成人之事。兒今童年。惟學無二間斷一可也。祖曰。蚤起尋二思文字一。覺二心下豁爽一。稍晏則頭擧擧心裏不二甚安一。人或曰。其先美濃守曉勇著。此子他日亦有下以二文事一大過人。

他日亦文事を以て大に人に過ぐる有らんと。

● 武田信玄の號　● 生れながらにして才すぐる　(一) 書籍　(二) 口に誦ぬ手に書きうつす　● 星ひ過ず　● 賢爽の雖を垂れこめて苦學するは 大人のこと　(三) 頭の中すきてさつぱりとする　● 明察　(四) 頭のやめる說　(五) 武勇を以て世に名高し

年十四喪レ父。哀毀過レ禮。服闋之大坂。既而來二江戸一。依二舅氏原芸菴一。與二青厚甫高子式呂玄丈輩一。往還論レ文。居三歲。念レ母不レ已。乃赴二大坂一。母尋病沒。治レ喪茹レ痛。遂復歸レ京。

年十四、父を喪ひ、哀毀禮(一)に過ぐ。服闋つて大坂に之く。既にして江戸に來り、舅氏原芸菴に依り、青厚甫(二)高子式呂玄丈輩と、往還して文を論ず。居ること三歲、母を念うて已まず。乃ち大坂に赴く。母尋いで病沒す。喪を治め痛を茹ひ、遂に復京に歸る。

(一) 鬱み痛むこと禮に過ぐ　(二) 青木敦、字は厚甫。後醫、字子式　(三) 茹痛舍辛の語あり、蓋し痛嚥するをいふ

祖兼ねて醫を善くす。其の京に居るや、遠近來つて治を請ふ者、屨恒に戸外に滿つ。時に土井侯良醫を召す。祖(一)幡然聘に應じて起つ。山脇東洋來つて謂つて曰く、請ふ辟に就くことなかれ。君は學富み量深し。它日必ず當に三顧の人に遇ひ、以て其用を竟ふべし。醫術の如き、他人に於ては稱す可きも、君に於ては乃ち末技のみ。末技を以て僻遠の藩に屈仕す。甚だ之を惜むと。祖曰く、於乎子の言ふ所の如き者、宇宙幾かある。吾れ烏ぞ敢へて之に當らん。且つ已に其召に應ず。義辭す可からざるなりと。遂に唐津に適く。十八年を閱し京に歸遊す。途東洋に遇ふ。東洋祖の手に握り、嘆じて曰く、平平たる庸器をして皆貴顯に列し、而も海内の名士をして僻遠に屏處せしむ。信に命有るかなと。

(一) 欣然に同じ、心をひるがへして　(二) 學問かしこくして數量すぐる　(三) 獨逸の訳語自ら孔明を博陽の草廬に三顧す、其故事により値遇の人をいふ　(四) 末のわざにして本技に非ず　(五) 片田舎　(六) 官界　(七) 平凡の人物　(八) 片田舎に籠り居る　(九) まことに天命なり

有ル歳哉。吾烏敢當ル之。且已應ニ其召一。義不ル可ル辭也。遂適ニ唐津一。閲二十八年一歸遊于京。途遇ニ東洋一。東洋握ニ祖手一。嘆曰。使ル平平庸器皆列ニ貴顯一。而海内名士屏ニ處僻遠一。信有ル命哉。

在ニ唐津一日。掘ル地遇ニ髑髏一。其夕月明見ニ窗紙有ニ女子影一。出視則無。家人大怖。祖讀書自如。頃笑謂ニ先子一。時年十二三。曰。是狐狸之所ル爲。見將ル弓射ル之。於是女影自滅。

嘗遊ニ芳野一。賞ニ櫻花一。耽戀三日不ル能ル去。遂折ニ一枝一携去。後制爲ル杖。終身手ル之。其所ニ

唐津に在りし日、地を掘つて髑髏に遇ふ。其夕月明窗紙に女子の影有るを見る。出でて視れば則ち無し。家人大に怖る。祖、讀書自如たり。頃あつて笑つて先子(時に年十二三)に謂ふ。曰く、是れ狐狸の爲す所。兒弓を將つて之を射よと。是に於て女の影自ら滅す。

(一) 窗の障子　(二) 常とかはらず

嘗て芳野に遊び櫻花を賞す。耽戀三日去ること能はず。遂に一枝を折つて携へ去る。後制して杖と爲し、終身之を手にす。其の常に帶ぶる所の二劍の柄飾、金を以て櫻花を彫畫す。亦其の忘るゝこと能はざるを表すなり。

(一) 深くめで賞すること三日間　(二) 柄の飾

常帶二劒柄飾。以レ金彫二畫櫻花一。亦表二其不レ能レ忘也。

家畜二馬一。一名二蓬萊一。一名二瑤池一。蓬萊仙臺產。駿駒異レ常。初某侯出二重價一求購。而蹄嚙不レ可レ近。遂棄レ之。於レ是厄二予鹽車一。又奪二其飼秣一。駒閉レ之曰。惜哉不レ展二其能一。而暴戾自縱。此御レ之者。愚由レ不レ得二其術一耳。因復買二之數金一。乃使二一食盡二一石粟一。則家に二馬を畜ふ。一は蓬萊と名づけ、一は瑤池と名づく。蓬萊は仙臺の產にして、駿駒(一)常に異なり。初め某侯重價を出して求購す。而して蹄嚙(二)近づく可からず。遂に之を棄ぐ。是に於て鹽車(三)に厄められ、又其飼秣を奪はる。駒之を聞いて曰く、惜いかな其能を展べずして、暴戾(四)自ら縱にする、此れ之を御する者、惟其術を得ざるに由るのみと。因つて復之を數金に買ひ、乃ち一食に一石の粟を盡さしむ。則ち雄姿龍の如し。然るに其亂氣(五)亦初の如く、諸〻の騎を善くする者、各〻其術を施して御するを得ず。祖(六)、獨り其駿を捉り、躍つて之に上れば、則ち鞭筴(七)の威を假らずして、能く其訓に安んず。進退周旋、意の如くならざるは無し。詩有り云ふ、驕氣龍鍾(八)たり村客の家、三年虞坂鹽車に苦む。一朝忽ち英雄(九)の駕を獲、飛電(一〇)風生して白沙を捲くと。

(一) 駿は馬のすぐれたるもの。(二) 蹄は馬のすぐれたるもの。(三) 鹽車とせられて勞役に苦しむをいふ、次に出でたる虞坂鹽車の故事に取りたる語。(四) かひば。(五) 荒れ狂ひてやまず。(六) 荒々しき氣象。(七) むちを以てむどさずとも命令通り。(八) 猛しき氣象疑へて村人の家に飼はる。(九) 戰國策に、昔騏驥鹽車を負して虞阪を上る、遇伯樂を負うて遊む能はず云々、その故事に取りて駑馬扱をされしをいふ。(一〇) 英雄に乘ちるゝことを得。(一一) 馬の飛ぶこと速かなる形容。

雄姿如レ龍。然其駿氣亦如レ初。諸善レ騎者。各施二其術一而不レ得レ御。祖獨捉二其駿一。躍而上レ之。則不レ假二鞭筴之威一。能安二其訓一。進退周旋。無レ不レ如レ意。有レ詩云。驕氣龍鍾村客家。三年虞坂苦二鹽車一。一朝忽獲二英雄駕一。飛電風生捲二白沙一。

祖、奮然道を究め經を治むるを以て志と爲し、漢儒以來の諸說に於て、窺はざる所無し。久しうして以爲へらく、咸聖人の旨を得ずと。遂に自己の見を立て、論孟を以て根據と爲し、細かに道德(一)性命を講ず。嘗て一書を著し、名づけて洙泗微響と曰ふ。謂へらく、是れ以て百世聖人を俟つて惑はざるに庶幾かる可しと。其大意、增彥敬に復する書中に詳かにす。書既に雙桂集に載す。玆に復贅せず。夫れ漢唐訓詁(二)の學は、道に於て得る所無し。宋に至り其所說大に變じて、大に行はる。然れども亦聖人の旨に非ず。此邦元寬(三)以來、學者亦皆宋儒

洙泗微響。謂是可以庶幾百世俟聖人而不惑矣。其大意詳于復齋書中。書既載雙桂集。故不復贅。夫漢唐訓詁之學。於道無所得。至宋其所說大變。而大行。然亦非聖人之旨。此邦元寛以來。學者亦皆從宋儒。及伊藤仁齋始排之。物徂徠亦成一家言。與海內士別建族鼓而馳。然其說去聖人之學者益遠矣。當祖之時。學者非朱即物。非物即藤。於是慨然作非朱詰物疑藤三種。與洙泗微響併以鐫梓。而天早夭年。使大業不終。可深惜哉。

祖曰。宋儒聖學演義也。陳志云。王允潛結董卓將呂布。使爲內應。又云。董卓使呂布守中閤。而布私與侍婢通。布不自安。遂刺殺卓。而演義添之。以貂蟬連環計。猶宋儒以易有窮理二字。添許多格物致知說。形氣章。添許多體用理氣。樂記天理人欲。添許多本然氣質。畢竟聖人未嘗言之。此宋學不猶演義三國志乎。

又曰。宋儒精體粗。用物氏知用不知體。均之其失一耳。雖然寧爲宋儒不爲物氏。

に從ふ。伊藤仁齋に及び始めて之を排す。物徂徠亦一家の言を成し、海內の士と別に旗鼓を建てて馳す。然れども其說聖人の學を去ること益〻遠し。祖の時に當つて、學者朱に非ざれば卽ち物、物に非ざれば卽ち藤なり。是に於て慨然として非朱・詰物・疑藤の三種を作り、洙泗微響と將に併せて以て梓に鐫まんとす。而るに天早く年を奪ひ、大業をして終へざらしむ。深く惜むべきかな。

祖曰く、宋儒は聖學の演義なり。陳志に云ふ、王允潛に卓の將呂布に結び、內應を爲さしむと。又云ふ、董卓、呂布をして中閤を守らしむ。而るに布私に侍婢と情通す。布自ら安んぜず、遂に卓を刺殺すと。而して演義之に添ふるに、紹蟬連環の計を以てす。猶ほ宋儒が易に窮理の二字あるを以て、許多の格物致知の說を添へ、形氣の章には、許多の體用理氣を添へ、樂記の天理人欲には、許多の本然の氣質を添ふるがごとし。畢竟聖人の未だ嘗て言はざるの說を以て之を敷衍す。此れ宋學は猶は演義三國志のごとくならずやと。

又曰く、宋儒は體に精しうして用に粗なり。物氏は用を知つて體を知らず。之を均るに其失は一のみ。然りと雖も寧ろ宋儒たるも物氏たらざれ。

(一) 道德と人の性　(二) 再び遠ざず　(三) 字句の解釋　(四) 元和寛文以來　(五) 別に一家の說を立つ

(六) 陳壽の三國志　(七) 董卓　(八) 吳歷歌　(九) 演義三國志　(十) 易經　(十一) 物にいたりて知をいたす　(十二) 體は本體、用は作用、理は形而上の道、物を生ずるの本、氣は形而下の器、物を生ずるの具　(十三) 意味を說き敷ぐ

又曰。徂徠每謂。宋儒說佛氏所謂徧一切法界。若論佛異同。則徂徠說。豈非佛氏自捨身信他念佛衆生攝取不捨說轉化來乎。

又曰。徂徠學。猶演劇扮聖人也。服堯之服。行堯之行。是堯而已矣。此孟子有爲言之。而徂徠恆引徵其學。果不問其心與

又曰く、徂徠毎に謂ふ、宋儒の說は、佛氏の所謂徧一切法界なりと。若し佛の異同を論ぜば、則ち徂徠の說、豈に佛氏の捨身信他念佛衆生攝取不捨の說より轉化し來れるに非ざらんやと。

㊀ 眞理はあらゆる現象世界に充滿すといふ說　㊁ 自身を捨てて佛の功力を信じ佛陀を念ずれば佛陀は一切衆生をなをさめ取りて捨つることなし

又曰く、徂徠の學は、猶ほ演劇に聖人に扮するがごときなり。堯の服を服、堯の言を誦し、堯の行を行ふ。是れ堯のみと。此れ孟子爲にすること有つて之れを言ふ。而して徂徠恆に引いて其學を徵し、果して其心と德との何如を問はず。則ち大友眞鳥に類す。孰か之を拜して眞の天子とせん。（眞鳥衆を聚め僭號す。未だ幾くならずして天兵之を平ぐ。雙桂集卷六先儒を論ずる條を併せ見る可し）

㊀ 天子の稱をあかす。

藩中一士人。有二南條某者。從二稻葉迂齋一學。嘗視二祖復一增彥敬一書中。凡人之有レ生。仁義禮智。其他百德皆性之所レ具焉。雖二則所レ具焉也。猶是微矣之語。不レ領二其旨一。因二祖門人古館尙淳恩田大雅一問レ之。祖叩二兩端一竭レ之。而彼猶守二朱說一。問答反復數十條。古館恩田二子。筆二記其語一。名二聖學辨談錄一。亦足レ窺二吾家學大旨一。他日予將二刊布一。

德何如。則類二大友眞鳥一。孰拜レ之爲二眞天子一。（眞鳥衆聚僭號。未幾天兵平之。雙桂集卷六先儒論條併見）

藩中一士人南條某といふ者有り。稻葉迂齋に從つて學ぶ。嘗て祖が增彥敬に復する書中、凡そ人の生有る、仁義禮智、其他百德皆性の具する所、則ち具する所と雖も、猶ほ是れ微なり。との語を視て、其旨を領せず。祖の門人古館尙淳・恩田大雅に因つて之を問ふ。祖兩端を叩いて之を竭す。而も彼猶ほ朱說を守り、問答反復數十條に及ぶ。古館・恩田の二子、其語を筆記し、聖學辨談錄と名づく。亦吾が家學の大旨を窺ふに足る。他日予將に刊布せんとす。

㊀ 人性の中に具はれ　㊁ 意味を了解せず　㊂ 論語子罕篇の問、終始本末上下精粗、凡て正反兩面より說きつくすなり

年二十八にして京を去りしより、五十、來りて江戸に沒するに至るまで、唐津・古河

去レ京。至三五十來没二于江戸一。僻二居唐津古河一。中間合二十三年。是以交道不二甚廣一。則世未レ有二實知レ祖者一。尚且稱レ之者。伊藤原藏。謂下幼學二其門一時。爲二後進領袖一。伊藤才藏曰。幼而穎敏嗜レ學。早有二神童之稱一。及レ長博學能文。不二爲レ名動一。不二爲レ利謀一。青厚甫曰。有二良史之才一。芥彦章曰。海西東轍迹遍歴。蒙儒不レ等。世傑先覺民。又曰。其紀レ事方二之武事一。如三老將用レ兵縱騁不レ可レ羈。而自中二律度一。僧大潮曰。今士林操觚諸子。將二戸而祝レ之一。又曰。其途レ吾序。似レ讀二昭明文選一。賦一宏麗雄渾可レ誦也。先達有レ言。夫文則材取二諸文選一。余於二原文一亦云。服仲英初見。劇談半日。退而歎曰。雙桂先生之如レ此者。則文藝能事畢矣。

に僻居すること、中間合して二十三年。是を以て交道甚だ廣からず。則ち世未だ實に祖を知れる者あらず。尚ほ且つ之を稱する者、伊藤原藏は、幼にして其門に學べる時を謂つて、後進の領袖と爲す。伊藤才藏は曰く、幼にして穎敏學を嗜む。早に神童の稱あり。長ずるに及び博學能文、名の爲に動かず、利の爲めに謀らずと。青厚甫は曰く、良史の才ありと。芥彦章は曰く、海の西東轍迹遍る、蒙儒に等しうして大論を建て、古聖を考へて倫を謬らず、命世の傑先覺の民と。又曰く、其の事を紀する、之を武事に方ぶるに、老將の兵を用ふる縱騁羈すべからずして、而も自ら律度に中るが如しと。僧大潮は曰く、今士林操觚の諸子、將に戸して之を祝せんとすと。又曰く、其の吾を送る序、昭明の文選の諸賦を讀むに似たり。宏麗雄渾誦すべきなり。先達言へる有り、夫れ文は則ち材諸を文選に取ると。余原の文に於ても亦云はんと。服仲英初めて見、劇談半日、退いて歎じて曰く、雙桂先生の如きに至つては、則ち文藝の能事畢れりと。

(一) 交道　(二) 東海　(三) 後進の領袖　(四) 仕宦の始子爾解　(五) 才ずれてさとく學を好む　(六) 利益を得るために分別をめぐらさず　(七) 荷木歌、是陽と解　(八) 世に名ある傑士　(九) 嬉しいまゝに兵をかけめぐらし、殆ど導び得るべからずして、而も律度に中るが如し　(一〇) 崇弄して其置に倣ふ義、老子逍遥遊に出づ　(一一) 土人文士　(一二) 先覺、蓋し祖徠をさす　(一三) 文章社共の材料を文選より取る　(一四) 昭和元年　(一五) 漢論

祖の大舅芸菴、人と爲り廓達奇偉、良醫を以て一世に振ふ。毎に人に謂つて曰く、世吾が甥公瑞を稱して大儒と爲す。余以て腐儒と爲すと。古河の老小杉元卿、嘗つて江戸に至り、之を聞きて曰く、渠其族に阿る無きは則ち可なり。其の之を譏謗するに至ては、則ち見て以て詰問せざる可けんやと。明日芸菴至

(一) 祖の大舅芸菴　(二) 廓達奇偉　(三) 小杉元卿

る。元卿盛氣相詰つて曰く、余聞く吾子毎に腐儒を以て吾が師雙桂先生を呼ぶと。敢へて問ふ說有りや否やと。曰く、君未だ之れを知らざるか。夫れ古の大儒は必ず貧困陋閭を守る。然るに公瑳家資頗る富む。是れ余が目するに腐儒を以てする所以なりと。元卿掌を抵つて大笑す。蓋し其腐・富音近きを以てなり。

一 第一の伯父　二 もはまかにしてすぐる　三 家老　四 親族にへつらふ　五 勢氣を含んで賢め問ふ　六 足下　七 むさやるしき住居　八 家の貧富

祖年十五にして京を出で、十九にして歸る。是の歳東涯故す。此れ其提誨を受くる、實に幼時に屬す。後一家の說を爲す。伊藤氏と迥かに異なり。而も疑藤を作つて縱に之を辨ぜざるは、舊師に背くに忍びざればなり。

祖年十五出レ京。十九而歸。是歳東涯故。此受二其提誨一。實屬二幼時一。

後爲二一家說一。與二伊藤氏一迥異。而作二疑藤一不二縱辨一之者。不レ忍レ背二舊師一也。

一 死す　二 指導

祖好二音律一。在二古河一日。遊二日光樂師上松是雙者一。學レ笙。是雙者。學レ笙盡二其道一。祖所二常玩一之笙名二海棠一。蓋以二海棠一故名焉。先子善二横笛一。門人古館尙淳善二篳篥一。時合奏以爲レ娛。柴栗山。嘗自二京師一將レ往二佐野一。路過二古河一。携レ琴來謁。爲彈二一曲一。嘗屈二君侯一至二長崎一。侯過二客館一。乃使二祖接二

祖、音律を好む。古河に在りし日、日光の樂師上松是雙といふ者を邀へ、笙を學びて其道を盡す。祖の常に玩ぶ所の笙を海棠と名づく。蓋し畫くに海棠を以てするが故に名づく。先子横笛を善くし、門人古館尙淳篳篥を善くす。時々合奏以て娛を爲す。柴栗山、嘗て京師より將に佐野に往かんとし、路古河を過り、琴を携へ來り謁す。爲に一曲を彈ず。

一 音樂　二 笙に海棠の繪あり　三 原善の父　四 柴野栗山

嘗て君侯に屈して長崎に至る。侯客館に過る。乃ち祖をして清商に接せしむ。祖妙に象胥に通ず。或は詩餘を吟じ小曲を唱ふ。西人咸舌を咋む。侯大に喜

清商。祖妙通二象音。或吟二詩餘一唱二小曲。四人咸咋レ舌。侯大喜。侯又至二福濟寺一。寺主支那僧也。其所藏書畫數十品出示。侯亦使二祖鑒レ之。其工拙眞僞皆能辨別。或彼不レ能レ讀者。一覽輒讀レ之。侯亦大喜。歸藩之後賞二賚之一。

祖有二丈夫子三人一。長諱良胤。字朴伯。號二一菴一。幼穎敏。篤二志於家學一。而先レ祖七年卒。以二寶暦庚辰六月七日一。

ぶ。侯又福濟寺に至る。寺主は支那の僧なり。其所藏の書畫數十品を出し示す。侯亦祖をして之を鑒せしむ。其の工拙眞僞皆能く辨別す。或は彼の讀むこと能はざる者も、一覽輒ち之を讀む。侯亦大に喜ぶ。歸藩の後之を賞賚す。

一 ゐ伴 二 通譯 三 緒詞、一定の曲調あり、之によりて詞を作る歌曲 四 小歌 五 雲囀す 六 長崎の禪寺 七 區別せしむ 八 上手と下手、眞物と贋物 九 賞ははむ、賚は賜與

祖に丈夫子三人有り。長、諱は良胤、字は朴伯、一菴と號す。幼にして穎敏、志を家學に篤うす。而るに祖に先だつこと七年にして卒す。寶暦庚辰六月七日を以てす。年僅かに十有九。祖其墓に記して曰く、人となり嚴毅、遊朋莫居の時と雖も、未だ嘗て聲色財利の事に及ばず。瑜嘗て謂へらく、行〻且つ長成せば、箕裘の託吾れ其れ憂なしと。如何ぞ不幸未だ冠せずして夭せると。

年僅才有九。祖記二其墓一曰。爲レ人嚴毅。雖二遊朋莫居之時一。未二嘗及二聲色財利之事一。瑜嘗謂行且長成。箕裘之託吾其無憂焉。如何不幸未レ冠而夭。又及レ去二唐津一。別レ墓詩云。寂寞空山一片碑。鏗レ庭憐爾學レ詩時。面容髣髴猶如レ見。淚滴丘前春樹枝。次諱恭胤。字敬仲。卽吾先子也。次諱光寛。四歲夭。

明和丁亥秋八月。携二先子一遊二江戸一。是時都下人士。聞二祖名一。來求レ謁

又唐津を去るに及び、墓に別るゝ詩に云ふ、寂寞たる空山一片の碑、庭に起りて憐む爾詩を學ぶの時、面容髣髴として猶ほ見るが如し、淚は滴る丘前春樹の枝と。次、諱は恭胤、字は敬仲、卽ち吾が先子なり。次、諱は光寛、四歲にして夭す。

一 家の秘傳 二 十年 三 憂落 四 遊び友達と一座する時 五 從ちなる靡不正の色及び金錢上のもとを卽にせず 六 大成す 七 父祖の業を託し繼がしむるに足れりとなり、冥遊とは父祖の業をつぐこと 八 二十歲に及ばずして早死す 九 人氣なき山 一〇 孔子の手習屏に夫子の詩を綴りし故事よりして、家庭の教育を受くる義にいふ 一一 顧つきあり〳〵と眼に見る如し 一二 父

明和丁亥の秋八月、先子を携へて江戸に遊ぶ。是時都下の人士、祖の名を聞き、來つて謁を求むる者林の如し。而して多くは之を謝絶す。九月疫を病む。原芸菴・松本尙齋、劑を措いて驗なし。閏九月四日に至り竟に起たず。年僅に半

者如林。而多謝絶之。九月病疫。原芸菴。松本尚齋。措劑無驗。至閏九月四日。竟不起。年僅半百。先子及門人。相議定宅兆江戸城北諏訪山子院洞泉寺。以禮葬焉。後建石勒銘序。芥彦章撰。

吾母土井侯臣。秋田重信女也。年十六歸先子。居一年。祖病沒。先子服除襲就仕。亡何以病致仕。不允。猶乞不止。以是獲譴。繫錮匝年。終削籍。當吾母土井侯の臣、秋田重信の女なり。年十六にして先子に歸す。居ること一年にして祖病んで沒す。先子服除して襲いで仕に就く。何もなく病を以て致仕す。允されず。猶ほ乞うて止まず。是を以て罪を獲、禁錮匝年、終に籍を削らる。初め其の辭を乞ふに當つて、母、父母を省す。父母、母に謂つて曰く、汝の爲に壻を擇ぶ時、以爲へらく、原氏の子才行有り、又其祿を言へば、則ち二百石なりと。是を以て之に妻す。豈に謂はんや、世を嗣ぐに及び、祿其半を減ぜんとは。然れども猶ほ以て飢うること無かる可し。其の仕を辭するに至つて

一 四年 ◎ 流行病 ◎ 藥餌を投ずれども効果なし ◎ 五十歳 ◎ 墓地 ◎ はりつける

初其乞辭也。母省父母。父母謂母曰。爲汝擇壻時。以爲原氏之子有才行。又言其祿。則二百石也。是以妻之。豈謂及嗣世。祿減其半。然猶可以無飢矣。至其辭仕。則不自揆其量也。夫士無恆祿。何以衣食。其轉死溝壑。計日可待也。汝與配如此者永歷患難。不如更は、則ち自ら其量を揆らざるなり。夫れ士にして恆祿なければ、何を以て衣食せん。其の溝壑に轉死せんこと、日を計つて待つべきなり。汝此の如き者に配して永く患難を歷んよりは、如かず、更め適いて以て良匹を得んにはと。母淸然として涕を零して曰く、嗚呼大人、何ぞ此言を出せる。妾聞く、女子の常理は二庭を踐まずと。又先舅の時、古の烈女を語るを聞くに、其の稱述せらるゝ者、或は苦を嘗め、或は死を致し、以て其操を易へず。今や夫妾を去らず。妾奈何ぞ自ら去るを求めん。且つ祿有りて配し、祿無ければ則ち離る、不義焉れより大なるは莫し。假令再醮以て身錦繡を纏ひ、口粱肉に飽くとも、豈に願ふ所ならんやと。父母之を奪ふこと能はず。然るに猶ほ愛を垂れ、時時喉を勸めて置かず。而も母の堅操回らず。遂に先子に從ふ。其先子に事ふるや、儼として孟光の風有り。先子世を終るに至るまで、二十八年一日の如し。又其姑に侍するや、孝養備に至る。其の始めて江戸に來り、市中に僑居するや、

適以得二良匹一也。母清然雪レ涕曰。嗚呼大人。何出二此言一。妾聞女子常理不レ踐二二庭一。又聞三先身之時語二古烈女一。其見二稱述一者。或會レ苦。或致レ死。以不レ易二其操一。今也夫不レ去レ妾。妾奈何自求レ去。且有レ縁而配。無レ縁則離。不義莫レ大焉。假令再醮以身鑊二鼎一。肉二糜豆所一レ願哉。父

時に比鄰相謂つて曰く、新來の人、姑と婦と恩情篤密なり。此れ必ず夫は贅壻(二〇)にして、妻と母とは則ち眞の母子ならん。然らずんば則ち爲に心を相盡すこと、何ぞ斯の如くなるを得んやと。此言以て其平生を想ふ可し。初め先子に從つて將に古河を辭せんとするや、號泣天に籲んで曰く、請ふ蚤く妾の命を奪ひ、父母をして、永く其世を同じうして再會期無きを愛へしむる勿かれ。若し之を得ずんば、則ち歲に一再必ず父母に見え、藩を去ると雖も、猶ほ去らざる者のごとくならしめよと。既にして江戸に來り、先子大府の仕籍に入る。此より後數〻父母に見ゆることを得たり。是に於て父母自ら前言を悔ゆと云ふ。善亦數〻其邸に出入し、謁を侯及び世子に辱うす。著す所賢相野史四卷、許我志三卷、及び校刻する所雙桂集六卷、皆之を上る。褒稱賜を拜す。以て母の夙志に酬ゆるに足れり。善不肖幼にして讀書を好まず。其の句讀を先子の膝下に受くる時、日に督責を蒙つて、猶ほ怠惰聳めず。弱冠始めて學ばざる可からざるを覺れば、則ち先子に背かる。此れより母寡居善く家事を治め、余をして一に事に鉛槧に從はしむ。今に至るまで一の得る所有る無しと雖も、而も猶ほ未だ箕裘を墜さざる、亦母の賜なり。母佛を奉ぜず。未だ嘗て珠串を掌にして佛號を誦せず。嘗て曰く、雙桂先生は儒宗なり。其子敬仲先生も亦儒なり。其子公道亦復俗士に非ず。之が婦と爲り、妻と爲り、母と爲る、奈何ぞ彼の天堂地獄の說を信ぜんと。聞く者謂つて女中の丈夫と爲す。今茲文化丙子年六十六歲、健食恙なし。嗚呼其節義天性に出づと雖も、亦祖及び先子の敎化に由つて然る無きを得んや。因つて併せて之に及ぶ。

一 喪終る　二 辭職　三 一周年　四 土籍　五 往きて安否を伺ふ　六 自己の惱獄を計り知らざるもの　七 道のみぞはたにのたれじにする　八 遠れ離ひて長く離別する　九 長きつれあひ　一〇 杜ち〻と涙を落す　一一 二家に隙がず　一二 喜樂　一三 美味美肉　一四 その志を變へしめがたし　一五 そむきはなる　一六 堅き眞樹動かず　一七 情合があつし　一八 入失、いりむこ　一九 涙を流す　二〇 同じ世に生きながら再び面會するの時期無し　二一 喜府　二二 農事を勤めし言　二三 古河侯の邸　二四 お國にあづかり頂戴物あり　二五 平生の

母不レ能レ奪レ之。然猶垂レ愛。時時勤二朕離一不レ置。而母堅操不レ回。遂從二先子一也。餘有二孟光之風一。至二先子終レ世。二十八年如二一日一矣。又其侍レ姑也。孝養備至。其始來二江戸一。僑二居市中一。時比鄰相謂曰。新來人。姑與レ婦恩情篤密。此必夫贅壻。而妻與レ母則眞母子也。不レ然

則爲相二盡心一者。何得レ如レ斯乎。此旨可三以想二其平生一矣。初從二先子一將レ辭二古河一也。號泣顙レ天曰。請蚤奉二妾命一。勿レ使下父母永憂中同二其世一。而再會無期也。若不レ得レ之。則使下我一再必見二父母一。雖レ去レ藩猶中不レ去者上。既而來二江戸一。先子入二大府仕籍一。從レ此後得三數見二父母一。於レ是父母自悔二前言一云。善亦數出二入其邸一。尋二謁侯及世子一。所レ著賢相野史四卷。許我志三卷。及所二校刻一雙桂集六卷。皆上レ之。褒稱拜レ賜。足三以酬二母夙志一矣。善不肖幼不レ好二讀書一。其受二句讀于先子膝下一時。目擊二背責一。猶怠惰不レ警。弱冠始覺不レ可レ不レ學。則先子見レ背矣。自レ此母寡居善治二家事一。使三余一從二事于鉛槧一。至レ今雖レ無レ有二一所レ得一。而猶未レ墜二箕裘一。亦母之賜也。母不レ奉レ佛。未下嘗掌二珠串一誦中佛號上。嘗曰。雙桂先生儒宗也。其子敬仲先生亦儒也。其子公道亦復非二俗士一。爲二之婿一。爲レ妻。爲レ母。奈何信二彼天堂地獄之說一。聞者謂爲二女中之丈夫一。今玆文化丙子年六十六歲。健食無レ恙。嗚呼其節義雖レ出二於天性一。亦得レ由二祖及先子之敎化一而然乎。因併及レ之。

希望をはたす　四二　二十歲　四三　父死す　四四　やもめ暮し　四五　鉛は文字を消す用、類は古へ紙に代用せる板、卽ち文鎭の意　四六　父祖の墓　四七　數珠、　四八　佛數にいふ地獄極樂の說　四九　十三年

先哲叢談終

大正十二年六月十八日　印刷
大正十二年六月廿一日　發行

英文叢書
先哲叢談（非賣品）

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

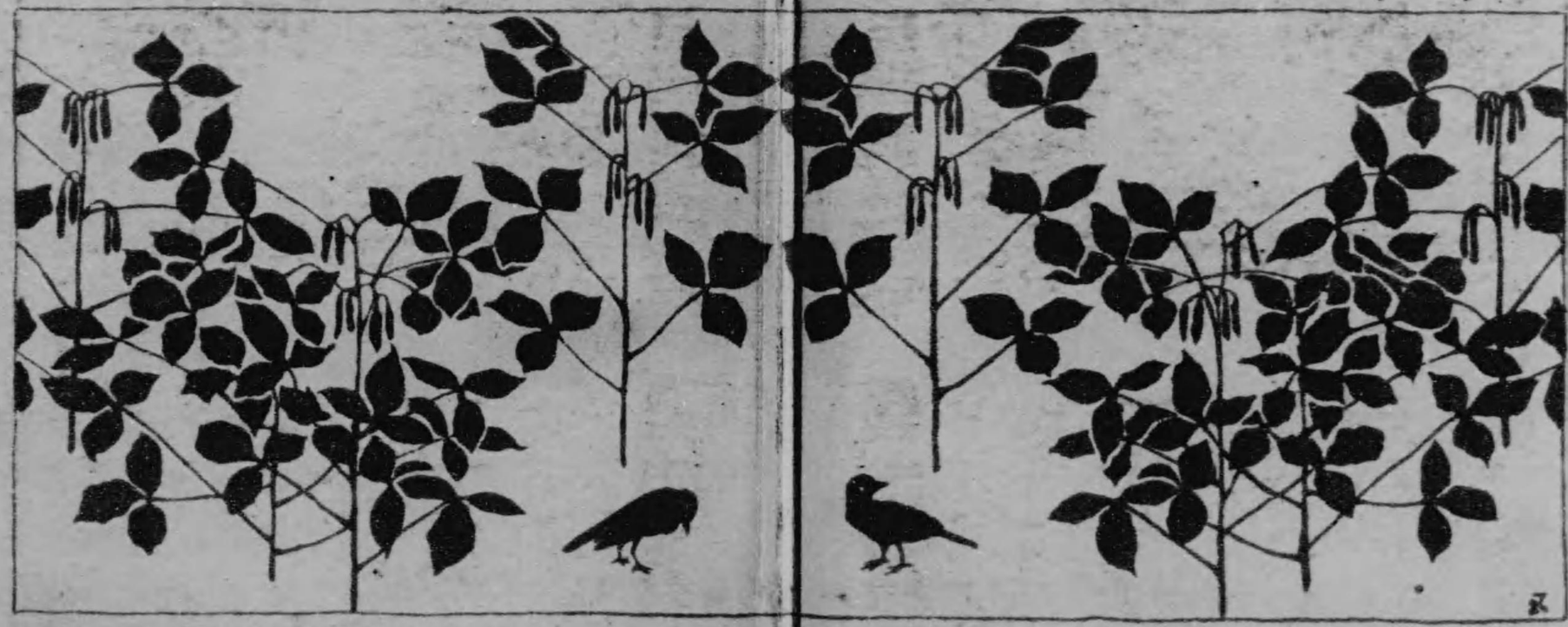
東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行兼印刷者　三浦理

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷部

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

不許複製

375
42



淺